

廿二史考異に
蘇天に臣奉
略に遼西とあ
るを採きて遼
東とあるに誤
なりと断せり。

したり、これ金軍が同地方に於て幾多の城市を克復し殊に遼陽即ち東
京も亦その有に歸したるを以てなり。この府城は詭計を以て再び蒙古
軍の有に歸したり。將軍木訶里の千人の兵を添えて分派したる肅也先
Shao-essen と云へる一將校あり、金帝の新に任命せる東都留守が赴任の
途上にあるを聞き、之をその半途に要して殺害し、而して之が辭令書を
奪ひて親から東京に向ひ同市の城門に於て住民の期待せる東都留守
として守備隊長に接せり。かくて鄭重なる案内を受けて留守の官邸に
至り守備隊各將校の來りて敬意を表するに遭ひその兵備の盛なるを
見て聊か驚けるが如くなりしが、その首都より來れること、首都にては
平和の容易に破れざる可きを信すること並に多數の壯丁を空しく軍
旗の下に止む可からざることを説き、將來若し危険の起るあらば直ち
に通知す可しとて命じて守備隊の大部分を歸休せしめたり。三日の後
木訶里天明を以て來着して城内に入り、及に明ぬらすして之を略せり。
この城市の陥落に次で遼東全部征服に歸するを得たり。

三月

一二一五年木訶里は遼西に轉じ老哈Loh-河の西岸に位せる大寧府即
ち當時の北京を圍まんとせり。金將銀青 Nagai 大軍を率ひて出でて
之を拒ぎしが花道Hua-tao附近に於て敗軍し再び市内に退却せり。間もな
く二人の長官ありて之を殺して將軍宙答虎 Oukhoui Idoucou を推して
司令長官となせり。この新守將は將軍史天祥 Shi-tian-shan の圍を受けて
降參せしが、木訶里は降服の遅かりしを怒りて都城を屠らんとせり。然
るに肅也先が若し夫れ遼西の都府の降服せるに當りて而もなほ之を
待つことかくの如くんば、將來爾餘の城市の降服を望むも豈得んやと
諫めしによりその意見を聽せり。かくて木訶里は宙答虎をして北京留
守のことは行はしめしが、而も同市に於ける軍隊の指揮は之を契丹將
軍吾也兒 Ouyei に委ねたり。

遼東叛亂の續
定

前年金將張鯨 Chang-king 遼東に於ける錦州に據りて王號を稱し、次
で成吉思汗に投誠し、一二一五年一萬の兵に將として直隸に派遣され
たる軍隊に従ふ可しとの命令を受けしが北京の東方約五十五リーグ

二二六年
一月

なる永州(永平州)に至るや病と稱してその進軍を中止せり。木訶里モカ之を疑ひ將軍石抹先シヤクマシShao-Ou-jinに命じて之を監視せしめしが石抹先は次で之を拘引して斬に處せり。

七月

二月

張鯨チヤンキョウに弟あり張致チヤンチ Tchang-tchiと稱す、兄の爲に仇を報いんとし錦州の刺史を殺し次で王號を稱し爾餘の六城をも略せしが而もこの六城は間もなく木訶里モカの克復する所となれり。木訶里は錦州に近きしも城塞堅固にして且守兵精銳を集めたり。乃ち張致を誘ひて野戰を試みんとし將軍吾也兒ウヤエに命じて往きて山脈の間に位せる溜石山堡シヤシヤンShi-shi-pouを攻撃せしめしに、豫期に違はず張致はその兵力の一部を割き親から開城してこの要地の救援に赴けり。之が監視に任せる蒙古不花モンゴウMoungou-boucaは直ちにその騎兵の一部を派して張致の歸路を占領せしめたり。數リ一グの遠きチヤンチにありし木訶里も亦張致の出陣を聞くや夜中兵を進め天明に至りて之に遭遇せり。張致は同時に腹背より攻撃を受けて全く敗軍し辛うじて再び城内に入るを得たり。包圍攻撃を受けたる後數

二月

ば開城出撃を試みしが士卒を損せしを以て雖て一意防禦にのみ盡瘁せんと決心せり。一ヶ月の末に至り部下の監軍高益カウイKao-iと云ふもの張致を縛致して之を木訶里モカに引渡せしを以て木訶里は即ちその首を刎ねしめたり。波以に據る。

遼東遼西既に歸服せるより木訶里モカは成吉思汗の許に復命す可しとの命令に接せり。成吉思汗は一二一七年には土拉河畔ツラハに駐營せしがその將軍の戦功に對して大に行賞せり。乃ち群臣の參列せる時に於て公然勅語を下してその偉大なる資質を嘉みせる後魯國王ロウワンKou-ouangと云へる支那的稱號を授け併せて之を子孫に傳ふるの權を與へたり。木訶里は札刺亦兒部チヤクヤTschak-ia-er部Tschak氏の出身なり。始め木訶里モカか支那にありて交戦するや支那人之を稱して國王と呼べり。而して成吉思汗は更に木訶里モカを支那に派して征服の事業を繼續せしむるの心算ありしよりこの稱呼の吉兆なる可きを思ひて之を確認せるなり。之と同時に又木訶里モカを任じて支那に於ける軍司令長官となせり。かくて陣列を布ける軍隊に向て木訶里モカの制令を奉

木訶里を軍司令官に任じて支那に派す

第四回の唐古特入寇
廿二史考異に陳極通鑑續編薛應旂通鑑考索李遵瑊の西涼に走るは一二一七年なりと断ぜり。太閤汗の子哈刺乞解に奔る

すること朕に従ふが如くせよと命じ、その委任せる権限の證として木訶里に金印一箇を交付せり。曰く「太行山脈以北の支那州縣は朕これを經略しぬ、同山脈以南の州縣を征服するは即ち卿の任なり」と。木訶里は二万三千の蒙古軍汪古特人一万、Oushichou 一千、兀魯特人 Onoules 四千、亦乞刺思人札刺亦兒人二千より成る。と契丹女眞の兵二軍とを以て組織せる軍團に將として出發せり、契丹女眞の兵を指揮せるはその民族の出身なる烏也葉兒 Oya と秃花 Poghān とにして何れも支那語にて元帥 Yang-shai と稱する一萬人長の職を授けられたり。呂波智 参照
成吉思汗は一二一八年に四度夏の王國に入寇を試みたり。夏王李遵瑊はその首府の蒙古兵の圍を受け易きを見て甘肅の西涼に避難せり、今の涼州府これなり。呂波智に據る。この年高麗も亦蒙古人に降服せり。成吉思汗は時にその注意を西方に轉じたり、これ成吉思汗の仇敵にして同方面に奔竄せる乃蠻部最後の汗の子古出魯克が哈刺乞解の帝位を篡奪して六年以來之に據れるが爲なり。

哈刺乞解帝國の沿革

哈刺乞解の帝國は遼朝の一契丹公子によりて建てられたる所に係る。女眞人即ち金人の契丹帝國を亡ぼすや契丹最後の皇帝耶律延禧の一族にしてその元帥たりし耶律大石智には Faischi Tairion とあり Tairion は一二一三年に既に窮迫の極に陥れるこの皇帝と分れ約二百人と共に陝西の北西に位せる地方に走れり。この地方は即ち遼帝國の一部たりしを以てその牧民官并に部族長等は高名なる阿保機の後裔として之に忠誠を盡せり。耶律大石はその給與せる軍隊に將として土耳其斯坦に向て進めり。回紇王畢勒哥 Bileg に向てその領土を通過せんことを求めしに畢勒哥は來りて之を境上に迎へ馬駱駝綿羊等を夥しく贈り質として子孫を納め臣隸となれり。耶律大石は喀什噶爾、葉爾羌、和闐諸國並に Visajon 并に土耳其斯坦阿刺比亞人並に波斯人はシル河より支那の大砂漠までの境としシル河に接近せる地方のみなり。を征服せり。當時土耳其斯坦は波斯の古代史上に有名なる土耳其種出身の君主 Khasan Mahmud の後裔なりと稱する王朝第二十代の君なる Khasan Mahmud に屬せり。Mahmud は僅に

トランスオクシアナの領土のみを保ちしが數年の後この地方も亦哈刺乞解人に襲はれ遂にその外藩となれり。無に花刺子模 Khorazm も亦久しく同一の運命を避くること能はず、耶律大石の軍隊之を侵して放火虐殺爲さざるなく、花刺子模王朝第十二代の帝王阿切斯 Alish は黄金三萬的那の歳貢を條件として媾和を請へり。遠にかくて戈壁 Gobi の大砂漠とアマ河との間并に西藏の山嶺と西伯利の間を介在せる地方をその制令の下に歸服せしめたる後耶律大石は一一二五年に古兒罕 Gou-Khan 即ち大汗と稱しその都を八刺沙袞 Peh-Sagoun 市に定めたり。宋の靖康二年西遼都を虎思斡魯朵に定む。耶律大石は佛教信者にして隨てこの宗教は哈刺乞解の新帝國に於て優勢となれり。之が太祖は武人として材幹を具へしに加へて支那文學に精通し青年の時翰林に擢でられしが、一一三六年金人に對して干戈を交へ以てその遼帝室より掠奪せるの邦土を回復せんとし之が準備に汲々たるに際して歿せり。一子耶律夷列 Yelü-Yiei 年なほ幼冲なりしを以てその母塔不烟 Tabouyan 一一四二年

遼史に曰く大石通遼漢字。天慶五年進士第。翰林承旨。奉。遼。帝。旨。送以翰林爲林牙。故稱大石林牙。

まで之が後見に任せり。一一五五年耶律夷列の歿するや妹普速完 Poshon 其の子直魯克 Tchilonou 成年に達するまでの攝政に任命せられ、直魯克は一一六七年来りて漸く政權を親らするに至れり。直魯克は遼に Visile 耶律夷列の子に在り一二〇八年(回教曆六〇四年—五年)乃蠻部最後の汗の子が往きて哈刺乞解に避難せる時には直魯克なほ位にあり、之を款待し且その女を之に配せり。直魯克は狩獵をこととし快樂にのみ耽りしを以て政權頗ぶる振はず、既にその三大附庸國の君主即ち畏兀兒部王、トランスオクシアナ侯、并に花刺子模の支丹の離叛を來せしが、應て其女嫁をして篡奪の陰謀を廻らさしむるに至れり。乃蠻公子は直魯克部下の將軍をして多く心を己に寄せしめられたれば之に父汗の軍隊敗殘の兵を合する時は以て著るしき軍隊の頭に立つを得可し。乃ちその計畫の實行に着手せんとし、直魯克に向て往きて葉密兒 Inil 哈押立克 Cayale 別失八里 Bisch-Bale 等の地方に亡命せる乃蠻部民の殘兵をその軍旗の下に糾合するの許可を

哈刺乞解皇帝
に對する古出
魯克汗と花刺
子模支丹との
同盟

求め且この軍隊を召集するは之を直魯克の爲に用ゐんと欲するが爲のみと誓へり。哈刺乞解の君王は喜で之を裁可しその發するに臨みて厚く餞別する所あり且古出魯克汗 Goutalouk Khan の稱號を之に授けたり。土耳其語にて強大なる王侯の義也。
古出魯克の一度現はるるや實に父の舊部は先を争てその軍旗の下に集まれり。成吉思汗の兵を受けて來奔せる蔑兒乞部長も亦之に合せり。乃ち哈刺乞解に入寇して掠奪を縦にし且劫掠をこととするの賊群は新にその旗下に投せりされど兵力未だ以て哈刺乞解を仆すに足らず勢ひ與國を求めざる可からず。その眼は自から花刺木模并に波斯の君主たる支丹謀罕默德に向へり。謀罕默德は是より先直魯克の宗主權を脱ぬかれたるのみならず更に撒馬兒罕并にトランスオクシアナの君侯錫斯滿 Osman の貢賦を受くるに至れり。古出魯克の之に向て協同して哈刺乞解を襲ひ協力の報酬としてその西方の領土を許さんことを提議するや好意的回答を得たり。既にして哈刺乞解の一軍は再び錫斯

滿をして制令を奉せしめんとし撒馬兒罕に向て派遣されしを以て、謀罕默德は之が援に赴きしがその到るに先ち哈刺乞解の軍は同市の圍を解けり。これその君王が古出魯克の來りて攻撃を加へしより之に向て召還の命令を發したるが故なり。
乃蠻の公子は哈刺乞解軍隊の不在に乗じて Ozkend なる古兒罕の寶庫を掠め更に進んで不意に八刺沙衮を襲はんとせり。古兒罕は高齡なりしが上に部下の兵極めて乏しかりしにも拘はらず敵軍と干戈を交へ Techniboude 河畔に於て全く之を破り且その士卒の多數を擒にせり。古出魯克はその攻撃の失敗に了りしより意氣沮喪して退却し將にその計畫を放棄せんとせり。
然るにこの間護罕默德は錫斯滿侯と共に哈刺乞解の領土に入寇し塔刺思 Tarsaz の東に至りて將軍塔尼古 Tangon の指揮せる敵兵に遭遇し之と交戦して契丹兵を潰走せしめ且塔尼古を擒にするを得たり。敗兵の背進するや自國の領土に於て劫掠至らざるなく爲に八刺沙衮の住

民は却て支丹謨罕默徳の管轄を受けんことを欲し大汗の軍隊に對してその城門を閉鎖せり。かくて包圍を受くるや防備に努むること十六日間私かに支丹謨罕默徳の來りて救援を與ふるを期待せり。而も市城は遂に攻拔され住民は殺戮に遭ひ死者の數四万七千人に上れり。

古出魯克の哈刺乞解征服

時に大汗の財政窮乏を告げしが將軍 Mahmoud Bai と云ふもの富裕なりしより強逼的に金錢上の犠牲を命せられんことを憂へ古出魯克の掠奪せる財寶を克復したる軍隊に向て之が上納を命ず可しと建議せり。軍隊の長官等は此の處置に對して蜂起し怒て退散せり。古出魯克その解散に乗じて疾驅して再び來り不意に大汗を襲ひ之を擒にせり。これ一二一一年或は一二一二年(六〇八年)のことなりとす。既に之を獲るやその汗號は依然として之を用ゐるを許し且この革命の後二年にしてその殞せるの日まで之を待つに尊敬を以てせり。呂の校訂者はその第八册一四九頁の註に哈刺乞解即ち西遼のことを記し一二二四年より一二〇一年まで繼續すと云はれり。直魯克は一二一一年若くは一二二一年まで君臨し西遼は八十七年にして亡びたり。Viskelan の Dr. Herbelot 著 *La Sibirie orientale* 附錄にも亦 *Tyachinde* の蒙古語にも西遼の略史を掲げ直魯克出服せる時古出魯克兵を伏せて之に擒にしその位を奪へるは一二〇一年(嘉

泰元のことなりとなせどこれ明に支那史家の誤謬なり。Viskelan は又土耳其斯坦の哈刺乞解王國と Kerem の哈刺乞解王國とを混同せるが如し卷末の註第六參看智に *Tou-kei Tai-tou* とある *Tou-kei* は *Kei Tai-tou* ならん。

哈刺乞解の汗位を襲へる古出魯克は阿力麻里 *Almalig* の汗 *Ozar* を服従せしめんと欲し幾度か之に向て兵を進め遂にその出獵に乗じて不意に攻て之を擒にし斬に行へり。喀什噶爾和蘭の住民も亦服従を拒みしを以て古出魯克は古兒罕の會て拘禁したる喀什噶爾汗の子を放免して歸國せしめしに、その喀什噶爾の城門に着するやこの少年公子は虐殺に遭へり。この地方を降服せしむるが爲古出魯克は軍隊を派して收穫時に際し劫掠を行はしめこの損害を蒙らしむること連年に及び兩三年の後に至りて遂に住民は飢饉に苦みて是非なく服従するに至れり。上述せるが如く乃蠻部民の大多數は基督教を奉せしを以て古出魯克も亦始めその信者として生長せしが、大汗の女なる王妃の勸誘によりて佛教を信することとなれり。故にその兵力によりて和闐國を征服するやその住民に通りて誓て回教を棄て基督教若くは佛教に就きて

任意その好む所を取らしめんとせり、加之、回教徒に向てその信仰の誤れるを説かんと稱し、城壁内の一平原に回教僧侶を召集し、宣言すらく、何人にもあれ、その宗教に就きて論議を戦はさんとするものあらば、出でて雌雄を決せよと、茲に於て式僧 *Imam* の領袖阿拉哀丁、謨罕、默德 *Al-id-din Mohammed* は古出魯克に近づき、熱心に回教を辯護せり。汗はその抗辯に激し、怒に乗じて *Mahomet* に對して誹謗の言を放ちしかば、式僧は憤然として叫んで曰く、『汚泥汝の舌を覆へるぞ、嗚呼、眞の信仰の敵よ』と。古出魯克は命じて之を捕縛せしめ、拷問を加へて強逼的にその信仰を放棄せしめんとせしも、その効なかりしかば、遂にその學院の門前に於て之を磔刑に行へり。爾來領内至る處、回教徒に對して迫害を加へたり。成吉思汗は宿仇をして穩かにその篡奪せる汗位に安んせしむること、を欲せざりき。故にその西方に進みし時、古出魯克に對して一二一八年（六一五年）を以て諾延哲別 *Noyan Tcheké* の指揮の下に二萬人の一軍を分遣せしに、その近くや古出魯克に喀什噶爾に避難せり。同市に入るに當

蒙古軍の哈刺
乞殿王國征討

並に古出魯克
の最後

り哲別は信仰の自由を宣言せしかば、忽ちにして住民はその家屋を宿舍とせる古出魯克の兵士を虐殺せり。蒙古軍は直ちにその敵の追撃に着手し、巴達克山 *Badakhschan* の山間地方に於て之を捕獲し、その首を刎ねたり。（參照） 成吉思汗は哲別の遠征上首尾の結果を奏せりと聞くや、（注） 罕、太陽汗、古出魯克汗等近來滅亡せる諸王侯が敗亡を招きたるは全く慢心の致す所なればとて、同將軍に書を寄せてその成功に對して餘りに得意となる勿れと戒めたり。哲別は數年の後に至りて遠くアルメニア、グルシア、露西亞等に蒙古軍の勇武を輝かしたるの名將なるが、元來久しく鐵木眞の敵たりし蒙古部別速特氏 *Yisouts* の出身なりき。鐵木眞が別速特氏と戦ひて之を破りし結果、哲別を始として同氏に屬する爾餘の勇士は捕虜となるを耻ぢ、又死するを好まずして遁匿せしが、一日鐵木眞林藪に野獸を驅りしとき、哲別は偶然一團の獵手の圍む所となれり。蒙古の領袖は之を追捕せしめんと欲せしに、その宿將の一人なる博郭兒濟

Bougoutji 洪鈞曰く博爾朮也。 親から往きてこの勇士と闘はんことを求めしかば、
 鐵木眞はその請ふ所に任せて口頭部の白色なる良馬 智に蒙古語にて Fela-
 Schweisfuchs と云へるに同じ野生の鹿 Conlan と云ふ獨逸にてを貸し與へたり。博郭
 兒濟追ふて一矢を放ちしが哲別チエッベに中らざりき。哲別はその技倆遙に之
 に勝れ一矢を報いてその敵手の乘馬を斃し疾風の如く走れり、而も間
 もなく糧食缺乏に苦み決心して成吉思汗の許に至りて之に仕へんこ
 とを乞へり。成吉思汗はその勇敢なるを認めて先づ十人を與へて之を
 指揮せしめその舉措の宜しきを見るや更に百人長となし次で千人長
 に進め最後に萬人長に登庸せり。哲別の首尾克く古出魯克汗に對する
 遠征を終るや、曾て主君の一良馬を殺して損害を與へたるを思ひて之
 を償はんと欲し、その征服せる地方に於て口部の白色なる良馬千頭を
 獲て之を成吉思汗に獻じたり。 智別速特氏の條參看。哲別とは蒙
 古語にて木もて獻となせる矢也。
 蒙古皇帝の管轄はかくて哈刺乞解に及べり。哈刺乞解は前述せるが如
 くその領内に喀什噶爾、葉爾羌、和闐等の諸國を包括し而して這般諸國

花刺子模帝國
に就て

の勤勉なる住民は多くは回教徒にして農業工藝は勿論商業に従事し
 タルタリーの物産と支那印度の物産とを交易せり。 Marco Polo 旅行紀參照。 成吉思汗
 の領土は支丹護罕默徳の領土と隣接地となり、蒙古の征服者は忽ちに
 してこの新隣國を攻撃するの理由を得ざるまでも少くも相當の口實
 を看出すを得たり。蓋しその繁榮なる帝國はタルタリー遊牧民族の貪
 婪心に對して美なる好餌を供給したればなり。

第六章

セルジック政府の廢址に建てられたる花刺子模帝國は幾多の邦土を併
 呑して次第にその境域を擴張しシル河より波斯灣に至り印度河より
 Irac-Arēb 並に Azerbaijan に至るの地を包有するに至れり。第十三世紀の
 初に當りてこの帝國の君主たりし阿拉哀丁護罕默徳 Alai-ud-din Moham-
 med の祖先は奴世的斤 Nouschekin と稱する土耳其種に屬する一奴隸

にして始めセルジク王朝の支丹瑪里克沙 Melikshah の臣下なる一被釋放者の有に屬せしが次で支丹の有に歸して水瓶棒持の職に拔擢されたり而して花刺子模縣はこの職に附屬せり。回教王朝の歴史には土耳其人の奴隸の一躍帝王となれるの例證極めて多し。土耳其種族の捕虜は容姿の美なると氣力の旺盛なると活潑なるとによりて波斯に於ては價格最も大なりき。ライデン文庫藏 Ibn Honein 著 Memsalik Memalik(地理書)亞刺比亞文寫本參看。 故に邪教を奉じ遊牧を事とせる土耳其種族の居住地なる裏海の北方并に東方に當れる地方より若年の時代に於て多數群を爲して波斯に送られたり。蓋土耳其種族は常に内訌を事とし互に他の兒童を奪ひ而して之を奴隸商人に賣却せるを以てなり。這般の青年は回教國の帝王侯伯によりて高價に購はれ Mahomet の宗教を以て教育されその多數は軍人として養成されたり。かくてその主人の爲に護衛隊を組織し又彼の亞細亞の顯貴の夥しく役使する家庭の從僕として之に仕へたり。主人の寵を受けたるものは釋放せられたる後文武官の最下級に登庸せられかくて或

は進んで一縣の政治を掌るに至るものあり又或は風雲に乗じて遂に之が帝王となれるものあり。

かるが故に土耳其人の回教國に入寇するに先ちその種族出身の奴隸は回教國內に於て既に有力なる人物となれるもの少からず。波斯は亞刺比亞人の爲に征服せられてより一旦その文明著るしく退歩し次でハリフの帝國并にその大諸侯の政府の下に再び繁榮を回復せしが第十一世紀の中葉に當り裏海とシル河との間に連亘せる砂漠的曠野より來れる土耳其種族の遊牧民族烏古斯部 Oghuzes によりて征服された。Plin-Ironcal の地理書に據るには Oghuzes は第十世紀に於てはセルジク Seljuk の花刺子模トランスオクシアナ地方の曠野に漂泊せるが如し。 子孫なるその君長統率の下にこの兇猛なる遊牧民族は益々その征服を進めて地中海并にマンマラ海 Propontide の沿岸に達し多數のその部族はこの厪然たる帝國内至る處に舍營してその住民なる波斯人亞刺比亞人シリア人アルメニア人并に希臘人に對して野蠻の桎梏を課して之を苦めたり。この時代よりして波斯并にその西隣地方の歴史は唯こ

れ千篇一律、このセルヂック土耳其種族の軍事的遠征劫掠荒廢并に最後に内訌の記事たるに過ぎず、蓋地方州縣の政治と部下軍隊に對する指揮の全權とを委ねられたる之が領袖輩は纏て中古の時代に於ける歐洲の大諸侯と同一の權限を享有するに至りたればなり。繼嗣の問題起る毎に必らず内亂の動機を生じ、その反對者を仆して位を襲へるの支丹は冊立に功勞ある自派諸侯 *beys* の掌裡に主權の要部を割きて之を一任せざるを得ず、かくてセルヂック朝の帝國は第十二世紀の終に至り擾亂の極滅亡せり。

波斯に於けるセルヂック朝の政權に致命の打撃を與へたるものは即ち奴世的斤の後裔なりき。この被釋放者の子にしてその食邑の領有權を相續せる庫脫拔丁謨罕默德 *Coub-ud-din Mohammed* は花刺子模國君 *Khovarschah* の稱號を得たり、これ同地方が亞刺比亞人に征服さるるに先ち花刺子模 *Khovarschah* 譯の發音は *Khovarschah* の舊國君が使用せし稱號なり。謨罕默德の子阿切斯 *Asiz* は幾度か瑪里克沙の子にしてその君長たる散者耳

その範圍の次第に擴大せること

Sindjar に對して干戈を交へ而して哈刺乞解の汗に對しては歲貢を納むるの約を立てたり。一一五七年支丹散者耳の死後阿切斯の子伊兒阿斯蘭 *Il-Arslan* はホラサンの西部を經略し、其子塔喀施 *Tacsch* は一一九四年にセルヂック王朝の支丹托古洛耳 *Togolul* と戦ひ之を戰場に仆して *Tuc Adjen* を奪ひたり、托古洛耳死し散者耳も亦既に死せるより波斯に於けるセルヂック王朝の兩家は茲に絶え、塔喀施はハリフ、那昔爾 *Nasir* よりその所有せる領土に封せられたり、かくの如くにしてイランの帝國はセルヂック土耳其人の手より花刺子模土耳其人の手に移れり。阿拉哀丁謨罕默德は一二〇〇年に父塔喀施の位を襲ひし後バルク、ヘラット兩州を併吞してホラサン全土を領有するに至れり、間もなく *Mir-zenderan* 并に *Kerman* も亦その制命を奉ずることとなれり、茲に於て謨罕默德は其勢力能く優に哈刺乞解皇帝の羈絆を脱するに足れりと信せり、抑も同皇帝は偶像信者なりしかば曾祖父以來累代之に對して貢賦を納めしことは謨罕默德并にその臣下の深く屈辱とせし所なりしな

り加之撤馬兒罕并にトランスオクシアナの君侯錫斯滿の斷然この舉に出でんことを乞へるあり、錫斯滿も亦古兒罕の臣隸なりしがその領内各地に駐在して貢賦徵收のことに當れる哈刺乞解理事官の收斂に苦み遂に之を忍ぶ能はず、謨罕默徳に向て之が羈轡を脱するに於て一臂の勞を假さば甘んじてその臣隸となり従來哈刺乞解の汗に與へたると同一の貢賦を納付せんことを約せり。

謨罕默徳は私に哈刺乞解と絶交するの時機を待ちしに機會は忽ちにして來れり、哈刺乞解の一官吏來りて歲貢を受けんとし支丹に謁見するの許可を得習慣に従ひて席をその側に占めたり、謨罕默徳は恰かも裏海北方不毛の曠野に住へる邪教徒欽察部族 Kipchaks に對して戰勝を博したりし際なるを以てその天與の自尊心は益々高められ、最早この尊嚴を冒瀆す可きの典禮を容認する能はず怒て汗の使節を寸斷す可しと命せり。

この抗敵行爲を執れる後謨罕默徳はその兵に將として哈刺乞解の領

(六〇五年)
一〇〇八年
九年

土を侵せしが戰敗れてその將校の一人と共に捕虜となれり、然るにこの將校自若として毫も狼狽せず支丹を以て我が従僕なりと稱して之を信せしめ、數日の後贖價の議成るや之を郷國に遣して約束の金額を齎らしめんことを諮れり、之を捕虜とせるの敵將は許可を與へしのみか却てこの使者に一人の護衛を附したり、かくて支丹は虎口を脱れて歸國せしに是より先その死去の報傳はるや弟阿立希耳 Alyshir は既に Taberistan に於て自立しヘラトの知事たりし叔父 Emin-ul-Mulk は同地方の君主たらんとし之が準備を講じたりしと云ふ。

翌年謨罕默徳はその臣隸たる撤馬兒罕の支丹と共に哈刺乞解に向て第二回の遠征を試みたり、乃ち Fenaket に於てシル河を渡り塔尼古の指揮せる敵軍に對して前章に述べたるが如く戰勝を博し、次で勝に乗じて土耳其斯坦を征服して Ozkend に達し同地に知事を駐在せしめたり、偶像教徒に對するこの戰勝の報は花刺子模帝國の民をして狂喜措く所を知らざらしめたり、支丹の政權を尊重するの熱心はその極度に達

(六〇六年)
一〇〇九年
一〇〇年

し、附近の諸王侯は皆使節を派して、戦勝を祝せり。その華押(Fougen)を署するに當り、御名の次に地上に於ける上帝の保護者と云へる佳句を挿入し、慣習に従ひその稱號にアレクサンドル第二の稱呼を添えんとせり。されど、謨罕默德は却て散者耳と云へる異名を採用せり。何となればこのセルヂック朝皇帝の治世は四十一年間に亘れるを以て遂に吉兆なりと信じられたればなり。

首府花刺子模に歸るや、支丹はその女を君侯鏑斯滿に嫁し、花刺子模の理事官は哈刺乞解汗の代官に代て撒馬兒罕に駐劄せり。然るに暫くにして鏑斯滿はこの理事官の措置に對して不快を感じてその君長を更めたるを悔ひ、古兒罕に投誠せる後、悉くその首都に滞在せる花刺子模人を殺さしめたり。この報に接するや、謨罕默德は痛く激昂して直ちに撒馬兒罕に進軍せり。士卒は雲梯を攀ちて城内に入り、前後三日間唯劫掠虐殺のみをこれとし、次で君侯の立て籠れる衛城を圍みて之を陥れしかば、鏑斯滿は頭より纏衣を垂れ、頸に白刃を懸け、戦勝者の前に

(六〇七年)
一一一〇年
一一一年

(六〇九年)
一一二二年
一一三年

出でて憐を乞へり。支丹は之を助命せんと欲せしも、その女鏑斯滿の虐待を蒙り且饗宴に際して互に寵を争へる古兒罕の一女の爲に侍女のことを行はしめられしより、夫を殺さんことを哀願して止まず、遂に鏑斯滿はその家族を擧げて共に殺戮に遣へり。かくて謨罕默德はトランスオクシヤナをその帝國に兼併し、首府を撒馬兒罕に遷せり。仁達
支丹は又彼のヘラット地方よりガンジス河畔に至るまでの領土を包有したる郭耳(Gor)王國故地の一部を略してその版圖を擴張したり。一二年〇五年郭耳朝第四代の君王支丹希哈波哀丁 Schah-ud-din の死後その印度に於ける所領は總督として同地方に駐劄せる官吏の管轄に歸し、支丹謨罕默德は上文に述べたるが如くバルク并にヘラット兩省を奪ひ、而して希哈波哀丁の姪馬赫模特 Mahmud はその王室の領土につきて僅に郭耳地方のみを留保するを得しが、而もなほ花刺子模支丹に對する朝貢の義務を負へり。馬赫模特は君臨すること七年にしてその宮城に於て暗殺されしが、輿論は支丹を非難してこの犯罪に關係ありとな

せり、ムハハ謀哈默徳の弟公子阿立希耳アリシムは曩に兄支丹と不和を醸せるがため馬赫模特の許に遁れてその居城非洛斯固 Enouzgouh にありしが乃ち之に代て即位し支丹に向て其帝國のこの采邑に對する領有權を允可せんことを乞へり、アリシム謀罕默徳は官吏の一人をして之に封冊を齎らしめしが阿立希耳アリシムがその授與されたる禮服を身に著けんとするや使節は劍を抜きてその頭を刎ね直ちに主君の命令を公にせり、この蠻行の後郭耳クハルの侯國は花刺子模帝國に兼併せられたり。

三年の後、アリシム謀罕默徳は土耳其種に屬する一將軍の手より哥疾寧 Qishning 地方を奪略せり、この將軍は支丹希哈シハ潑シハ哀丁アイトウの舊臣にして郭耳帝國瓦解の際に之に據れるなり、この舊都の記録局に於て偶まハリフ、ナシム那昔爾が郭耳朝の諸支丹に寄せたる公文書を發見し、ナシム那昔爾が花刺子模國君の野心に對して警戒を加へ之を攻撃す可きを慫慂し且哈刺乞得人と同盟してまでも之に反對す可しと云へるを知れり、實にこの王朝最後の兩君主はアリシム謀罕默徳治世の初年に於てホラサンの西部を征服するの

(六二二年)
一二二五年
六年

好機至れりとなし之に對して戰端を啓きたり、この文書の發見せらるるや回教々王に對するアリシム謀罕默徳の怨恨は骨髓に達せんとせり、アリシム「ハリフ、ナシム那昔爾 本名を Abou-l-Abbas Ahmed と云ひ那昔爾景丁亦拉 En Nasiru は一二八〇年以來バクダード教王の位にありて屈せず撓まず花刺子模國勢の隆興を阻抑せんと努めしが毫もその効なかりき、勿論この計畫を實行するに當り自國の兵力を用ゐるを得ざりき、抑も Mahomet の繼嗣の政治上に於ける權威は Irac-Areb 并に Khouzistan の狹隘なる範圍内に限局され、その龐然たる帝國の爾餘各地は相次で亞刺比亞、波斯、土耳其各種族王朝の制御を受けたり、而して回教紀元第三世紀以來波斯にありては既に他海爾朝 Faherides 薩法爾朝 Sofarides 薩蠻朝 Samanides 賽布克的斤朝 Sabuktigin 布葉朝 Poyides 并にセルヂク朝等の一起一仆せるありき、固より這般諸王朝の帝王はその領土を治むるや之を以てバクバード教王より得たる采邑視せしと雖も、そのハリフの朝廷に向て冊封を求めしは單に臣民をしてその政權の合法なるを知らしめんが爲な

りしのみ。アッバース朝のハリフは僅に二種の特権を享有して以て回教徒の間に主権の痕跡を示し得るに過ぎざりき。二種の特権とは公けの祈禱に於てその名を擧げ并に貨幣に之を刻せしむることこれなり。その首都にありても常に實権を行使するを得ず。セルヂック朝全盛時代の如き殊に然りとす。

波斯に於けるセルヂック朝帝國の領土が Tac-Adjem 地方のみを剩しその最後の君王托古洛耳の下に内証に惱まざるや、活潑なる天稟と大膽なる資性とを具へたるハリフ、那昔爾は或はその國內の紛擾を煽動して軋轢を激甚ならしめ或は花刺子模國君塔喀施の援助を求め以てこの強隣の瓦解に著るしく加速動力を與へたり。加之セルヂック朝の滅亡に際しては Tac-Adjem の一部を收めんと欲するの意ありしも、この一大省を征服せる塔喀施は之を割讓するを欲せず。ハリフは數回の企圖失敗に了りて遂に是非なく之を新興國に授くることとなれり。蓋し新興國の當る可からざる遙かにその滅亡に力を假したる舊國の上にあれ

支丹諛罕默德
とハリフハ那
昔爾との費障

ばなり。諛罕默德が父に嗣ぎて位に陞るや那昔爾は郭耳の支丹 Ghia-
tu-ghis を教唆し新國君の踐祚に乗じて花刺子模に攻撃を加へしめんと
せり。Ghiat-ud-din は既にバルク并にヘラット兩省を領有せしを以て更に
爾餘のホラサン各地を渴望し戰端を啓きしもこの劃策を實施せんと
するや難て殞落せり。その弟にして位を嗣げる布哈潑哀丁は花刺子模
に入寇して支丹諛罕默德と Endekehd 附近に戦ひ、哈刺乞解の援兵一萬
人の來りて會戦せるにも拘はらず全軍覆沒、媾和を乞ふの已むを得ざ
るに至れり。

諛罕默德は哥疾寧に於て圖らすこの前年の戰役がハリフの教唆によ
りて起れるの確證を獲、既に那昔爾に對して懷抱せるの怨恨は益々そ
の度を加へたり。龐大なる範圍に君臨し四十萬の大兵を擁せるを以て
セルヂックの支丹に比してその權勢の遙に優越なるを信じそのハリフハ
の朝廷より得たると同一の特權に浴せんことを望めり。乃ちバクダー
ドに部下の總督を置かんとし且公けの祈禱に於て己れの名を擧げん

こと并にハリフが支丹の稱號を授與せんことを欲せり。乃ちこの要求を爲さんが爲め深く信任せる法官 *eddi Omar* をバグダードに派遣せり。ハリフの朝廷はこれを允可するを欲せずして辯明すらく *Deilemites* 并にセルヂク朝の帝王がバグダードに於て政權を享有せるはその豫言者の代理即ちハリフに對して大功を建てたるの報酬として之を得たるによれり。然るに目下において保護者を置くの必要を認めず、諷罕默德がその厯然たる領土に満足せずして更にハリフの首都をも併呑せんとするは怪訝に堪へざる所なりと。

憤怒の餘り諷罕默德は大膽なる決心を定めハリフの法職をアッバス朝より奪はんとせり。臣民をしてかかる計畫の正常なるを思はしめんとせば僧侶の承諾を経ざる可からず、故に支丹は明法博士に向て問題を提起して曰く「茲に帝王あり一身の榮辱を賭して上帝の聖旨に光榮を加へ真正なる信仰の敵を滅絶せんとす、然るに法皇の之に對して敵意を抱くに遭ふ、前記帝王は果してこの法皇を廢し更に之に代ふるに威

バグダードに對する遠征

儀の堂々たるものを以てするを得るか、殊に Mahomet の代官は當然フサインの子孫に屬す可きものなるにアッバス朝の之を篡奪せるに於ては如何、加之、アッバス朝の諸ハリフは宗教上回教徒の法皇に課せられたる第一の義務を常に盡さざるに於ては如何、この義務とは回教國の國境線を保護し、神聖なる戰役を企てて異端の民族を眞信仰に改宗せしめ若しくは貢賦を納付せしむることこれなり」と。僧侶の會議は判決文 *fehve* を起稿して右の場合に於ては廢立の合法なるを聲明せり。この宗規の裁決によりて恃む所を経しかば支丹はアリの後裔なる *Forned* の住人 *Seyid Ala-ul-Mulouk* を推してハリフの位に即かしめ公けの祈禱に於て那昔爾の名を除き新貨幣にも亦之を刻するを得ずとの命令を發せり。

茲に於てか波斯地方に頗ぶる多數なるアリ派の信徒は信すらく六世紀の後遂にこの Mahomet の女婿の一族が法皇の位を回復するの時機に達せりと。支丹は軍隊を召集して那昔爾に對して宣告せる判決文を

執行せんとし先づ義拉克阿鄭 Irac-Adjén を占領せんとせり。始め土耳其種出身の將軍 Oghulmoussch と云ふものこの地方の實權を握有せる後支丹に向て忠誠を誓ひしが、ハリフは Bafthiens を教唆して之を暗殺せしめたり。これ Ismailiyen の君が法皇の款心を買はんが爲め這般刺客を業とせるものを多く献納したるが爲にして、曩に那昔爾がメッカの王侯を刺さしめし時にも亦之を利用したり。Oghulmoussch の死後支丹の名は Irac-Adjén 地方に於ける公けの祈禱文中より削除され、而して之に隣接せる法而斯 Fars 并に阿特耳佩占 Azerbaijan の兩王侯はハリフの勸誘を受けて争て之が經路に従事せり。この報に接するや謨罕默德は兼程 Irac に向て進軍せり。法而斯侯阿塔畢沙特 Atabey Sa'id は戰敗れて捕虜となり、二箇處の堅城を割讓し毎年その歳入の三分の一を戰勝者に納付す可きを約して辛うじてその身を贖へり。阿塔畢鄂思伯克 Atabey Euzbec も次で敗軍して奔竄せり。Sa'id は Seljuques 朝五代の君なり。祖父 Saucor は Mey-doud の子にして Seljuques 朝の孫なり。土耳其部族の長にしてセルサック朝に仕へしが一四八年同王國の瓦解に際し Fars に據れるなり。Seljuques 朝の著 Gulistan をテケケートせるは即ちこの Atabey (大ハエの義) Sa'id なり。Euzbec

(六二四年)
一三二七年
八年

は土耳其種の奴隸にして一六〇年頃セルサック朝の支丹部下の諸將は之を追とき Azerbaijan の君主となる Ideguiz 五代の繼嗣なり。支丹部下の諸將は之を追撃せんと欲せしが、支丹は一年に二人の君主を捕獲するときは幸福を獲る能はずと云ひて之を抑止せり。鄂思伯克は歸國せるの後貢物を携へしめて使節を派遣し之が臣隸となれり。義拉克阿鄭地方を再び制令の下に従へたる後支丹はバグダードに向て進めり。那昔爾は世の尊敬淺からざる神學者なる部族長 Soleikh Schahab-ud-din Shirverdi をして勁敵に對し媾和のことを諮らしめたり。この大使はハマダン附近に於て支丹の駐營せるに遭ひしが種々の困難を経て漸く謁見を得たり。其謨罕默德の帳幕に案内を受けしとき支丹は榻の上に座し身には略服を纏ひ部族長の敬禮に應せず且之をして著席せしめざりき。高僧は支丹に向ひ亞刺比亞語にて雄辯を振てアッバス家殊にハリフ、那昔爾に就きて頌徳の辭を列ね、次で Habis 即ち Mahomet の遺戒を援きてこの名族の一門に害を加ふる勿れと云へる條項を誦せり。その陳述せる所通譯さるるや謨罕默德は答へて曰く「ハリフはこの

人の讃へたるが如き高德を具へず、バグダードに至らば余は法皇の職に陞らしむるに這般の優秀なる性質を享けたる一人物を以てせんとす。而してこの人の援引せる豫言者の戒に就きては須らく知る可し、アッバス家の一門が悉く監獄のうちに生れその多數が之に一生を過せる事を、アッバス家に對して最も不幸を蒙らしめたる者は即ちその一門の人なりき』と。部族長は之を答ふらくハッフの一度位に即くや上帝の書と之が豫言者の事迹とに基きて行動し境遇に應じて這般の法規を適用す可きことを宣誓す、而してその公安の爲に必要なりと認めて某々の個人を禁錮することあるも、この處置たる非難を受く可きものにあらずと。然れども部族長の辯論は毫も支丹の精神に感動を與へざりき。茲に於て部族長はバグダードに歸戻し那昔爾は調和の希望全く絶えたるを以てその首府の防禦に盡瘁し、而してこの間諜罕默德はハマダンにありて Ince-Ardeb を軍政的采邑并に財務的州縣に分割するの事務に鞅掌し且之が辭令書をも調製せり。

支丹諸皇子の食封

支丹の前衛は騎兵一萬五千強より成り進で Heulvan に向ひ第二軍之に續けり。時なほ秋の初に過ぎざりしも花刺子模軍が Eased-Abad 山のうちにありしとき偶々多量の降雪あり、人馬爲に夥しく凍死せり。寒威の凜烈なるよりこの困難に遭遇せし後更に土耳其種并にクルド種に屬する諸部族の攻撃を受けて大損害を蒙り全軍殆んど覆没せり。迷信家の以て昊天憤怒の致す所と信せし^{仁達何れ}この豫想外の事件は諷罕默德の容易なりと判断せし企圖をして半途に挫折せしめたり。蒙古強國の勃興より腦中を往來せるの憂慮はハッフに對するの企圖を飽くまで遂行するを得ざらしめたり。故に Ince-Adjem に滞在せるも唯この大省の政務を規定するに必要なる時日にのみ止まり而してこれを皇子屋肯哀丁 Rokm-ud-din Gounsaidji の食封となせり。皇子吉亞代丁 Ghath-ud-din Tiz-schah は間もなく Kernan Kesch Nulkan 諸省を得たり。第三子只拉兒哀丁忙果必而體 Djial-ud-din Mangouhid ^{土耳其語にて神與の義を有す Mangou は永久なるの bid-ur には Vridi は奥の義は哥疾寧 Bannian 郭耳 Bost 等諸國を授けられたり、これ皆郭耳王國也。}

の故土たり。謨罕默德は皇子鄂斯拉克沙 Ozlag-Schah を以て皇太子に定め花刺子模、ホラサン、Mazenderan を以てその食封となせり。この皇子は兄弟中の最年少者なりと雖も支丹の母土而堪哈敦 Turcan Khatoune が皇子の生母の土耳其種巴牙烏脱部 Bayaoules より出でて同部族に属するが爲殊に之を寵愛せるを以てその意を迎へてこの選定を見るに至りしなり。仁達智保 瓦參照

謨罕默德が皇子に分封せる諸省の多くは新に皇威の下に統一せられたるものなれば未だ王朝に對して心服するに至らざりき。花刺子模帝國各地の住民は唯その宗教を等うするのみ、他に一の共通の關係あるなし。而も宗派の異同は同一地方に住する回教教徒の間に絶えず反目の原因を構成せり。多年羈軛の下に馴致されたる住民は謨罕默德の士卒の長劍によりて屈服せしめられたり。這般士卒の多くはその天幕を唯一の故郷とし其家畜を唯一の財産とするの輩にして、主としてトルコマン人 Turcomans 并に康里人 Canalis を以て組織されたり。トルコマン

軍隊の組織

人はセルチック王朝統率の下にイランを征服せる土耳其種烏古斯部民の後裔なりき。この遊牧民族の體質風俗言語等は氣候の變化并に波斯人民との觸接の結果として多少の面目を更めたるが故に之を爾餘の土耳其種族と區別するが爲に Turcomans と呼ぶに至れり。波斯語にて土耳其人に類似せるものでふ義なり。康里人は花刺子模湖の北、裏海の北東に當れる乾燥せる平原より起り、その王侯の一女が謨罕默德の父と婚姻せるによりて來りて花刺子模國內に定住せり。即ち支丹塔喀施は康里族の一派なる巴牙烏脱部の汗、勤克石 Djingisch の女士而堪哈敦を娶れるなり。康里人は第十三世紀の初には、東方の曠野に住し、その西隣に同じく土耳其種の欽察克人居住せり。この兩部族は蒙古人に征服せられたり。保には巴牙烏脱部は Turcan 部族の一なり。この結婚に次で土而堪哈敦の親族などおれど、Gene は確に康里人の一種也。この結婚に次で土而堪哈敦の親族なる幾多の康里人の領袖はその部民を擧げて、花刺子模支丹の麾下に仕ぶることとなり。王妃の信任に加へてその士卒勇敢にして屢謨罕默德の爲に偉勳を奏せるを以て這般領袖は花刺子模の將軍中にありて第一流の位地に進められ且同帝國にありて至大の權力を揮へり、何と

母后の威權

なれば軍隊の首領は各省の政權を委ねられしのみかその權限極めて
 廣且大なりしを以てなり。支丹の政權もこの武人の貴族輩に對しては
 屈せざるを得ざりき。その忠誠の念慮は覺束なくその歸服の狀態は常
 に動搖を免ぬかれざれば支丹は自尊の精神を抑へてその將軍の野心
 を満足せしめざるを得ざりき。この尙武的部族は依然として北方遊牧
 民族殘忍の性を保ち、花刺子模帝國にありて平和なる人民の禍患とな
 り、その行軍の途上に當れる處は悉く化して廢址となれり。
 支丹の生母土而堪哈敦はその部族に出でたる將校の組織せる黨派の
 首領にして天稟の材幹又卓越せるものありしよりその子と同等なる
 權力を行使せり。故に帝國の州縣に於て同一の問題に關し諛罕默德の
 命令と土而堪哈敦の令旨とに接し而してその趣旨相背反する時は、取
 敢へず先づその日附を調査し而してその最近のものを施行せり。諛罕
 默德の新に領土を占領するや必らずその大部を割きて母后の食封に
 充て以て之を増加せざるを得ざりき。母后は七人の大臣を置きしが何

れも卓越せる技能を有せる人物なりき。その親から令旨に署せる華押
 (Hougen)には世界并に信仰の保護者宇宙婦女の帝王土而堪 Turkhan と云
 へる文字を列ね、その題銘には唯一の上帝こそ我安身の基なれと云へ
 る句を用ゐたり。又尊稱として Khoudavend-Djihan の稱號を撰びしがこれ
 世界の君主てふ義なり。

支丹母后の權勢甚大なりしことに就きて一條の逸話あり。初め母后の
 後援によりて Nassir-ud-din と稱するその舊僕の一人を宰相の職に登庸
 せしめたり。支丹はその顯職に最も必要なるの性格を欠き殊に貪汚に
 して數、激烈なる攻撃を受くることあるよりこの宰相を好まざりき。諛
 罕默德會て Nischabour に赴きしとき Djend の Sadr-ud-din を同市の法官
 Cadi に任命し、且その任命は全く聖旨に出でしものにて宰相に對して
 は何等の恩惠をも負はざれば敢て音物を贈る勿れと之に命令せり。然
 るにこの法官に向て宰相を輕視し單に支丹の眷遇をのみ恃むは至大
 の過失ならんとて諷示せるものあり。新法官はこの忠告を得て大に驚

さ倉皇密封せる財囊に黄金四千的那を藏めて之を Nassir-ud-din に贈れり。支丹は宰相の舉動を監督せしめしを以て殆んど直ちにその事實を探知し命じて右の財囊を齎らさしめしになほ密封せる儘なりき。その後朝廷に伺候せるとき謀罕默徳は公然之に向て如何なる音物を宰相に致せるやを問へり。法官は之を致せることなしと答へ、飽くまで之を否認し、支丹に對し大臣には一錢 Obol たりとも贈りたることなしとて己が頭を賭して之を誓へり。茲に於て支丹は財囊を齎らさしめしに法官は之を一見するや恐怖色を失へり。法官は直ちに免黜され、而して謀罕默徳は宰相の旌旗をその頭上より卸す可しと命じ之に令して保護者の門に歸らしめたり。

Nassir-ud-din は花刺子模に向て出發せり。沿途宰相に相當するの禮遇を受け政務の裁決を要するものには決定を與へ、何人も敢てその免黜を云ふものなかりき。將に花刺子模に入らんとするや土而塔哈敦は貴賤公私を問はずあらゆる住民に令して之を迎へしめたり。Hanifah 派の

高僧 Burhan-ud-din 後れて來り身體に病あるを述べて辯疏せり。宰相は「これ寧ろ好意に病あるなり」と云ひて遅刻を罰するが爲數日の後之に命じて黄金十萬的那を軍隊に納付せしめたり。土而塔哈敦は Nassir-ud-din を以て孫鄂斯拉克沙の宰相となせり。鄂斯拉克沙が食封として花刺子模を得たるは上述せるが如し。宰相はその慣例に忠實にして同省の一收税長官に對し鉅額の誅求を爲せるを以て支丹はトランスオクシズナにありて一人の官吏を派遣し之に Nassir-ud-din の首を齎らす可しとの命令を與へたり。支丹母后はその報に接せしを以てこの官吏の來着するや命じて之を謁見室に赴かしめ、既に著席せる Nassir-ud-din は支丹の使節として之に敬禮し、次で使節をして余の宰相は唯卿あるのみ、卿の職務を繼授せよ、帝國內にありては何人も卿に服従せざるものあるなく、又卿の權威を認めざるものあるなしとの命を之に傳へしめんとせり。官吏は是非なくこの命令を實施せしを以て Nassir-ud-din は支丹の反對を排し、舊の如く至大の政權を握有せり。支丹の傳記を述べたる

成吉思汗の使節

Nessaの謀罕默德支丹を評して幾多の王侯を剿滅し若くは屈從せしめたる後この主人は一奴隷を罰せざりきと。
 Iracより歸りて支丹は Nischabour に淹留すること數週間次で蒲花羅 Bokharaに赴けり同市にありて成吉思汗の使節に接せしが使節は支丹の臣民たる生來の回教徒三人にして花刺子模の馬黑摩特 Mahmoud 蒲花羅の阿里火者 Ali-Khodja 并に訛脫喇兒 Otrar の Youssouf これなり使節は蒙古汗に代りて音物を謀罕默德に献納せり音物は中央亞細亞の産物より成り即ち銀塊、麝香、硬玉 Turcoil と稱する高價なる白毛の裘これなり、多にこれ白駱駝の毛にして織りその價少くも五十 Dinarsなりとあり、Marco Polo が Calcutta 市に於て見たる Zambouri と同一物ならん。使節は更に成吉思汗より託されたるの使命を述べて曰く「朕は卿に向て敬意を表す。朕は卿の權威を認め卿の帝國の範圍龐大なるを知る。朕は卿が地球の大部分に君臨せるを識る。朕は卿と平和の關係を結ばんことを切に望むものなり。朕は卿を見ること朕の最愛の子の如くせんとす。卿にありては又朕が支那を征服し同帝國の北に於けるあらゆる土耳其民族を

して制令を奉せしめたることを忘れざる可し。卿は知る可し朕が邦家の勇士の聚團たり又銀鑲たるを朕は最早他の領土を渴望するの必要を有せず。朕は思ふ我等が我等の臣民の間に通商を奨励するに就きて平等の利益を有することと。」

成吉思汗が謀罕默德に向て之を見ること子の如くせんと云へるは即ち實に之に向て甘んじて臣隷たらんことを求めしなり。何となれば亞細亞諸王侯の間に於ける條約は毫も平等獨立の主義に基ける政治上の關係を認めず。父子、兄弟、叔姪等の關係を以て各種服從の程度を指定するの用に供すればなり。支丹は夜に入りて使節の一人馬黑摩特を招きその花刺子模人なるを知れるより之が忠誠を恃み得可しと信すと云ひ、若し事實を語り成吉思汗の舉動の目的とする所を告げんか恩賞を加ふ可しと約し、更に手經の寶玉一顆を取り誠實に約束を守るの證として之を與へ、かくて成吉思汗が大賀氏 Tanggadj これ支那のことなり。亞刺比亞波斯の地理學者 は漢然と Tanggadj と云へる地名を用ゐたり、これ思ふに希臘の史家 Thophtacle の Tavras ならん。Tavras の支那なることは Klaproth 氏亞細亞雜誌第七冊に之を説けり。附記白鳥

博士のTongjiは元魏の姓なる托跋なりとを征服せりとのこと果して信なるや否やを問へり馬黑摩特答へて曰く「これ何人も偽る能はざる事件の一なり」と支丹反問して曰く「然るか朕の帝國の堂々たるは汝の知る所然らば余を呼んで子と爲せるこの無頼漢は何物ぞその兵力果して幾何かある」と馬黑摩特は君王の激昂せるを見蒙古汗の兵力の到底その兵力に比較する能はざるを云へり支丹は稍心を静め和協的回答を與へて三使節を歸戻せしむるの得策なるを思へり照參タルタリーの遊牧民族を征服せる後成吉思汗は從來這般各部族の劫掠的所業によりて惱まされる地方に於て行旅の安全を圖るが爲に參畫し而して孔道に配置されたる警備隊は外國商人の貴重とするに足るの商品を携へて來るものある時は之を蒙古君王の駐營地に送る可しとの命令を受けたり哈刺乞脣帝國の滅亡するや謨罕默徳の領土は深く土耳其斯坦の内地に達して蒙古君主に對する朝貢^ハたるOughtieの接壤地と爲り古出魯黑汗は僅に喀什噶爾和闐葉爾卷地方に君臨す

るに過ぎざりき支丹謨罕默徳の臣下なる三人の回教徒は絹布棉布を携へて蒙古の境上に至りしがその一人成吉思汗の面前に召され織物に對して格外の高價を唱へたるより蒙古の君侯は怒てこの男は吾人を以て會てかかる布匹を見たることなしと思へるなりと云ひ既に蓄へたる夥しき絹布棉布を一覽せしめたり花刺子模人民が從來數ば劫掠せられたる商品の所在かくて始めて明瞭となり而して更に他の二人の同業者を出廷せしめたりこの兩人は豫め好意の注告を受けたるにより敢て布匹の價を定めんとせず蒙古汗に對して貢賦として之を齎らせりと述べたり成吉思汗は之に惜氣もなく代償を給與し最初の商人にも亦之を給し命を下してこの三人の回教徒を厚遇せしめ且特待の意を示さんとし之が爲に白氈の新帳幕を建てたりその出發に際し成吉思汗は一族の王侯諸將軍等をしてその從僕一兩輩に正金を携帶せしめて之と共に派遣し以て花刺子模各地に於て貴重なる産物を購はしめんとせり何れもその命に従ひて一人若くは二人の從者を

タルタリーより赴ける多数の商人訛脱刺兒に於て殺さる

成吉思汗の殿備

派遣せしかば合計約四百五十人の一隊を組成せり、而して悉く回教徒なりき。この商隊のシル河畔の訛脱刺兒に達せしとき、同地の守將にして哈伊兒汗 Qaïkhan と稱せし伊那兒只克 Inaldjone はその携帶せる財貨を掠奪せんと企て、悉くこの行旅を逮捕せしめ、而して謨罕默徳に呈出せる報告に於て之を以て成吉思汗の間諜なりとなせり。次で之を死刑に處す可しとの命令に接して即ちその命令を實施せり。邊智に據る。保に據るにタルタルより來りたるの商人は僅かに四人にして、即訛脱刺兒の Omar Khodja、メラカ Merga の Djond、蒲花羅の Fakir-adin、ヘラットの Enn-adin 等何れも支丹の臣下なり。その通商に關係なきことを知らんとし、又訛脱刺兒人に向て東北地方に於て豫期せざるの事、件生ず可し、杯と既きて恐怖の念を起さしむる等のことありしより、伊那兒只克之を問諜なりと列じて君主に報告し、之を監督す可しとの命を受けしが、遂に獨斷を以て之を殺せりと。此既可信。

傳へ云ふこの暴行の報を得るや、成吉思汗は激怒の涙を漉ぎとある山巔の絶頂に赴ひ、きを面上に向けて、跪き頭に戴ける帽を脱し、帯を頸に繋けて復讐の爲に天助を得んことを求め、三日三夜祈禱難行をこととせりと。邊智に據る。

花刺子模に向て進軍するに先ち成吉思汗は宿仇古出魯克を仆さんと

その大使又殺さる

欲し、その間一人の大使を謨罕默徳の許に派して報償を要求せり。この使命を託せられたるは波合拉 Baga と呼べる土耳其人にして、その父は嘗て支丹塔喀施に仕へて官吏たりき。この大使は二人の蒙古人を從へて謨罕默徳の朝廷に至り、使命を傳へて曰く、「卿は嘗て弊國の商人は何人をも虐待せざる可しとの保證を朕に向て爲せり。卿は卿の所言を守らず、背信の行爲は君主にありては忌む可きことたり。訛脱刺兒に於て商人を虐殺せること、卿の命令に依れるにあらざること果して信す可くんば、朕に守將を交付せよ。朕之を罰せん。然らずんば、交戦の準備を爲せ」と。

假令謨罕默徳にして哈伊兒汗を罰し若くは交付せんとするの意志ありしとするも、哈伊兒汗は支丹母后の親族にして、軍隊領袖中の有力者なりしを以て之を實施するの權力を有せざりしならん。故に蒙古の汗に報償を爲すが如きは思ひも寄らず、波合拉を殺し二人の蒙古人はその鬚を剃りて歸國せしめたり。保に據る。

この残忍なる行爲に次ぐに更に他の衝突を以てせり。支丹一軍を撒馬爾罕に召集して將に古出魯克に向て進軍せんとせしとき、偶ま蔑兒乞人の一隊公子 Fouc-Togan の指揮を奉じアラル海の北なる康里 Caraculis 國の内地に進軍せりとの報に接せり。謨罕默德はこの外來の遊牧民族を撃退せんとの目的を抱きて途を蒲花羅に取りて匪的 Djend に向て、その軍を率ゐて進發せしに、匪的に於て古出魯克は既に滅びその同盟なる蔑兒乞兵は今や蒙古軍之を追撃中なりとの報告を得たり。茲に於てその引率せる兵力の不十分なるを見親から撒馬爾罕に歸り新募の軍隊を得之と共に再び匪的に赴けり。同市より北方に向て進み兩軍を追跡せしが海哩、Cai 哈迷池 Canich 兩河の間に於て死屍の狼藉たる戰場に着し、一人の負傷せる蔑兒乞人を獲て蒙古軍の勝利を博したること并にその既に陣を撤して去れることを知れり。支丹は同一の方向を取りて翌日之に追及し攻撃を加へんと欲せしが、偶ま蒙古軍の首領保仁にはこの首領は成吉思汗の長子朮赤なりとあり。は使節を以て謨罕默德に言はしむらく我等兩國

花刺子模軍と蒙古軍と土耳其斯坦に於て戦ふ

は交戦中なるにあらず余はこの地方に於て花刺子模軍隊に遭遇せる時は友愛を以て之を待遇す可しとの命令を受けたりと。加之、その蔑兒乞兵に對して獲たる捕獲戦利品の一部を支丹に贈れり。謨罕默德はその兵力遙に優勢なりしを以てこの友情敬意の徴證を受納せずして蒙古の將軍に回答して曰く「假令成吉思汗卿に命じて朕と戦ふ勿れと云ひしも上帝は卿を攻撃す可しと朕に命じ賜ふ、朕は邪教徒を滅絶して上帝の眷遇に報いんとす」と。蒙古軍は已むを得ずして干戈を交へしも將に戦勝を博せんとするに至れり、即ち蒙古軍は花刺子模軍の左翼を潰走せしめ謨罕默德の親から指揮せる中堅を襲撃して突貫を試み之をも亦敗走せしめんとせしにその右翼にありて勝利を得たる只拉兒ジラール哀丁父の危急を見て來て之を救ひ日没まで戦鬪を繼續せる後遂に頽勢を挽回せり。夜に入りて蒙古軍は夥しく火を點じたる後疾驅して退却せしを以て天明に至りては既に行軍三日程の距離を隔てたり。この會戦は謨罕默德をして蒙古軍の眞價侮る可からざるを知らしめ

たり、即ちその親近に向ては曾てかかる軍隊を見しことなしと語りしと云ふ。撒馬爾罕に歸るや官爵食邑を與へて諸將の功を賞せり。仁には蒙古の花刺子模征伐は書物に記載するを得ざる他の原因ありと云へり、これハリフハ那昔爾が怒を謀罕默徳に報ひんとして蒙古人に幫助を求めたりとの説ならん、同書並に曾には共に回教紀元六二二年那昔爾殂落の條に於てその蒙古人に救を求めたりとのこと、記し前者はこれ最大の犯罪に過ぐるの舉措なりと評し後者はこれ謀罕默徳がマクダレドを首府となさんとするを恐れしが爲なりと原因を脱けり。

然るに蒙古の君侯は古出魯克死しその領土を征服せる後一二一八年(六一五年)括弧のうちに記せるは一門并に重臣の總會議を召集し謀罕默徳に對して開戦す可しと決議しに據る。この新計畫を行ふが爲に諸般軍中の章程を規定せり。成吉思汗は蒙古の監治を弟幹赤斤 Djidjan に委ねたる後同年の未に當りて進發せり。翌年夏季の間は終始イルチ河畔に駐營して戰馬を休養し秋に至りて進軍を繼續せしに畏兀兒王阿力麻里王雪格那克的斤 Sitnac-Tekin 并に柯耳魯 Carouks の汗阿兒思蘭 Aislan 等來り會せり、傳ふる處に據れば謀罕默徳は四十萬の大兵を糾合し得たりと云へど、

成吉思汗花刺子模帝國に向て進む

蒙古軍の國境に逼らんとするや痛く不安の念を生せり。その兵力は疑もなく成吉思汗の軍に優れりと雖も、花刺子模軍には嚴明なる紀律と君王に對する旨目的服従と困苦勞役戰鬪の習慣とに於て缺く所あり、而して蒙古軍をして精銳當り難からしむるものは實にこれあるが爲なり。加之、謀罕默徳の士卒はその敵兵の如く有力なる。交戦の動機を具へず、之が防備を託されたるの人民は全く痛痒相關せざるの他人にしてよし、戰勝を博するも得る處又幾何もあるなし。然るに蒙古軍は富裕繁榮なる地方を攻撃するが故に人類貪婪の念慮を刺撃し得可き條件は一として備はらざるなし。この不利を補はんと欲せば謀罕默徳たるもの須らく勇氣と材幹とに於て敵將を凌駕する所なくんばある可からず。然るにこの危急存亡の時に際して唯僅に恐怖と優劣不斷とを示せるのみ。即位以來絶えず帝國範圍の擴張をのみこれ努めしが、今やその權勢の絶頂にあるに拘はらず親から暴行を加へてその激怒を招ける野蠻なる武將に對し敢て進んで對抗を試みざりき。即ちその軍隊を

諛罕默徳の防備

集注して一大野戦に於て敵軍と雌雄を決するの方略を採らずして、之をトランスオクシアナ井に花刺子模の各城市に配賦し親から遠く戦地を避けたり。説者或は曰くこの決心に出でたるは將校多數の意見を重んじて之を容れたるが爲なりと、又或は曰くこれ諛罕默徳が占星家輩の豫言を信じたるが爲にしてこの輩は星位不可なるものあるを以てその變更するまでは敢て戦闘を試みて勝敗を決するが如きことある可からずと揚言せりと。一歴史家はこれ諛罕默徳が成吉思汗の謀計なりと知らずして軍隊の將校に嫌疑を加へたるが爲なりとて一場の逸話を傳へたり。詭脱喇兒の民にして免職されたる官吏に具鐸哀丁 Bedr-ud-din と云ふものあり父を始として伯父その他の親族何れも先に諛罕默徳が同市を略せる時その命令によりて殺されしを以て款を蒙古汗に通じ、諛罕默徳は人類中最も惡む可きものなれば生命を賭しても之に復讐せんことを欲すとの意を述べ、その母后との關係圓滑ならざるに乗じて詭計を施さんことを成吉思汗に献策し以て諛罕默徳を

して弑逆の陰謀を企つるものありと信せしめんとせり。具鐸哀丁乃ち土而堪哈敦の一族なる將軍等が成吉思汗に宛てたるの偽書を草したり、その文の大意に曰く『我等は部族を擧げて土耳其斯坦より支丹諛罕默徳の許に來れるがこれ母后を敬愛するが爲なりき、而して我等は支丹をして幾多の君王に對して勝利を博せしめ之が領土を以て支丹の帝國を膨大ならしめたり。今や支丹は土而堪哈敦に對して不快を感じ之を待つに恩義を思はず、母后は我等に復讐せんことを望ませらる、我等は唯卿の來るを待つのみ、敢て卿の命令を奉せん』と。成吉思汗は故ら敵兵をしてこの書狀を横奪せしめたり。傳へ云ふ支丹この計に欺かれてその將軍を疑ひその奸計を施すに處なからしめんとし之が部下の軍隊と共に至要の城塞より撤兵せしめたり。此の逸話は頗ぶる信を措き難し、思ふに諛罕默徳の將軍は野戦に於て敵と干戈を交ゆるを以て不可なりとせしもの如し。而して支丹自身は疑もなく蒙古軍若し平地の劫掠蹂躪を了らばその掠奪物を携へて退却す可しと信

せるなり。

第七章

成吉思汗花刺
子模帝國の境
上に着す

成吉思汗は一二一九年(六一九年)の秋を以てイルチン河畔を發して大食 Chang-khass 國の攻撃の途に上れり。大食とは耶教徒たる蒙古人并に土耳其人が回教徒を指せるの稱呼なり。シリア人往古亞刺比亞人を總稱して Hayas 比亞遊牧民族中の最も勢力ある部を指して Hayas と云へるその複數なり。カルテア人は之を Hayas 上古波斯人は之を Hayas アルメニア人は之を Hayas と稱せり。波新トランスオクシアナ地方亞刺比亞國と呼べり。蒙古人も亦之に倣ひて回教徒を Hayas 又は Hayas と稱せり。而して當時の歴史家は大食人と土耳其人とを相對して使用し都會村落の民は土耳其人たるを波斯人たるを亞刺比亞人たるを相對して使用し都會稱し土耳其種族種族の遊牧民族を土耳其人と稱せり。如し。成吉思汗以下の蒙古人も自から土耳其人と稱し種族種族と呼ぶるを好まざりき。○智柯耳魯部の條に成吉思汗その部長阿兒思蘭汗の降を納れたる後暫くして皇女を之に配し且汗號を與ふる能はずと之をなして爾後 Arghun Khan シリア人の義と稱せしめたり。ラシッド曰くシリヤ人の義なりと。毫も抵抗を受けずしてシル河畔訛脫喇兒附近まで進み、遂にトランスオクシアナ侵略の準備を施せり。この地方はオクス河の彼

トランスオク
シアナの征服

岸に位せるより回教徒は之を Mavera-n-nahr 即ち越河地方と稱せしが即ちこの河流とシル河との間に介在し西は砂漠を隔てて花刺子模と相對せり。上古よりこの地方には土耳其種族の民その居を定め第八世紀の初に當りそのハリフの制令を受くるに至るや Mahomet の宗教を採用せり。その都會には波斯人并に亞刺比亞人等の多く來りて之に定住するあり蒙古軍入寇の當時には何れも繁榮の状態にありき。土耳其種の遊牧民族はその家畜と共にこの地方より裏海までの間に連亘せる砂漠的平原を來往せり。

成吉思汗は全軍を分て四隊となせり。第一軍は之を訛脫喇兒の前面に留めて皇子察合台窩闊台をして指揮を掌らしめ。第二軍は長子朮赤Arghun を司令官となして右翼となりて Chaghatay 的に向て進めしめ。第三軍は左翼となりて白訥克特 Benaket 城の攻撃に向はしめ。この兩翼の兵がシル河畔に位せる各地を陥るるに乗じて軍の中堅を率ゐて蒲花羅Bohara に進み、諷罕默徳とトランスオクシアナ地方との連絡を断ち之をして包圍を受けた

る各城市を救ふによしなからしめんとせり。
訛脱喇兒は包圍を受けたり。同市城井に内堡の防禦工事は倉卒之に修理を加へ糧食は充分に貯へられたり。哈伊兒汗花刺子模國君は諸將に汗號を與へたり。は同市にありて多數の戍兵を指揮せしが、更に哈拉札汗 Candja-khan 一萬の騎兵に將として來援せり。包圍五箇月の後士卒城民と共に意氣銷沈し援軍の將は降参せんとの議を起ししも、戍將は先にタルタリーより訛脱喇兒に來りたる商人を殺戮したればその到底助命を望み難きを知り死に至る迄君王に誠忠を盡さんと聲明せり。哈拉札はその決心の動かす可からざるを見暗夜に乗じてその部下の精銳を率ゐて城市を出でたり。この冒險は幸福を齎らさず蒙古軍の捕獲する所となれり。哈拉札はその生命を賤はんが爲成吉思汗の麾下に列りて戰功を立てんことを乞ひしも、兩皇子は既にその君に對する忠誠を盡さざりしもの焉んぞ之を信任するを得んやと答へ、その放棄し來れる城内の形勢に就きて訊問を加へたる後その部下を擧げて悉く之を屠れり。

蒙古軍は訛脱喇兒を略し住民を悉く曠野に驅れりこれ自由に城市を掠奪せんが爲なり。守將は殘兵を引率して内堡に退き一ヶ月間防備をこととせり。殆んどその部下の全部を失ひ蒙古軍は進んで内堡に入りしも守將は飽くまでも勇を鼓して交戦を繼續せり。八方より敵兵の肉薄し來るや遂に前部の屋上に攀ちしに之に續ける二人の從卒は忽ちにしてその左右にありて戰死したり。既に射るに箭なく乃ち壁の上部にありて侍女等の手渡しせる瓦を取りて之を投げたり。而も長く蒙古兵を禦ぐ能はず蒙古兵は之を生擒せよとの命令を受けたり。故に狂人の如く奮闘し足下にあまたの敵兵を仆したる後衆寡敵せず遂に捕虜となりて縛められたり。かくて當時撒馬爾罕城外に駐營せる蒙古君主の本營に護送されたり。成吉思汗は之を面前に引かしめ命じて銀塊を溶解してその目と耳とに注ぎ以てその貪婪の犠牲に供せられたる薄命なる商人の殺戮に報復せり。訛脱喇兒の内城は毀たれ、而して蒙古軍は虐殺を免かれたる住民を蒲花羅邊陲に向て引率せり。

匪的アモンドに向て進める朮赤はシル河畔の撒格納克 *Sagac* 市附近に軍を駐め哈三哈赤 *Hossan Hadji* と稱する回教徒を之に遣し命じて之が城門を開かしめんとせり、哈赤とは巡禮の義なり。この回教徒は初め商品を携へてタルタリーに赴むき同地にありて既に成吉思汗に仕へたりき。この使命を帯ぶるや先づ住民に注意を與へその心を静めたる後之を傳へんと欲せしに、哈三哈赤ハハサの口を開くや否や激昂せる民衆は之を襲ひ上帝の名號を叫びつつ之を虐殺せり。

朮赤は直ちに攻撃の命令を與へ城市を陥るるまでは一切戦闘を中止することを禁せり。生兵は代りて疲勞せる兵士を休息せしめ撓ます力戦すること七日の後蒙古軍は撒格納克城内に入り住民を擧げて悉く之を屠れり。皇子朮赤は哈三ハハサの一子にこの住民を滅絶されたる城塞の指揮を任せその進軍を繼續して奧斯懇 *Ozkend* 八兒哈力懇 *Darkhaigkend* 并に遏失那斯 *Eshnass* を陥れて之を劫掠せり。その匪的に逼るやこの境上地方の守將庫特魯克汗 *Coutlong-khan* 庫特魯克は土耳其語にて幸福の義なり。 は夜中城市

を出でてシル河を渡り途を砂漠に取りて兀龍格赤 *Koukandji* に向へり。朮赤は成帖木兒 *Tekinimou* と呼べる軍使を派して匪的に降を勸めたり。時に同市は紛擾その極に達し、住民は守將に放棄されたるを以て各黨派を樹てて相争へり。成帖木兒の來るを見るや擾亂は益甚しく人々之を殺さんとせり。使節は撒格納克の先例の悲惨なりしを引證し蒙古軍をして避けて匪的に入らざらしむ可しと誓へり。この虚妄の約束を得て即ち使節を放還せり。

されど匪的の住民は忽ちにして敵兵の進み來るを見たり。而も城壁の高きより心竊に恃む所ありしに咄嗟の間に安心の念は變じて恐怖狼狽となれり。蒙古軍は雲梯を樹てて城壁を攀ち些の抵抗にも遭遇せずして四方より城内に入れり。住民は悉く野外に驅られしも、而も防禦を試みざりしを以てその生命は助けられ、唯成帖木兒チンチン に向て嘲罵を加へし數人のみ殺戮に遭へり。匪的の掠奪は前後九日に亘りしがこの間住民は城内に入るを許されざりき。蒙古の皇子は同地の守將として蒲花

羅の阿里火者を止めたり、阿里火者は前年來その父に仕へ上述せるが如く使節の一人として謨罕默徳の許に派遣されたることもありき。朮赤は又一枝隊を分遣してシル河々畔に位しその花刺子模湖に注ぐの點より二日程を隔てたる隣城養吉干 Yangui-Kend 土耳其語にて新都の義也。 を取らしめたり。畏兀兒部族の軍隊はその數一萬人、朮赤の軍團に屬せしがこの時故國に還るの許可を得、而して朮赤は之に代ふるに新に従軍せしめたる遊牧民族トルコマン人一萬人の一隊を以てしたり。かくて諾延台納爾 Noyan Tainai を將として之を花刺子模に派遣せしに、この兵士は途上台納爾が前衛と共に進みしとき代て本隊を指揮せしめし蒙古の將校を虐殺せしかば、台納爾は倉皇踵を廻らしてその大部分を殺戮せり、而してこの部隊の殘兵は遁れてメルヅ並に Anouye に走れり。

第三軍は阿剌黑 Ale 速客圖 Soukton 托海 Togai の三將之を統率して白訥克特 ベナク 克特に向ひしがこの軍團は僅に五千人に過ぎざりき。白訥克特にありし土耳其種康里人の成兵は三日の後に至りて降服を乞へり。攻撃軍は

之が生命を助けんことを約束せしが、その愈よ投降し而して白訥克特 ベナク の住民を市外に驅逐するや、軍人は之を市民と分離し或は劍を以て或は矢を以て之を殺したり。工匠は之を蒙古同業者の許に送り、壯丁は夥しく之を引率し以て攻撃に際して之を使役せんとせり。

この軍團は忽里 Khodjend に向て進軍を繼續せしが、之が守備に任せし帖木兒蔑里克 Timour-Melik 剛勇無双の軍人にして 邊の著者はその勇猛を讚え有名なる Rustam 者しその時を同うせば之が外套を挿ぐ可きのみと云へり。 千人の精銳を引率してシル河中の島に築かれたる堅城に籠れり、その地兩岸を距つること遠く以て矢石の攻撃を避くるを得可し。攻撃軍は訛脱兒並にその他の占領地方より蒙古兵二万士民五万の援兵を得たり。士民は之を百人隊並に十人隊に分ち蒙古將校之を指揮して三リーグを隔てたる山嶽より石を運搬し之を河中に投するの任務に當らしめたり。帖木兒蔑里克の側に於ては十二隻の被蓋船を造り、攻撃軍より投する燃燒物の災禍を防がんが爲に毛氈もて之を覆ひその毛氈を包むに粘土と醋とを混淆して之を厚く塗抹した

る外包を以てせり。日日この戦船は六隻づつ兩岸に近づき蒙古軍に對してその發射眼より矢を放てり。蒙古軍は夜中數ば帖木兒蔑里克の襲撃に遭ひ之が爲に損害を蒙むること大なりき。而も奮闘その効なく窮境に陥るや帖木兒蔑里克は夜に乗じて士卒と輜重とを七十隻の船舶に載せ、自から軍隊中の精銳と共に被蓋船に乗り、その點せしめたる炬火の光輝を便として河流を降り、この船隊は蒙古軍が白訥克特附近に設けたる鐵鎖を容易に切斷して流に隨ひて航下を繼續せしが、兩岸の敵兵は絶えず之を追躡せり。然るに帖木兒蔑里克は皇子朮赤が甞的の附近に於てシル河の兩岸に大部隊の兵力を配置し弩砲を据付け船橋を架して河流の通航を阻むを聞くに及び船を棄てて馬に乗れり。蒙古兵の追撃を受くるや止まりて之と戦ひ以て輜重をして前進せしめたり。この戦略を反覆すること數日間その少數の兵力は益減少し遂に輜重を委棄するの止むを得ざるに至れり。次第に部下の士卒を失ひ盡せし後單騎敗走せしに蒙古兵三人の通り來れるあり、而も僅に三本の

矢を剩せるのみにしてその一は鏃を失へり、乃ち最も接近せる敵騎を射てその一眼を貫ぬき之と同時に他の二騎に向て我になほ二本の矢あり、背進して命を全うせよと叫びしに敵騎恐れて走れり。かくて帖木兒蔑里克は花刺子模の城市に着し、次で只拉兒哀丁の麾下に加はりその最後まで之が左右を離れざりき。

この間蒙古の君主は皇子拖雷を伴ひ蒲花羅に向て途を取れり。賽兒奴克 Zenone 市の住民はその近くを見るや皆之が堡壘に據れり。成吉思汗は侍從丹尼世們 Duischment を派遣して之に降服を説諭せしめたり。この軍使は狂暴なる兵士の脅逼に遭ひ叫んで曰く「余は回教徒にして回教徒の子なり。余は成吉思汗の命を受けて來り、卿等を奈落の深淵より救はん」とす。成吉思汗は今や重兵を擁して逼り來れり、卿等若し些かたりとも抵抗を爲さば卿等の城塞家屋は咄嗟の間に滅却し盡されん、卿等若し降服せば生命財産を全うするを得ん」と。この遊説は深く住民に感動を與へしを以て住民は直ちに音物を携へたるの使節を蒙古汗の許

に派遣す可しと決議せり。賽兒奴克の官吏輩が親から來りて忠誠の意を表せざるを怒りて成吉思汗は人をして之を搜索せしめしより、官吏等は戦慄しつつ來りしも而も酷待を受けざりき。住民は市外に出づ可しとの命令に接したり。壯丁は之を收めて一隊を組織し以て蒲花羅包圍の時に使用することとなし爾餘の住民はその家庭に歸るを得しめたり。堡壘は勿論毀たれたり。

同地よりトルコマン人の一嚮導蒙古軍の先頭に立ち人跡稀なる通路によりて奴爾諾州に向へり。前衛の將塔亦兒把阿秃兒 Tair-Bahadour 軍使を奴爾市に遣し約束脅逼の慣手段を用ゐて之を降服せしめんとせり。住民は如何なる方針を選む可きやに付きて蜘蛛せしも再三使節を受けたる後その城門を開けり。塔亦兒は兵をその前方に進め、市民は代表者に進物を齎らさしめて成吉思汗の許に派せしに、成吉思汗は將軍速不台 Souboutai を同市に赴かしめたり。速不台は住民に向てその生命を全うするを以て満足せざる可からざること、その家畜と農具とは

之を沒收せざる可きこと、而も一物をも携帶せずして市外に出づ可きことを稟告せり。城市の明渡さるるや蒙古兵は之を劫掠せり。成吉思汗次で同市に至りて幾何の租税を君侯に納付し來りしやを住民に向て訊問せり。答へて曰く千五百的那 *Timars* と乃ち之を前衛に納付す可きを命じ更に誅求する處なかる可しとの保證を與へたり。婦女子の耳環のみにて立るにその半額を得たり。

繼て成吉思汗は進んで蒲花羅 ボハラの名はゾロアスター僧侶 Hage の語に 連に Bokhar の中心てふ意義を有する Bokhar に出でたり。此語は長元兒支那の偶像信者即ち佛教徒がその寺院に與ふる Bokhar の語と全く等し。されどこの市創建の時代にはこれを Medjeh と呼べり。Ebn Haoucal の頃には蒲花羅は内城一平方 *Soum* 外城十二平方 *Soum* を有し、河郭外を流れ、附近の地方極めて肥沃なりし、住民の生計に資するに足らざりきと。 に逼れり。その軍隊は來着するに従ひて各陣地に就きてこの大都を圍めり。城内の守備隊は二萬人を數へたり。撓まず之に攻撃を加ふること數日間に見し後終に守備隊の諸將は到底之を保つの望なきを見相議して夜に乘じて全軍開城突撃を試み以て敵兵の圍を破りて脱走せんとしこの計畫を實行せり。蒙古軍は不意に激烈なる逆襲を受けて背進せり。然る

六二七年(二月)
一二三〇年三月

に花刺子模兵の將軍は之を追撃して大敗を蒙らしむるの策に出でずして唯脱走してその命を全うすることをのみこれ計れり。茲に於て蒙古軍はその陣形を整へて敵兵を追躡しアム河の河畔に於て之に追及しその士卒を擧げて之を屠殺し了れり。

翌日蒲花羅より式僧 *Hinnis* 并に名望家を以て組織せる使節來りて蒙古汗に忠誠の意を表せり。成吉思汗は市内を見物せんとして城内に赴き大回教寺院の傍を過ぐるや馬上之に入り、その支丹の宮殿なるやを問ひこれ上帝の殿堂なりとの答を得たり。祭壇の前に至りて下乗し説教壇に二三歩昇りて叫で曰く野。外。は。劫。掠。し。了。れ。り。我。等。の。馬。匹。に。飼。料。を。與。へ。よ。と。人。々。は。乃。ち。穀。物。を。索。む。る。が。爲。に。市。中。の。倉。庫。に。赴。け。り。蒙。古。兵。は。經。典 *Corans* を藏めたる箱を寺院の庭に運び來りて以て馬槽となし回教徒の神聖視せる書籍は馬蹄の下に蹂躪されたり。野蠻人はその酒を盛れる革囊を回教寺院の内部に齎らし市内の翳間歌妓をして席に侍せしめ、その高聲國歌を謠ふの聲は四壁に反響せり。而して蒙古人

が快樂放逸に耽るのとき明法博士高僧等重なる市民は奴隸として之に服従しその馬匹を護れり。

一二時の後成吉思汗は市外に出でて禮拜之原に赴けり、同地には曩に成吉思汗の命令ありしを以て蒲花羅の市民雲集し來り數時間に亘りて共に祈禱を行ひ莊重にその時を過せり。成吉思汗は説教壇に登りてこの群集のうちにありて最も富裕なるは何れの人々ぞやと問へり。應ふるもの二百八十人を擧げしがそのうち九十人は外國人なりき。成吉思汗は之を傍に招きて諭告する所ありき。先づ支丹が敵對の行爲に出でたるが爲之に對して干戈を取るの止むを得ざるに至りたりとの事情を述べたる後曰く『知れ卿等の大過失を犯し人民の領袖が最大の犯罪者たることを、卿等若し朕に向て如何なる根據ありてかこの告諭を爲すと問はば朕は即ち上帝の答なりと答へん、卿等若し至大の罪人ならずば上帝は敢て朕を卿等の頭上に尙へざらん』と。次に言を添えてその地上にあるの財寶は之を發見するに容易なればその交付を要求す

ることなる可きもその地下に埋藏せるものは之を申告せざる可からずと云ひ命じてその執事を指定してその主人の貨財を交付するの任に當らしめたり。這般の富豪輩には何れも蒙古兵の監視を附し、毎日日出とともに成吉思汗の懸下に召集せり。據るに守備隊の開城突撃を試みしとき共に城外に出づること能はざりし花刺子模騎兵四百人あり内城に立て籠れり蒙古軍は乃ち之を攻撃するの準備を爲せり。蒲花羅^{ハハ}市に告示して兵器を帶せるものは悉く出頭す可く拒むものは死刑に處す可きを令し、この住民をして内城の塹壕を填充せしめたり。次で弩砲を装置しこの兵器によりて城壁に破塔口を生ずるや蒙古兵は城内に進入し一人をも剩さず守兵を殺戮せり。この孤弱なる戍兵は勇敢に防戦すること十二日間蒙古兵并に包圍の事業に驅使されたる住民の多數を仆したり。仁に據る。Edn-ul-Eshirは野蠻人が遺棄して之を捕獲せり。遂には内城に於て三万人を居り中に門地高きもの少からず。女子小兒を奴隸とすとあれどこれ例の誇張の言なり。仁の時人の記事なるに如かず。内城陥るや蒲花羅^{ハハ}の住民に向てその身に纏へる衣服の外一物をも携

へずして出城す可しと命せり。かくて住民の撤去するや蒙古兵は城内に入りて劫掠を縦にし禁を冒して出城せざるものは悉く之を屠れり。最後に蒙古兵は蒲花羅の住民を圍みて之を分配す可しとの命令に接したり。史家 Edn-ul-Eshir 曰く「これ恐る可きの日なり。その耳にする處は唯男女老幼が永別を悲みて歎歎啼泣するの聲あるのみ。野蠻人等はこの薄倖の徒の面前に於て敢て婦人の貞節を冒せしも婦人はその蒙れる屈辱を排斥するの力なく唯悲鳴を放て之を悲めり。この恐怖す可き光景を見て親から進んで死地に就けるもの又少からざりき。即ち法官 Qadhi Bedi-ud-din 并に式僧 Inan Rokn-ud-din 父子の如きは其の妻女の辱めらるるを見て奮闘敵の殺す所となれり」と。富豪は之を拷問して強逼的にその財産を藏匿せるの地點を自白せしめ結局蒙古兵は市内各方面に放火せしに木造家屋多きを以て大回教寺院その他煉瓦にて建築せる少數の大厦を除くの外全市延焼せり。仁に據る。遂には支丹の土庫をに之に應ぜずして抵抗せしり。り爲に市内に放火すとあり。

成吉思汗は煙烟の高く揚れる蒲花羅ホハラクの廢址を後にして僅に五日程を隔てたる撒馬爾罕に向ひ、滿地これ花園果樹、美草、別墅を以て覆はれ、征客をして恍惚たらしむるが如き、Sogd河の流域にその兵を進めたり。若干の兵を留めて途上に横はれる Dehousiyé 井に Serai 兩城を圍ましめ、遂に撒馬爾罕に逼れり。蒲花羅の住民の捕虜となれるものは此大都の攻撃を助くるが爲に之に従ひしが、沿途數、虐待を蒙り、疲勞の極前進する能はざるものは殺戮せられぬ。仁に據る。支丹は土耳其人、波斯人を合せて四万の守備兵を撒馬爾罕に置き、之を指揮せるの將軍はその粹を集めたり。保に據る。邊には守兵十一万内土耳其人六万にして大食人即ち波斯人五万なりとあり。智し之に等しけれど智の蒙古兵トランスオクシア侵略の記事は邊をその儘襲用せるに過ぎず。仁には、城市殊にその内城の築城工事は修築を加へ且大に増築されたり。撒馬爾罕は防禦の準備整ひたれば能く長圍に堪へ得可しとは一般の信する處なりき。かくて成吉思汗も亦之を攻撃するに先ち附近の地方を悉く占領し了らんとせるなり。既にして他の三軍も亦トランスオクシア北部の征服を了りて同市の附近に來會し且最

も兵事に適したるの人民を伴ひ來れり。成吉思汗は之を騎兵の先頭に立たしめたり。歩兵と捕虜とは翌日を以て都城の前に現はれたり。捕虜は十人毎に一旛の旗を携へたり。この群衆の相繼ぎて來着せるは成吉思汗が被攻圍軍をしてその見る所悉くこれ戰鬥員なりとの想像を起さしめ以てその恐怖心を大ならしめんと欲せしが爲なり。蒙古の君主は最初二日間都城を巡視してその築城工事を查察せり。第三日の朝新徵發軍と蒙古の軍隊とをして前進せしめしに、市民中の勇敢なるものは隊伍を整へ開城突撃し來れり。されど花刺子模の士卒は敢て蒙古軍と會戦するを欲せずして之に援助を與へざりき。蒙古兵は徐ろに背進して熱心に追撃し來れるこの歩兵の一隊を伏兵ある地點に誘ひその全部を壓殺せり。仁に據る。邊には成兵花刺子模將軍の命を受けて激烈なる突撃を試み交戦夕に及び捕虜を獲て城内に退却せしむ而も千人の損失あり。この戰敗の結果被攻圍軍は意氣全く銷沈せり。成兵の大部分を組成せる廉里人は土耳其種に屬するを以て蒙古人より同胞たるの待遇を受く可しと信せり。成吉思汗は實に之を麾下に従軍せしむ可し

(三月)
四月

と約せり。茲に於て康里人はその家族と輜重とを携へて城を出でたり。包圍の第四日に於て將に強攻を加へんとする時都城の法官 Cachi と教務長官 Mouth とは明法博士を従へて成吉思汗の本營に赴き満足す可きの誓約を得しかば撒馬爾罕の城門は乃ち開かれたり、墨壁破壊の工作は直ちに開始せられたり、住民は強制的に出城を命せられ何人もあれ留まるものは之を殺す可しと令せり。但し法官教務長官并に之が隨従は特に例外の待遇を受けしがその數極めて多く即ち之に護衛を附せり。連によればこの二人の官吏の隨従若しくはその保護を蒙むるものにかつて劫掠の當時撒馬爾罕にありしものはその數五方に達すと云へり。かくて蒙古兵は城内に闖入して掠奪を縱にし潜みて城外に出でざりし多數の住民を容赦なく處分せり。

撒馬爾罕陷落の夜阿兒潑汗 *Alukhan* と呼べる土耳其種族の一將軍千人の兵を率ゐて内城より出で首尾克く蒙古軍の圍を破りて往きて支丹の麾下に合せり。攻撃軍は天明より内城の四方を同時に攻撃し夕に至りて遂に之に進入せり。勇猛の士千人回教寺院に籠りて頑固に防禦

を試みしが蒙古兵は之に火を放てり。

次に降服せる康里人は之を波斯人と離隔しその馬匹と兵器とを沒收して平原中の一區域に集合せしめたり。蒙古人の習慣としてその旗下に收めて從軍を許可せる外國軍隊をして蒙古の風俗に倣はしむるが故に、康里人をして前頭部の髮毛を剃りて蒙古人の如く辮髮を結ばしめしが蒙古人辮髮のことに付きこれ唯その剃滅を行ふ可しと定めたる時めしがては Du Pin Carpin 參照。間まで之を安心せしむるの策に過ぎざりき。その夜康里人三萬は領袖巴力世瑪思汗 *Parischnaz-khan* 托海汗 *Togai-khan* 薩兒賽特汗 *Sarsig-khan* 烏拉克汗 *Ulak-khan* 以下二十人餘の將軍と共に悉く虐殺せられ、その馬匹家族輜重は戰勝者の鹵獲品となれり。

撒馬爾罕の住民は夥しく斬殺されたり。残れる人民のうち就きて工藝家職工三萬人を抜き成吉思汗は之を皇子王妃將校等に進物として分配せり。兵役に徵發せられたるもの亦之と同數なりき。剩す所の捕虜約五萬一千は黄金二十萬的那の贖價金を得て都城に歸るを許可せり。

但し都城の政治を行ふものは勿論蒙古人なりき。撒馬爾罕新徵兵の一部は成吉思汗親から之を率ゐてアム河を越え、他の一部は花刺子模に向て派遣せる皇子の軍に屬せしめたり。その後壯丁の徵發は幾度か行はれ、この不幸なる兵士の内その歸國せるは極めて少數なれば撒馬爾罕省は殆んど全然無人の境とならんとせり。邊疆に據る。

撒馬爾罕に軍用に供する二十頭の象ありて支丹の所有に屬せしが、その看守に任じしもの之を成吉思汗の許に牽きて之が飼養の費を辦せんことを乞へり。成吉思汗はその捕獲せらるる以前は如何にして生活せしやとて之を知らんと欲せしを以て、象を看守せるものはその牧草を食せる旨を奏上せり。かくてこの動物を野に放てとの命令は與へられ、象は何れも飢えて死せり。

蒙古軍の前進

初め撒馬爾罕城外に達するや成吉思汗は謨罕默德に對して二軍を分遣せり。兩軍何れも一萬の騎兵より成りその一は別速持氏出身の諾延哲別之を指揮しその二は *Ouriangitai* の速不台把阿秃兒之に將たりき。

その之に與へたる命令は直ちに支丹に向て進みその重兵を擁するを見れば戦鬪を避けて大軍の來着するを待ち、之に反して謨罕默德若し背進せば息をも呉れず追撃す可く、服従せる城市は容赦を與へざる可からずと雖もその抵抗を試むる者は之を滅却す可しと云ふにあり。

蒙古軍がトランスオクシアナを蹂躪するや謨罕默德は恐れて戦地に近かすその神氣の沮喪せる有様は人民の間に知れ渡れり。撒馬爾罕の内城を脩築しその塹壕を延長して河流に達せしめしが、之が工事中一日その傍を過ぎしとき韃靼兵は頗ぶる夥しきを以てその鞭を投ずるのみにて能くこの塹壕を填むるを得可しと云へり。蒙古兵のトランスオクシアナ内地に進入するや謨罕默德は撒馬爾罕を棄てて途を *Kischned* に取れり。その通過せる各地の住民に向て王師は敢て人民保護の任に當るに堪へざれば須らく各自その安寧を圖る可しとの旨を説諭せり。左右に侍せる宰相將軍に對して一々如何なる方略を取る可きやを諮りしがその意見區々に岐れ却て支丹の優劣不斷を助長せるの

み。さりながら老功の將校は最早トランスオクシアナを救ふの時日なきを以て全力を注ぎてホラサン井にIragの保全を圖るととなし、各地に配置せる軍隊を悉く召還して一軍團を組成し、回教徒に向て全擧兵の令を發しアム河の戦線を防禦せざる可からずと論せり。或は謨罕默德に強ゆるに哥疾寧に退却し同地に於て韃靼兵に對抗せる諸軍を糾合す可しとの策を以てし、萬一武運拙くば以て印度に奔るを得可しと説けり。謨罕默德はこの献策の最も慎重なるを嘉納して哥疾寧街道に由て進みしが、バルクに於て宰相 Amad-ul-Mulk の來るに會ひその意見に従ひて方略を一變せり。Amad-ul-Mulk は支丹の皇子にして Irac-Adjem の太守なる屋肯哀丁の首相なり、太守が首相を父王の許に派遣せしは表面この危急の場合に際して有用のことある可しと云ふにあるも、その實首相の左右に侍する時は太守は虚器を有するに過ぎず而も首相は謨罕默德の信任厚きより之を敬重せざるを得ざるの事情あるを以て、之が掣肘を脱ぬかれんとして敬して遠ざけたるなり、宰相は一身の

位地の困難なるを感じ保護者の許に留まらんことを欲せしも、Iragは即ち故郷にして家族も亦之に住へるより自から愛着の念を生じて必之に向へり。乃ち謨罕默德に向て帝國のこの地方は民衆に於て將た資力に於て視て以て寶庫となす可く之を利用して以て野蠻人を擊退す可しと説きて同地方に赴かんことを勧めたり。謨罕默德の皇子只拉兒哀丁は前後二種の退却策に對して等しく反對し、蒙古兵を阻みてアム河を渡ることを得ざらしめんと欲し、支丹若し遠くIragに向ふの決心を定めしとならば、軍隊の司令權を小子に委ねよ、往きて敵兵と會戦せんと要求し且語を添えて曰く『よしや武運拙くとも人民は又我等に呪咀を加へ且彼徒は今日まで我等を苦むるに租税を以てし難局の來るや我等を韃靼人の狂暴に委棄せりと云ふと能はざらん』とされどその切願は毫も功なく、支丹はその辯論を視て以て青年客氣の妄言に過ぎずとなし、吉凶は既に天命を以て定まれるものあり、不幸の來るを止むるは不可能なり、如かず星位の變じて我に使なるを待たんにはとて只

(二月二日)
四月、一八日

(三月七日)
五月二日

管その恃む可からざるを恃めり。突、遠に據る。
 バルクを出發するに先ちサルタンはEumed撤馬爾罕の中間に位せるPendjabに一枝隊を分遣し同地に駐屯して敵兵の運動を通報せしめしに應て蒲花羅落城の報知に接せり。間もなく又撤馬爾罕陷落のことを傳へ來りしかば支丹は最早一刻も猶豫せずUgに向て出發せり。扈從の士卒は多く土耳其種族にして土而堪哈敦の一族たる之が領袖輩は弑逆の陰謀を企てたり。謀罕默德は之を偵知し夜中帳幕を更めしに翌朝その常に眠れる帳幕の數限りなく矢の簇り立てるを見たり。この逆謀ありしより警戒益、嚴に急行 Nischabour に至りしが蒙古兵未だアム河を渡らざる可しと信じこの地に駐營せり。然るに三週間の終に至るや蒙古兵ホラサンにありとの報あり、謀罕默德は狩獵に出づと稱して少數の供奉を隨へ直ちにIrag門よりNischabourを出發せり。而して間もなく全市人心恟々たるに至れり。據る。
 支丹追撃の命を受けて撤馬爾罕より分遣されたる兩軍は橋梁渡舟に

よらずしてPendjabに於てアム河の流を断れり。蒙古兵は樹枝を編みて之を覆ふに牛革を以てしかくして一種の靴を造りその兵器携帶物を之に藏めて以て身に著け緊く馬尾を握りて放たず、而して馬は泳ぎて彼岸に達せり。かくの如にしてこの騎兵は擧て河流を横斷するを得たり。
仁に據る。Carpisには馬尾に緊着せる靴の上に坐し二本の楯を用ゐて渡河の助となす。とあり。又希臘の歴史家Nicetas Choniatesは土耳其種Pachinatesのドナウ河を渡るや皮革を緊縛して一滴の水をも透らざらしめ之にコークを充溢してその上に坐し馬尾を握り鞍と武器とを保持し馬を帆となし皮革を船とし容易に大江の水を横斷すと云へり。』
 將軍哲別、速不台は長驅して深くホラサンの大省に進入せり。ホラサンは當時極めて隆昌にして四縣に分割されしが四縣の要地はメルブ、ヘラ、Nischabour并にバルクなりき。蒙古兵の近くやバルクは進物を携帶せる使節を之に送りて降を乞ひしを以て蒙古軍は同市に知事を置けり。Zave市はこの前例に倣はざるのみか城門を鎖ざして糧食の供給を拒めり。蒙古兵は前程を急ぎしを以て淹留して之に包圍を加ふることを爲さず將にその傍を過ぎて前進せんとせしに、住民が鑼鼓を亂打し壘壁の頂より敢て抵抗を試み爲に損害を生ずるを見るや踵を轉じて

市城を攻撃し三日の末に至りて之を陥れ、その住民を悉く屠り、その擄へ難きものは或は粉碎し或は焼却せり。捕虜を拷問し之をして真相を言明す可しとの宣誓を行はしめて、謨罕、默徳の動靜を審にしかくて、*Nischabour* に向て馬首を向けたり。行く／＼各市に軍使を派遣して之に成吉思汗の近く大兵を擧げて來着す可きを報じ且降服を勧め之を拒絶する場合には最大不幸を蒙る可しと脅逼せり。降服の決意を爲せるものは官印 *Tamga* を帯びたる蒙古人の成將を戴くこととなれり。抵抗せるの城市若し強固ならば蒙古人は之を攻撃して劫掠を加へ若し防備の整へるを見ば之を後にして前進せり。何となればその第一の目的は支丹に追及するにあればなり。

支丹の *Nischabour* 發登後同市には宰相法官教務長官假政府の事を委ねられて施政のことに當り、支丹の任命せる新知事なる宦官 *Scheraf-ud-din* の花刺子模より來着するを待てり。この知事は途上に於て病を獲 *Nischabour* を距る三日程の地點に於て不歸の客となれり。然るに家從等は

(三月十九日)
五月二十四日

護衛の士卒がその資財を掠奪せんことを恐れてこの事實を秘せり。假政府委員の一人は武裝せる一隊を従へ往きて之を迎へんと稱して城市を出で之が行李を *Nischabour* に賣らせり。然れども *Scheraf-ud-din* の一行千有餘人は市内に抑留さるるを欲せず、支丹の麾下に加はらんとして出發せり。翌朝この一隊は *Nischabour* を距る三リーグの地に於て蒙古軍前衛の追及する所となり、屢殺されたり。蓋この前衛は市城に近づくに及びその進軍の事實を偵知し直ちに之を追撃せるなり。

市城は城門を開く可しとの督促を受け支丹にして捕虜となるの時に至らば降参せんと答へたり。第一に來着せる部隊は糧食の供給を受け、てその進軍を繼續せり。以後連日爾餘の部隊城側を通過し何れも給養を受けたり。最後に諾延哲別 *Nischabour* の城外に着し、教務長官法官宰相に對して來訪せよと命令せり。乃ち三人の平民を以てこの假政府の委員なりと稱し糧食と多少の進物とを携へて之に赴かしめたり。遂に蒙古將軍は畏兀兒文字もて記せる成吉思汗の諭告を之に交付せしがそ

(四月一日)
六月五日

の文に曰く「守將貴族并に平民よ、知れ上帝が朕に東西兩洋全地球の帝國を與へ給へるを、降服するものは之を助命せん、抵抗するものには災禍立るに至りその妻子從僕を擧げて悉く屠らる可し」と之に同時に若し城市の全滅を免ぬかれんと欲せば將來來着す可き蒙古軍に悉く糧食を給し決して水火の反對を試む可からず又城壁の堅牢と戍兵の兵力とを恃む可からずとの旨を諭達せり。割に據る。

蒙古兵の兩軍には回教徒并に邪教徒たる多數の軍人は勿論無賴の徒も亦掠奪を行ひその他あらゆる悪行に出づるも處罰を受けざる可きを思ひて之と共に次第に旗下に集まるあり、疾風迅雷、謨罕默德を追跡し沿道を掠め馬匹家畜を奪へり。Khabouschan、Thouss、エフヘン、カンガ Esferain、Daneagan、Sinnan は Irac Adjem 省に入らんとして Coumouss を横断せる速不台に劫掠せられたり。波斯のこの省は砂漠によりてホラサン Fars、Kerman 三省の地と隔てられ幾多の嵩高なる山脈之を横断し其最高峯は千古の雪を戴けり。亞刺比亞人は即ちこの地方の地形に基きて之に Djibal 即ち

山國と云へる稱呼を與へたり。將軍哲別は途を Mazenderan 省に取りて Ray 城外に至りて速不台の軍と連絡を通じ同市を襲ひて之を劫掠せり。野蠻人は男子を殺し婦人兒童を俘囚となして陣後に從へ前代未聞の殘忍を極めたり。トに據る。真には是より先 Ray には散居なる宗派の軋轢ありては痛くこれを怒り將軍哲別に款を通じ城市陷落の如きものは待むを得ずとて Selahy 處殺せしめし。哲別は次で同宗教の信徒を賣るが如きものは待むを得ずとて Selahy 派の信徒をも亦屠れりとあり。

謨罕默德は Nischabour を棄てて出奔し皇子屋肯哀丁が カザン Gazvin の城壁内に Irac の軍隊三萬人強を糾合せるを聞きて其陣營に赴き防禦の良法に就きてこの軍隊の將校に諮問し且つ思慮の勝れるを以て有名なる Lour 地方の諸侯 Hezar-Asb Hezar-Asb の父 Abou Taker はトルド種の出身にして初め之を略し次で君長に背きて自立して同地の王となれり。Hezar-Asb は一六〇年にその位を嗣ぎ Schoula と呼べる遊牧民族を Fars に驅りハッパ、那昔爾より Anbey の稱號を得一三二九年に死すをして入觀せしめたり。史に傳ふこの小君侯の來着して大韃に近かんとするや七度虚脱して仆れ支丹乃ち之に着席を許可したりと。Hezar-Asb のその宿舍に就きしとき謨罕默德は宰相 Arnad-til-

兀里と上將軍二人とをその許に遣はしこの國家危急の時に際して如何なる方略を取る可きやを協議せしめたり。Loh 侯の意見は謨罕默徳は須らく一刻をも猶豫せず Loh と Fars との境界に當れる山脈の背後に退却す可し、同地方は物資の給養豊富にして容易に Loh 人 Schakarkar 人 Fars 人并に Schebankare 人 Schakarkar 人とは共にクルド種の山地に住す。 を以て組織せる十萬の歩兵隊を徵募するを得可く、これを以て前記山脈の咽喉を扼する時は以て韃靼兵の進入を阻止するに足らんと云ふにありき。而して一度勝利を博せんか乃ち兵士の勇氣を回復しその野蠻人に對する恐怖の念は又跡を留めざる可しと附言せり。然るに支丹は Loh 侯がこの献策を爲せるは謨罕默徳を我が領土に誘ひて以て隣國 Fars の Atabey を掣肘せんが爲なりと邪推し、幸に危険の遙に大なる強敵を撃退するを得るに至らば Atabey 征服の事業に着手せんと云ひてこの方略に従ふを欲せざりき。

を發表するや偶ま Bay 劫掠の飛報は來れり、この凶報の外間に傳はるや君王の左右に群集せる王侯貴族は各々先を争て出奔し、軍隊は支離滅裂又收拾す可からず、蒙古兵の與へたる恐怖狼狽は實に至大なりき。支丹は皇子と共に出でて Caroun の城寨に避難せんとせり、途上敵兵追及し來り支丹と知らずして之に向て矢を放てり、爲にその乗馬は數箇所を負傷を受けしも而も能く支丹を乗せて Caroun に入れり、謨罕默徳はこの城寨に止まること僅に一日、數頭の駿馬を獲てバクダード街道に由りて疾驅せり、その城寨より出奔するや間もなく蒙古兵は支丹を生擒し得可しと信じて之に逼りて攻撃を加へしが激戦ののち支丹既に城内にあらずと聞き直ちに之が追撃を爲し途上その暇を與へたる嚮導を捕へて支丹のバクダードに向て走れるを知れり、然るに支丹は既にその方向を變更せしを以て蒙古兵は之が踪跡を失ひ嚮導を殺して歸路に就けり。

謨罕默徳は Caroun を西北に距る數十リーグにして高山の頂に位せる

Serdjhan の京城 ラインマン文庫發 Safi-ud-din Abd-oul-Moumin 撰 Merasid-ul-ittilā ala esma'i 註 語にて世界のに向て避難せり。同地に滯留すること僅に七日にして次で Gulian に赴む。更に Mazenderan に向ひしがその同省に着するや殆んど單身にして又一物をも携へざりき。

蒙古兵は既に同省に進入し首府 Anol 并に商業地 Astier-Abad を劫掠せり。諛罕默徳は來りて朝貢せる Mazenderan の諸侯 emirs に諮ふに蒙古兵の追撃急にして一瞬の休息をも與へず何れの堅城に據らば之に對する避難の地を得可きやを以てせり。諸侯は乃ち暫く Mazenderan の海岸に近き裏海中の一小島に退却せんことを懇懇せり。諛罕默徳はこの献策に従はんと欲せり。據る。かくて數日間海岸の村落に滯在せり。傳記家 Zasa の諛罕默徳は曰く「支丹の同地にあるや宗規に従ひて回教寺院に詣で五回の祈禱 namazs を行ひ同寺院の式僧をして Couran を誦誦せしめ、涙を流して上帝に對して若し政權を回復するの日あらば帝國內に正義を行はれしむ可しと誓約せり」と。この村落にありてしかくその日

諛罕默徳
Abis
Couran 島に退
きて租界す

を過せるうち蒙古兵の一隊は來着せり。この野蠻人のうちに Mazenderan 省内の小國 Kelbond-djame 侯 Rohn-ud-din と云へるものありて同行せり。初め諛罕默徳その伯父并に従兄の領土を奪ひ且之を死刑に處するの命令を與へしを以て怨恨骨髓に徹して遂に敵軍に投じその一族の所領を克復せるなり。諛罕默徳は辛うじて輕舟に駕し以て海上に出づるを得たり。陸上の兵は之に向て矢を放ち若干の敵騎は只管之を捕獲せんと欲するの餘り馬を躍らして水中に入り波浪を破て進みしが何れも溺死せり。

諛罕默徳は肋膜炎に侵され臨終の遠からざるを知りしを以て乗船の海岸を遠かるや嘆息して曰く幾多の邦土に君臨せしが今や墳墓の地となすに足る可き數尺の領土に存するなしと。一小島に上陸して甚くその安全の地に到着せるを喜び帳幕の内に住居を定めたり。 Mazen-deran 海岸の民は糧食その他以て支丹を慰籍し得可しと信せる種々の物品を献納せり。支丹は之に報いるが爲官職食邑授與の辭令書を之に

交付せり、但し謨罕默德はその供奉員の多数を皇子の許に勅使として派遣せしかば、辭令書を交付さるるもの親から之を調製せること少からざりき、數年の後只拉兒哀丁が父の故國の一部を回復するや乃ちこの辭令書を提示せしに皆榮譽に與れり、而して支丹謨罕默德が恩賜の證として之に與へたる短劍若くは手巾を齎らせるものは、その約束の履行を得たり、

謨罕默德はその災禍の日々に激甚に赴くを感じ書を皇子只拉兒哀丁、鄂斯拉克沙并に阿克沙 Aq-shah に與へて來りて左右に侍せしめ、鄂斯拉克沙を皇太子に選定したる前年の詔勅を取消して唯只拉兒哀丁のみこそ帝國を拯ひ得可けれど、の旨を勅し、親から佩劍を取りて腰に著けしめ、幼弟をして之に對して忠誠を誓はしめ終始之が命令を遵奉せんことを諭告せり、かくて兩三日の後遂にその最後の呼吸を終りて島内に埋葬せられたり、史家はこの島を Abigoum と名け又或は Abigoum 海即ち真海上の沿海の一村なり、Ebn Houneil 地理書參看、Abigoum を距る數リリーの海上に三個の島あり、支丹の避難せるはその一なり、波斯人は又真海に Tabastan 海、Khazars 海等の稱呼あり、Abigoum は Mazenderan 省 Djoujjan 市の船舶寄泊地たり

ふ、但し壽衣をも得る能はず、褌衣を以て屍體を包めりと云ふ、保にバクダード遠征までは謨罕默德の企圖一として成功せざるはなく、その野心を満足するが爲に幾多の小君侯を犠牲に供して以てその領域を膨大ならしめしにその最後の悲惨なりしこと實にかくの如し、
史家の謨罕默德を評するやその所言桷鑿相容れざるものあり、Djouvein の Alai-ud-din と Hénédan の Raschid とは共に成吉思汗の後裔に仕へて宰相の職に陞り何れもその花刺子模帝國入寇の記事を詳細に後世に傳へしが、その記述に従へば謨罕默德はこの國家危急の時に際し優柔不斷、恐怖の念に制せられ、占星家に不吉なる信用を措きて方略麻痺、その出づる處を知らず、輕率にも心裡に潜める狼狽の色を面に表はし怯懦なる振舞によりて軍人々民の意氣を沮喪せしめ、敵兵の追撃を避けて一時の苟安を貪らんことをのみこれ圖れり、兩史家の言にして信す可くんば謨罕默德は Isie に避難するに先ち Nischabour に淹留せる三週日の間唯快樂に耽れるのみ、二六時中を歌舞饗宴の間に徒消し左右に侍

するの徒は唯歡樂を助くるの徒のみ、地方官は諸般の政務を怠りて只管射間歌妓を推薦するに汲々たりきと云ふ。されど當代の作家 Ibn-ul-Bihar の描寫する處に據ればその性格遙に見る可きものあり。曰く「謨罕默德は極めて博識の君にして殊に法律の學に精通せり。その好む所は學者、明法博士、僧侶等との交際にして盛んに之に恩賜する處ありき。堅忍にして倦怠の何物たるを解せず、毫も豪奢快樂を思はず、獨り靜座して國務に盡瘁し帝國の政治と人民の幸福とに就て焦慮せるのみ」と。史家 Zehbi は之を評して活潑勤勉大膽なりしも唯野心に驅られて非道殘忍に陥りしことありと云へり。照參そは厄に角蒙古兵入寇に際して謨罕默德の行動怯懦に流れしことは何人も之を辯護する能はざる可し。

アム河の防禦線を棄てて退却するに先ち謨罕默德は急使を花刺子模に馳せて母后に向て供奉を舉て Mazenderan に避難せんことを慫慂せり。保に土而堪哈敦は時に恰かも成吉思汗の許より陷擠的提議を接手

せり。成吉思汗は謨罕默德が母后と相容れざるを知りこの軋轢に乗じて爲す所あらんとし侍從丹尼世門を遣はして、母后に對する謨罕默德忘恩の舉措は會て耳にせしところにして目下交戦に際して支丹部下將軍の一派は款を通じて我軍を助く、而して朕は土而堪哈敦の君臨せる地方即ち花刺子模を侵略するの意圖なし、腹心の臣下を朕の許に致さば口づからこの文書の主意を正式に保證せんとの旨を母后に告げしめ、且その征服事業を完うせるの曉は母后にホラサンの領有權を與ふ可しとの約束を爲せり。されど支丹母后はこの使節に對して回答を與へず、支丹より退却す可しとの警戒に接するや謨罕默德の妃妾皇子を伴ひその財寶のうち携帶し得可き限は之を一括して花刺子模を去り、且出發に先ちて蠻行を演じたり。即ち蒙古兵は戰利品を鹵獲し了らば必ず帝國より撤退するならんと想像せしを以て豫め戒愼を加へ殘忍にも諸王侯の謨罕默德にその領土を奪略せられたる後花刺子模の監獄に呻吟せるものを殺さしめたり。The のセルヂク朝最後の支丹托

古洛耳の二子、Talik 侯父子 Tened の領主 Banian 侯 Yakisch 侯 Signac 領主の二子、郭耳の最後の君王馬赫模特の二子并に爾餘の多數の王侯は悉くアム河に投せられ、この惨憺たる最後を脱ぬかれ得たるは獨り Yazer 侯の子 Omar-khan のその故郷に達するの道途を熟知せるより以て出奔に際して嚮導たらしめ得可きあるのみ。實に Omar-khan は熱心この任務を盡せしが而もその Yazer 附近に至るや母後の命ありその身首は遂に處を異にせり。保送に據る。

土而堪哈敦は途を Disistan に取りて Mazendaran 省に到れり。謀罕默徳の來りて同省に避難するや母后并に王族に向て同省内山脈中の冠たる一峻嶺に位せる堅城 III の城内に立て籠らんことを勧めたり。將軍速不台は進んで謀罕默徳を追撃するに當りて一隊の兵士をこの城塞の下に逼らしめたり。III 地方の天は數、雲霧の濛々たることあるが故に、何人も亦乾燥の場合に備ふるが爲に貯水池を設くるの必要を思はざりき。然るにこの城塞の包圍を受けしとき偶ま稀有の現象を呈し久し

謀罕默徳の母后妃妾捕虜となる

く降雨に遭はざりき。包圍數箇月の終に至り飲料水缺乏の極成兵は已むなく降參せしが蒙古兵が III を占領せしその日蒼天は忽ちに密雲を以て覆はれたり。土而堪哈敦は謀罕默徳の妃妾皇子と共に當時 Talagan の包圍に従事せる蒙古君王の本營に導かれたり。土而堪哈敦は俘囚として拘禁され皇子は未だ弱冲なりしも殺害に遭へり。支丹の皇女二人は之を親王察合台に下賜せしかば察合台はその一人を後宮に納れ他の一人は之を回教徒なる家令 Habesch-Amid に與へたり。第三の皇女は成吉思汗の侍從丹尼世們に歸り。撒馬爾罕の君侯鄂斯滿の寡婦公主 Khan-sulane は Ind 市に定住せる一染物師に捕へられてその妻となれり。土而堪哈敦は成吉思汗と共にタルタリーに伴はれ一二三三年に和林 Caracounum に於て長逝せり。宰相 Nasir-ud-din は母后と同時に捕虜となりしが Talecan に到着せるとき死刑に行はれたり。保送に據る。但し保を下賜せられ之を納れて數子を擧ぐとあり。

III の落城旦夕に逼れるとき土而堪哈敦に仕へし閹官の一人は身を

完うして園を破り只拉兒哀丁が當時大軍を擁せりとの報を得しを以て往きて之に倚らんことを進言せしも却て俘囚の愛目を見ることを欲すと之に答へたりその我が孫なるこの皇子を憎めること實にかくの如く甚しきものありき。

謨罕默徳の寶玉も亦等しく戦勝蒙古帝の掌裡に歸したり退きて Irac に出奔せんとして Bistam 市を過りし時支丹は麾下將校の一人に寶石類を藏めたる小箱十個を託し命じて之を Erdehan 城の守將に交付せしめたり城は Rasi の北に當りて Irac Mazenderan 兩省の境界を劃せる山脈のうち位しその峻嶺の頂にあるより難攻不拔の評ありき蒙古兵はこの城下に逼り守將若しこの寶玉を交付せば特に助命せんと約して之を納め以てその君王の許に致せり。保に據る。

謨罕默徳の死後三皇子は海路 Balkhan 灣内の Mankischlak に赴むと更に花刺子模に至りて至大の歡迎を受けたり支丹母后の出奔するや倉皇留守の官吏をも任命せず爾來この帝都は無政府の状態に陥れり忽ち

(六一七年二月十五日)
一二二一年二月一日

にして幼年皇子の左右に集まるもの七万人に達せりこの軍隊は土耳其種康里人を以て組織されしを以てその領袖は皇子鄂斯拉克が位を兄只拉兒哀丁に譲れるを擇ばずその幼冲なるは以て諸將の野心を達するに於て便宜ありと雖も只拉兒哀丁の剛毅果敢なる默從の境涯に甘んせざる可からざるの恐れありかるが故に諸將は即ち新支丹に對して弑逆の陰謀を企てたり只拉兒哀丁はこれを偵知し即刻出奔して僅にその危難を免ぬかるを得たり曩に忽篋を守り不思議にも蒙古兵の劍鋒を避けてその生命を全うせる老將帖木兒蔑里克時に花刺子模にあり只拉兒哀丁はその指揮せる三百騎を従へてホラサン街道を取り花刺子模とホラサンとの間に介在せる十六日程の砂漠を疾驅して横斷しかくて Nissa 地方に到着せり。保通に據る。

成吉思汗は撒馬爾罕を略取せる後同市と Nakscheh との中間に位せる地方にその軍隊を駐營せしめ一二二〇年の春夏の交は同地に淹留せしが秋季の近くに及び騎兵の休養終り乃ちその作戦を繼續せり謨罕

默徳の皇子の花刺子模に着しその城内に再び大軍の集合せしことは先づ注意を促し、この首府に向けて朮赤、察合台、窩闊台の指揮せる一軍を分遣せり。花刺子模より脱走することある可き軍隊退軍の路を断たんが爲め又之と同時にホラサン駐屯の軍隊に令して砂漠の南端に哨兵線を張らしめたり、この哨兵の一部を構成せる騎兵七百の一隊は只拉兒哀丁來着のとき既に *Nessa* 附近にありて警戒せり。この親王は猛然之れに向て襲撃を加へ戦鬪久しきに亘れる後首尾克く之を潰走せしめて *Nischabour* に赴けり。 *Nessa* の謀罕默徳曰くこれ回教徒が蒙古兵に對して博せる最初の戦勝なりと。只拉兒哀丁の兩弟はしかく幸福なるを得ざりき、その兄出奔の後三日にして蒙古軍花刺子模を指して進むとの飛報に接し同じくホラサンに退軍するの決心を定めてその退軍の路を辿りしが *Nessa* の附近に位して彼の只拉兒哀丁傳記の作者なる謀罕默徳の所有に歸せし *Khaender* 城に達するや蒙古軍の一隊はここに現はれたり。この蒙古兵の任務は只拉兒哀丁の經由せる道路を

謀罕默徳兩弟子の脱死

偵察し皇子の後を追ふて砂漠を經過し來らんとする花刺子模軍をその途上に要せんとするにありて、鄂斯拉克并に阿克の到着は素よりその知らざる所なりき。 *Nessa* の謀罕默徳の姪は *Khaender* 城を出でて敵兵と戦ひ之を支へて以て年少皇子に脱走の機會を與へんとせしが、蒙古兵は逃走せる人物の何人たるやを偵知し直ちに之を追撃せり。かくて *Vesch* と云へる村落に於て追及せしかば兩皇子は駐軍の令を下して戦列を布き交戦の結果蒙古兵を敗北せしむるを得たり。戦勝者は最早安全なりと信じしに同一地點に於て他の敵兵の攻撃を受けこの新戦鬪に於て兩皇子は共に戦死せり。皇子の首は槍頭に貫かれたるままにて省内隈なく曝されたり。

Vesch 附近の農民は蒙古兵の寶石類を顧みざるより戦死せる花刺子模兵の屍體を搜索して夥多しく之を拾集し廉價に之を賣却せり。據るに「この間蒙古軍は花刺子模の首府にして通常この省名と同一の稱呼もて知らるる烏爾韃赤 *Keucandje* 亞刺比亞人は *Djerjanivé* と稱す。 *Orandje* と稱す。 に向て前進せ

り。アム河は Amou 市の稍下流にて花刺子模省に入り流れて鹹水湖なるアラル海に注げるがこの大都是アム河の兩岸に跨れり。この河流の兩岸にありて能く農耕に適するの地は唯花刺子模省内のみにして同地方は到る處町村點在せり。この狹隘なる地帯の上流に於てはアム河の兩岸唯砂磧の曠野を見るのみ。Ehr-Hanoul 地理書並に Seld-tin 地名辭書參照 三皇子の出奔後は烏爾韃赤には之を統御するの君長あるなく、土耳其種の將軍庫馬爾 Khumar と云ふもの支丹母后の姻戚於には兄弟なりとありなりとの理由を以て主將に推選されたり。包圍攻撃の未だ開始されざるに花刺子模兵は大敗北を招けり。蒙古兵の一隊進んで都門に逼り將に家畜を掠め去らんとするや、歩騎兵より成れる大部隊は開城突撃して敵兵を追躡し爲にその伏兵に遭ひて多數の戦死者を出せり。加之蒙古兵は敗兵を追撃して共に花刺子模に入れり、但し餘りに少數なりしを以て勿論城内に止まるの力なかりき。諸皇子が大部隊を引率して來着するや、都城に向て降服を促がし之に對して何等の災禍をも蒙らすことなかる可きを

約せり。朮赤の送りたる書には父より食封として花刺子模を得たれば之が首府を完全に保存せんことを欲するの情切なり、故にその滅却を企つるものあらば之を叱責せんと云ひ、而して兵士の強奪を行ふを禁じて地方の爲にするの意志を示したりき。思慮ある人士は須らく降服せざる可からずてふ意見を抱けり。殊に故支丹が Abisgoun 島より花刺子模の住民に與へたる勅書には「卿等は朕の祖先の優遇を受けたるが如く又朕よりも之を受く可きの權利あり、故に朕は一の勸告を與へて以て朕の情愛深きを示さざる可からず、勝ちほこりたる多數の敵兵より脅嚇されたるとき卿等の取る可き最上の措置は降服するにあり」と見えて之れが勢力を添へしも而も反對の意見は遂に勝を制せり。蒙古兵は先づ都城を去る少距離の地點に退却して包圍攻撃の準備に着手し戦闘の材料を調製せり。この地方には石塊の以て彈丸の用を爲すに足る可きものあるなく、乃ち夥多しき桑樹を伐採しその材木を以て彈丸の用に供せんとし石弩を以て之を發射するに先ちその重量を

大ならしむるが爲に暫らく之を水中に浸せり。蒙古兵は這般の準備的作業を行ふに當りその慣例に従ひ絶えず更る更る約束と脅嚇とを用ゐて以て士氣を鼓舞せんことを努めたり。占領各省より多數隊伍を爲して來れる新徵募員は塹壕填充のことを掌らしめ十日間にしてその作業を完成せり。次に包圍軍は都城の兩區域を連絡せるアム河上の橋梁を制扼せんと欲し三千の蒙古兵命を受けてこの攻撃に向ひ悉く戦死せり。この戦勝は著るしく花刺子模兵の勇氣を増せり。而も主として都城の陥落を遷延せしめたるものは朮赤、察合台兩親王の不和軋轢即ちこれなり。これが爲に包圍の作戦は萎縮し軍紀壞頽せるを以て、花刺子模兵はこの事情に乗じて數ば損害を敵兵に與へたり。包圍既に六ヶ月に亘れる時兩親王の派遣せる一將校は時に *Talican* 要塞攻撃の途にありし蒙古君主の許に來りて、皇子が花刺子模城下にありてその軍隊の大部分を失ひ之を略取するの希望を抛てることを報告せり。成吉思汗はこの計畫の成功を阻碍せる主要なる故障の何物たるやを知りて

花刺子模の征服

長子次子の所爲を怒り第三子窩闊台を以て包圍軍の司令長官に任じたり。この親王は深切を以て巧みに兩兄を調和し、嚴格を以て軍隊に於ける規律を回復したり。蓋從來その向ふ所敵なかりしは全くこの規律ありしが爲なり。かくて總攻撃の命を下し以て都城の運命を定めたり。蒙古兵は軍旗を城壁の上に樹てて城内に入り手に石油を納めたる壺を携へその遭遇せる第一の家屋に火を放てり。大勢既に定まれるにも拘はらず花刺子模兵は最も頑強に勇氣を振て防禦を繼續し通路毎に之を争へり。即ち一の街衢より撃退さるれば次の街衢に退却し、婦人小兒も亦この激戦に參與し九日間抵抗を試みたる後遂に多數の花刺子模市民は三方面に壓逼されて降を乞ふに至れり。警視總監諸親王の許に派遣せられて使命を宣べて曰く「我等は卿等の苛刻なる待遇を受けたり。嗚呼親王等よ、今や我等が卿等仁慈の徳に浴す可き時は來れり」と朮赤怒て叫て曰く「抵抗を試みて以て我等の軍隊の一部を剿滅し而して我等の苛刻なる待遇を受けたり」と云ふは抑も如何。今日まで我等こ

そ彼徒の苛刻なる待遇を受けたれ、今や彼徒に同一の待遇を施さん」と。市民悉く城外に出づ可しとの命を下し、工藝技術を善くするの徒は別に一團を爲す可しと命せり。この命を奉じたるものはその生命を全うしてタルタリに送られしも、この流寓を恐れ且住民の生命救はる可しと信じて敢て群集の團體を離れざりし多数の工匠は衆人と共にその運命を等うし蒙古兵諸隊の間に配付され或は劍を以て或は斧ビシヤを以て或は矢を以て虐殺せられたり。邊智には蒙古兵一人につき二十四人を殺し而して兵士の數は計五万人なりしと云ふ智には蒙古人に送られし工匠十万とありし之を免ぬかれしは唯青年男女の奴隸として虐待されしものあるのみ。この虐殺のち蒙古兵は都市に殘留せるものを劫掠しその荒廢を完うするが爲、アム河の河水を堰塞せる堤防を斷ちて之に氾濫せしめ、その家屋は滅却せられ市内に藏匿されたるものは悉く失はれたり。史家 *Edrisi* 曰く「爾餘城市の劫掠さるるやその住民は或は潜伏し或は遁走し或は死屍の間に臥して以てその命を全うせしも、花刺子模に於ては鞭鞭の劍鋒を免ぬかれたるものはアム河の河水

に於て溺死せり」と。

諸親王は始め花刺子模の市民に *Nedjen-ud-din* と呼べる有徳の部族長あるを聞き、包圍攻撃に先ち今や將に市城は戰鬪の慘劇を演出す可きを以て我が陣に來りて避難さる可しとの旨を傳へしめたり。然るにこの部族長は吾れ花刺子模人のうちにありて平和に生活を營むこと七十五年今やその將に死地に陥らんとするを見るに及びて之を棄つる能はずと答へ同胞と共に戰死せり。保邊智仁に據る。

成吉思汗は夏季を通じて *Nalushah* の大草原に駐營し、軍隊の馬匹が長途行軍の疲勞より回復せるを俟ち新に戰役を開始して *Ermed* の包圍攻撃に着手せり。この城市はアム河の北岸に位せるが勸降書を拒絶してその城門を開かずその壘壁内堡を毀たざりしが爲十日間の攻撃を受け、住民は悉く出城を命せられ蒙古兵諸隊の間に分配されて虐殺されたり。一老婦あり將に最後の打撃を受けんとせる時、助命せば美なる眞珠を與へんと叫べり故に之を求めしに既に嚙下せりと答へたり。茲

巴達克山の歸服

に於て直ちにその腹を割きて首尾克く一顆の眞珠を探り出すを得たり。成吉思汗は他にも亦等しく嚙下せるものあらんと推定より死者の腹部を割く可しとの命令を下せり。

この征服者は *Saman* 地方に冬季の本營を定めその東方に隣せる邦土を劫掠し、*巴達克山* 亞刺比亞文地理書 *Kossid ul-Jin* に曰く巴達克山は俗に *Baldak* 以て紅寶石を *Baldak* と稱す。この地方の山脈より寶石類殊に紅寶石を産するを波斯の使節が四歳に赴く途上に當ると。國は侵略に遭ひて服従せられたり。之と同時に親王拖雷の指揮せる一軍はホラサンに向て進みこの肥沃なる大省を蹂躪せんとせり。再び春季に入るやアム河河北の都市は或は滅却せられ或は降伏し盡せるを以て成吉思汗はこの江河を徒涉せり。バルク市の代表者は來り迎へて忠誠を表し且高價なる貢物を齎らせり。この有名なる大都の投降は以てその全滅を防ぐ能はず、これが滅却は既に決定して動かす可からざりき。成吉思汗は只拉兒哀丁が兵を擁して哥疾寧地方にあるの報に接し前進せるとき陣後に人口の夥しき城市の存するを好まず、バルク城民の人口を調査せんと稱して悉

くこれを出城せしめ以て虐殺し盡せり。蒙古兵は都城を掠奪し之を化して灰燼となしその城塞を破毀せり。

成吉思汗は次に *Fulean* 山間地方の城塞 *Nousret-ouh* 戰勝の山に遇れり、 の城塞に遇れり、この城塞の守將等はその地形とその堡壘とその戍兵の勇敢なることによりて防禦の便を得抵抗すること六箇月に及べり。邊智に據る。 成吉思汗は乃ち多數の捕虜を齎らし之をして第一線にありて戦はしめその背進するものは立ろに之を殺戮せり。蒙古兵は材木の足代の上に土砂を運びて丘陵を築き之を壘壁と水平の點に高め石弩を裝置して以て城内を亂射せり。守兵は百計盡くるに至り全軍開城突撃を試み包圍軍の陣列を破りて遁れんとせり。騎兵は山脈のうちに投じてその命を全うせしも歩兵は塵殺せられたり。かくて蒙古兵はこの七箇月間抵抗せる城塞内に入り又一人の生物をも遺さず且城壁を滅却し了れり。仁に據る。

野蠻人がその略取し得たる城塞の滅却に従事せるとき、拖雷は波斯に於ける最も殷富なる一省を全然荒廢に歸せしめし後來りて父の軍に

合せり。是より先ホラサンの一部は既に支丹謀罕默德追撃の命を受けて派遣されたる哲別並に速不台の兩軍によりて蹂躪され、而してこの兩將は征服せる各地に守將を駐在せしめたり。然るにその一度通過せる後蒙古兵再び來らず且支丹 Tug に於て戦勝を博したりてふ風説傳はりしを以て、これまで恐怖によりて萎縮せる人心は忽ちにして活氣を添へたり。Eihouss 義勇軍の首領は鎮將の資格を以て同地に駐屯せる蒙古の官吏を殺してその首を Nischabour へ送りしが、雖てこの輕率の行爲に對して處罰を受けたり。即ち Tug に向て出發せる兩軍の馬匹家畜を護るが爲に三百人に將として Oustona 郡に駐屯せる蒙古の一將校は Eihouss に向て進軍し同地に據れる軍隊の大部分を屠殺し同市の堡壘滅却に従事し以てホラサン征服の任務を帯びたる軍隊の來着を待てり。

一二二〇年の秋拖雷が同省に進軍す可しとの命令に接するや先づ前衛たらしむるが爲に成吉思汗の女婿諾延脱忽察兒 Toghatai 指揮の下

拖雷ホラサンを征服し蹂躪す

に一萬人の一隊を派遣せり。この將軍は Nissa 街道を取りて進みしにその指揮せる部隊の分遣隊は同市に近くに及び矢を以て迎へられ隊長 Belgousch 之に仆れたり。蒙古兵はこの勇士の戦死に報いるが爲來りて Nissa に圍を置けり。據るに

ホラサン省を棄てて Tug 省に向て出奔するに當り謀罕默德は麾下將校の一人を Nissa に遣はして住民に諭さしめて曰く今や進軍し來れる敵兵の戦鬪を爲すやその方法他の民族と同じからざるものあり、思ふに韃靼兵は戦利品に飽饜し了らば帝國より撤退す可きが故にこの際取る可き最上の策は城市を去て砂漠若くは山脈に避難するにあり、故に住民は出奔して以てその生命を全うすることを努めざる可からず少くも之が防備の爲に再び城塞を起すことを要せずと。この城塞は支丹塔喀施が Nissa を略取せるときその命令を以て毀たれ之が遺址は化して耕作地となれり。然るに住民は寧ろ之を再築せんと欲し直ちに作業に着手せり。

脱忽察兒の部隊は既にしてZesの城下に着し城壁に對して砲臺一座を築き捕虜并に新徵募隊をして二十門の弩砲を以て攻撃を行はしめたり。這般の不幸なる士卒は又破城搥運搬の任務に當りその背進せるものは直ちに虐殺されたり。十五日間撓まず攻撃を加へたる後弩砲の力能く一大破口を爲り蒙古兵は夜に乗じて城壁を占領するを得たり。天明に及びて更に城内に進入し市民を驅て悉く出城せしめたり。市民の原野に集合せしとき蒙古兵は之に命じて各、雙手を背後に廻し互ひに相連繫せしめたり。Zesの謀罕默徳は曰く「這般不幸の民は無我無中唯命令にのみ服従せり。若し離散して附近の山脈中に避難せしならんにはその多數は生命を全うするを得しならん。その悉く束縛さるるや蒙古兵は之を圍み男女老幼の別なく之を射殺せり。Zesの市民と同市に避難せる郡村の民とを併せ死者の數七万人に達せり」と。Zes掠奪の後三日蒙古兵の一枝隊は進んでこの謀罕默徳の所有に屬せる Khander 城を圍めり。この傳記家は語りて曰く「余は嶮山の頂に位

しホラサン堅城の一に數へらるる余の城塞にありしが、若し口碑にして信す可くんばこの城塞は回教の東方諸國に輸入されし以來余が祖先の所有に屬し而して省の中心にあるを以て捕虜の脱走せるもの人々の禁錮若くは死刑を避けて出奔せるもの等のために避難地の用に供せられたり。既にして韃靼兵は之を陥るることの難きを見るや、遂にZesに於て夥しき戦利品を獲たるにも拘はらずなほ飽き足らざりしか退却の報酬として棉衣一萬襲并に多額の爾餘物品を要求せり。余は之を承諾せしがこの物品を敵陣に送らんとするに當り蒙古兵は何人をも助命せずとのこと一般に知れ渡りしかば之が使命を果さんとするものなかりき。最後に二人の老人あり敢て身を以て犠牲に供しその子女を余の許に齎らし後事を託して出發せしが果して韃靼兵はその營を撤するに先ちてこの兩翁を殺せり」と。

この文豪は更に曰く「這般の野蠻人は忽ちにしてホラサン省内各地に横行するに至れり。その一地方に至るや農民を徵發し之を引率して將

(六二七年九月)二二二〇年二月

に略取せんとするの城市に向ひ包圍攻撃の材料として之を使用せり。満目荒涼として人心恟々甚しきは家居せるものその如何なる運命に遭遇す可きやを知らず却て捕虜となりしものを羨望するに至れり。地方の豪族も亦その臣下を従へその兵器を携へて韃靼兵の略取せんとせる城市の下に赴かざる可からず之に服従せざるものはその城市を攻撃せられ部下の農民と共に空しく刀の錆となれり」と採る。

次に脱忽察兒は Nishabour に向ひ同市を取らんとせしが攻撃の第三日に於て壘壁より放てる矢に中りて殺されたり。代て指揮權を握りし將軍は兵力薄くしてこの要地を抜くに足らざるを見圖を解きて軍隊を兩枝隊に分ち自から一枝隊を引率して Selzevar に進み三日の終に至りて之を襲取し七萬の住民を悉く屠れり。他の一枝隊は Hous 地方に向ひその進軍の途上に横はれる城塞殊に Car 并に Noan の兩城を下し悉くその住民を殺戮せり採る。

拖雷のホラサン省に入りて後第一に攻撃を加へたるはメルヅ Merv-

Schahidan 府なり。この府城は省内四大都府の一、セルヂック朝支丹瑪里克沙井に散者耳の舊都にして Merv-el-roud 河一名ムルガブ河々畔肥沃なる平原に位せり。アム河畔より遠く退却するに際し支丹謨罕默德は命をメルヅに傳へて官吏と軍隊とは宜しく附近の Merga 城に退却す可し。府民の移住する能はずして城内に止まるものは蒙古軍に服従す可しと令せり。然るに謨罕默德狼狽の事情は既にメルヅ市官吏の知る所となり。同市の知事巴哈夷倭兒 Behai-ul-mulk は Merga 城の恃むに足らざるを信じて去て Alauc Cayini に據れば Taberisan に於ける高山の頂に位せる堅城なりと云ふ。 城に籠り領袖の多くはメルヅに歸りその離散せるものも亦少からざりき。巴哈夷倭兒に代りて知事となりし人物は庸才にして教務長官 Mouth と等しく降參論を主張せしが、法官と Seyids の領袖とは之に反して防禦を試みんことを欲せり。既にして哲別速不台のメルヅ地方の Marouchac に至るや、府城の代表者は來りて服従の意を通せり。然るにこの際會て謨罕默德の護衛に任せし Boa と呼べるトルコマン人の一將校同種族の人民

を糾合して一軍を組織し突然メルヴに現はれ、防禦論に賛成せる府民省内のトルコマン人并に蒙古軍の徴發に應せず出奔して之を避けたるの人士をその軍旗の下に收めたり。

さりながら *Boqa* の權勢は久しく繼續せざりき。支丹が *Temud* より出奔するの時まで之に隨行せるメルヴの前の知事木直而倭兒 *Modhi-ul-Mulk* は支丹の死後メルヴの附近に至りしに市民と云はず軍人と云はず之に心を寄するものは多數相率ゐてその軍に投じたり而して *Boqa* の警戒その効なく木直而倭兒は首尾克く城内に入り軍隊は悉く之が制令を奉するに至れり。かくて *Boqa* も亦之に服従せざるを得ざることとなり。茲に於て木直而倭兒は帝王の位を窺僉せんとし親から皇室の血統を傳へたりと稱せり曰く我が母ははじめ支丹の後宮にありしがその身むに及びて支丹の命を以て出でて我が父に嫁せるなりと。

教務長官は蒙古軍に黨しその姻親なる *Sekhis* の法官と私に文通する所ありき。同市はメルヴを距る六日程の地に位し既に蒙古人を守將と

して戴けり。木直而倭兒は之を偵知せしも敢て知らざるの色を裝へり、然るに教務長官は親から秘密を洩らし一日回教寺院に於て法話を試みし際思はず『蒙古人の敵は悉く亡べよかし』と述べたり。この言を聞くと聽衆は甚しく激昂して辭色共に犯す可からざるものありしかば教務長官は狼狽して余が口頭より出でたるの語は余が思想に反對なりと云ひて辯解せんと試みたり。この事件は木直而倭兒をしてその嫌疑を確めしめしも而も明法の士に對しその叛逆の明證を俟たずして刑罰を加ふるを欲せざりき。但し間もなく之を獲るを得たり即ち教務長官が *Sekhis* の長官に寄するの文書を押收するを得たり。木直而倭兒は犯人を召換して詰問せしに事實を否定せしかばその自筆の書狀を示して詰りしに黙して一語をも發せず乃ち退席す可きを命せり。その出づるや知事の護衛兵は短劍を以て之を刺殺し足を以てその屍を蹴り以て之を公衢に致せり。

この間巴哈夷倭兒は *Alanc* 城を棄て *Mazenderan* 省に赴むきて蒙古軍

一首領の許に投じメルヅ府略取の策を建て若し之が領主たるを許さば毎年報酬として棉布を献せんと誓約せしを以て蒙古兵を供給され之を引率して出發せり。往きて Schenistan に至りてメルヅに起りたる革命の報に接し同地より書を木直而倭兒に送りて曰く我等は互ひに知事の職に對する軋轢の念慮を忘れざる可からず蒙古兵は極めて多數にして到底之に抵抗せんことを思ふ可からず蒙古兵は一瞬時の間に Neischabur 市を滅却し了れり。七千の蒙古兵は一萬の新徵募隊と共にメルヅに向て進軍中なり。余は今この軍隊と共にあり。余はメルヅの幸福に就て苦慮するが故に友誼的に倉皇之が通知の勢を執るとこの通知は府城の有力者間に甚しく恐怖の念を起さしめ避難の議出づるに至りしが更に再考してその虚報にあらざるやを疑へり。乃ち書狀を齎らせる二人の使節を詰問せしに事實を自白せしを以て之を殺戮せり。蒙古兵も亦巴哈夷倭兒の爲め欺かれたるを見るや之を斬に處せり。この狼狽より回復するや木直而倭兒に兵を *Armenians* に派し同市の法官

が親から諾延哲別ノンテンヂェツベの許に進物を齎らし且蒙古軍より *Armenians* 縣令の職を受けたるを誣めて之を拘引せしめたり。この官吏はその曾て死刑に行へるものの實子に引き渡され之が爲に復讐の料に供せられたり。當時暫らく敵兵進軍のことを談するものなかりしより木直而倭兒その他メルヅの名望家は悠々自適又危険の近づくを思はざりしに、忽ち *Armenians* の縣令は來着して蒙古兵同市の前面に於てアム河を渡りて進軍し來れりとのことを報道せり。實にこの野蠻人の一枝隊八百人はメルヅ附近に駐營せるトルコマン人に向て襲撃を加へしが戦闘の酣なるに際し花刺子模より來着せる土耳其兵の一隊二千名背後より蒙古兵を攻撃し殆んどその全軍を塵殺せり。捕虜となりし六十人は府内を一週せしめし後悉く屠殺せり。この戦勝の結果トルコマン人は *Armenians* の縣令を推選して首領となし最早木直而倭兒の命令を奉ずるを好まざりき。この一揆は更に府城を奪ふの計畫を立てしが知事はその謀計をして失敗に了らしめたり。茲に於て一揆はメルヅの郭外を劫掠して

之に復讐せり。

親王拖雷が占領諸省に於て徵集せる新徵募兵を併せて七萬の大軍を擁し以て府城の城下に通りしは宛かもこの際なりき。蒙古軍が第一に着手せし作戦は府城を距ること遠からざるの地に舍營せるトルコマン兵一萬騎を破るにあり、即ち伏を設けて之を誘ひその一部を殺戮しその一部を潰走せしめ、家畜のその所有に屬せるものは勿論そのメルグの城下に於て掠奪せるものを擧げて夥しく之を鹵獲せり。

翌日拖雷は五百騎を従へて城外を一週し堡壘を視察せり。前後一週日の間に部下の軍隊は悉く城下に來集せしを以て攻撃は即ち開始されたり。被攻圍軍は兩方面より二回の開城出撃を試みしも空しく撃退されたり。敵兵は終夜壘壁の周圍に佇立して以て一人の府民たりとも城外に脱走することを得ざらしめたり。翌朝木直而倭兒は蒙古親王の許に使節として高德の式僧を派遣せしに式僧の復命極めて良好なる約束を報じ來りしを以て知事は遂に親から貴重なる音物を携へて親王

(六一八年一月一日) 一二
二二年二月二十五日

の本營に赴けり。拖雷は木直而倭兒をしてメルグの政治を行はしむ可く住民の生命は之を助く可しとの保證を與へ、禮服を授けて之を身に纏はしめ、次でその友人その從者と懇親を結び之に官職采邑を授與せんと欲するが故に之を引見せんと希望を示せり。知事は人を派して之を求めしめしに親王はその來りて又抵抗を行ふ能はざるに及び知事を併せて悉く之を縛し、命じてメルグ富豪の姓名を擧げしめたり。乃ち名簿を調製して商人地主二百名を數へしに何れも蒙古軍の兵營に召換せられ、同じく姓名を登録されたる技藝家職工約四百人と共に之に赴けり。茲に於て兵士は府城に入りてあらゆる住民を市外に驅逐せり。令して曰く住民は各家族と最も貴重なる財産とを携へて出城す可しと、民衆の陸續として進行すると四日間に及べり。親王は平原中に金色燦爛たる席を設けて之に着坐し軍人の捕虜となれるものを延見してその首を刎ねしめたり。住民は之を見て涙の滂沱たるを禁ずる能はざりしがその運命も亦之に劣らざるものありき。男女老幼は悉く

隔離され、悲咽呻吟の聲は空中に反響せり。この不幸の徒は未だなほその運命の如何に悲惨なるやを解せざりしが、軍隊の間に分配されて悉く虐殺せられたり。この虐殺に際し *Sardis* の義勇軍はその法官の死に報いるが爲め刻薄なると遙に野蠻人に超えたり。その生命を全うするを得たるは唯四百人の職工と男女の少年の奴隸に充てられたるものとありしのみ。捕虜となりし富豪は拷問に遭へり、強逼してその財貨を隠匿したる場處を告白せしむるが爲に最も残忍なる苛責は之に加へられたり。都府は劫掠せられたり、蒙古兵は又セルヂク支丹散者耳の墳墓に寶貨を得可しと信じて之を發掘せる後火をその靈廟に放てり。メルグの城壁と内堡とは共に毀られたり。仁邊に據る。仁にはメルグ附近に於て死せしもの凡そ七十萬と記し、三日間を要し死屍の明なるもののみにて百三十萬人餘を得たりとあり。この虐殺の舞臺を棄てて *Nischabour* の劫掠に向ふに先ち能く父帝の資性を傳へたる蒙古の少年親王はこの荒廢に歸したる府城の知事としてその有力なる住民の偶然助命せるものを任命し、蒙古人の司令官を

して之が副たらしめたり。軍隊の遠く去るや地下の洞窟より約五千の人民出で來りしも、永く慘死を免ぬがるるの幸福を享有せざりき。蒙古兵の後れて拖雷の軍に加はらんとして同市を通過せしもの、亦皆メルグ市民の血に飽かんことを欲し、その首領はこの不幸の民に命するに各自その衣服の端に穀物を藏め之を携へて市外の兵營に來る可きを以てせり。不幸の民はこの命に従ひて殺されたり。この軍隊は進軍の途上遭遇せる避難の民を悉く屠りしが、之に次で來りし他の部隊も亦その目に觸れたる人民は一人も之を助けざりき。拖雷はメルグを隔つること十二日程の地に位せる *Nischabour* に向て進軍せり。この都市はその名稱波斯語にて *Sabour* の都府の義を有し *Casius* 王國の時代にはホラサンの首府たり。又之をイランと呼ぶものあり。これ古波斯の名稱なり。一世紀に満たざるの間に於て滅却されしこと二回、即ち一一五三年には支丹散者耳に叛きてホラサンを蹂躪せる遊牧民族土耳其種烏古斯部族によりて、一二〇八年には地震によりてとも

に慘禍に遭ひしも Nischabou は再びその廢址に起り、蒙古の親王が義兄
 脱忽察兒の戦死に報いるの熱情燃ゆるが如く來りて之れを圍みしと
 きはその城壁内に夥しき人口を收容せり。Mansur ul-Haqq 並に Dilian Xuma 參照。數箇月以來
 同市の住民は附近に來りたる蒙古兵に對して全力を盡してあらゆる
 災禍を之に蒙らせしを以て其攻撃を受くるを豫期して盛んに防禦の
 準備に盡瘁せり。壘壁には鏢槍を投ずるの器械として用ゐらるる弩砲
 三千、通常の弩砲五百を備へたり。蒙古軍の準備も亦之に劣らず精力を
 盡し、先づ Nischabou を首府とせる省内全部の蹂躪劫掠を了れる後、城市
 の下に投槍用弩砲三千、通常弩砲三百、石油壺投射用器械七百、雲梯四千、
 并に石塊二千五百荷を運びたり。但し石塊は附近の山脈も亦充分之を
 供給するを得たり。被攻圍軍の領袖雖はこの準備の大仕掛なると城市
 を圍める軍隊の夥しきとを見て士氣大に沮喪し、式僧并に名望家を以
 て全權委員を組織しホラサンの大法官を以て一行の長官となし、往き
 て親王拖雷の本營に至りて城市降服の意を通じ且蒙古の君王に對し

(六) 一八八二年二月二日
 一八八二年四月七日

て歳貢を納付す可きことを提議せしめたり。されど拖雷は全然降服を
 容るさず且大法官を留めて歸らしめざりき。翌朝拖雷は城市を一週し
 て士卒を激勵し以て強攻を行はしめたり。攻撃は諸方面より同時に開
 始されたり。時に恰かも水曜日なりき。終日奮戦夜に至るもなほ干戈を
 戢めず。曉に至りて壘壁は填充せられ城壁は七十個の破口を生じ一萬
 の蒙古兵は雲梯によりて之を攀ぢたり。攻撃軍は各方面より城内に闖
 入し之が街衢と家屋とは日没後まで幾多交戦の舞臺となれり。されど
 金曜日には全市蒙古兵の占領に歸し脱忽察兒の戦死に對して殘酷に
 復讐されたり。成吉思汗の女なるこの將軍の寡婦は一萬人に將として
 城内に入りその目撃せるものは悉く之を虐殺せり。殺戮は四日間繼續
 し犬猫をも亦屠れり。拖雷は屢にメルヴの劫掠に際し住民の多數が死
 屍の間に隠匿してその命を全うせるものありきと人の語るを聞き、命
 じてその激怒の犠牲となれる住民の首を悉く刎ねしめたり。かくてそ
 の首を積み上げて金字塔を造りしが男子女子小兒と各々之を區分せ

りと云ふ都市滅却には十五日間を要し全然之を破毀してその遺址に大麥を播種せり。住民のうち生命を全うせるは職工四百人あるのみにして職工は何れも北方に移住せしめられたり。されど又た地下に潜みて虐殺を免ぬかれたる不幸の民なきにあらず。故に蒙古の親王は一隊の兵士を留めて大軍の退却後避難の地より現れ出づるの民を屠らしめたり。その隠匿せる土窖内に於て最後を遂げたるものも頗ぶる夥しかりき。海州仁に據る。

四五年の後に至り只拉兒哀丁ヂェラアムチヂの波斯を領有するや年額三萬的那の上納金を容れてこの荒廢に歸したる地方の發掘權を許可せり。然るに財寶の之が所有者と共に埋没せられたるの地に就き一日にしてこの額以上を發見せるもの少からざりき。據る。

拖雷はヘラットに向て進軍せり。これホラサンに於て未だ征服を経ざる唯一の都府なりき。Thouss 劫掠のことに當れる拖雷の軍の一隊は同市の附近に於てハリフ、Haroun-er-Raschid の陵墓并にハリフ、Ali の後裔に

して Schyres の崇敬して措かざる kinet 波斯帝國地理雜記一八一三年倫敦出版二つ折本並に Djihan Kuma 參照。同市の守將は蒙古の親王が降服を促すが爲に遣したる軍使を殺さしめ、市民に向てその最も愛重せるものを勇敢に防禦せんことを忠告せり。ヘラットは同時に諸方面より攻撃され激戦一週間に亘りしが守將親から利を失ひしより有力なる降伏黨は勃興し來れり。拖雷は城内の民心和合せざるを察し直ちに降服せば被攻撃者の生命を援はんと約せしにこの提議は容れられたり。かくて支丹只拉兒哀丁ヂェラアムチヂの部下一萬二千人を殺戮し盡くせるを以て満足し回教徒の知事を同市に置き蒙古人の司令官を之に副へたり。一週間の後拖雷は Falean 郡フールンに於て父帝の陣に來會す可しとの命令に接せり。遂利に據る。

蒙古兵がホラサンに入寇せるころトルコマン人の小部族に Cayi-Khanli

と呼べるありて Merv-Schahidjan の附近 ^{パルティア}Mahan 郡に定住せしがこの怖る可き勁敵の來るを聞きて狼狽してその領土を委棄して西方に向て移住し往きてアルメニアなる Akhlat 地方にその居を定めたり。八年の後蒙古兵又來りてこの地方をも劫掠せるより Cayi-Khanlis は更に小亞細亞に避難せり。この部族は當時四百四十戸より組織されしがその部長 Ertegnoul は Roum のセルヂック朝支丹より希臘帝國の境上に接せる Angora 附近の地方に封せられ且 Oudj-Bey の爵を授けられたり、これ恰かも邊疆伯の爵に相當せり。この采邑は希臘帝國に對する蠶食によりて多少擴張されその死後その子 Osman 一に Ohman の襲ぐ所となれり。然るに小亞細亞のセルヂック王朝蒙古兵の爲に滅ばされし後その王國の各省を管轄せるもの采邑に據りて國を建つるに至り Osman も亦その小侯國の主權を握りて支丹の稱號を唱へオスマン朝の開祖とはなりぬ。時に一三〇〇年なり。無並に著者所載 Sal-el-din Bendi 撰 Tadjik-Talecan 歴史の冠土耳其文寫本に據る。 Talecan を滅却し了れる後蒙古の征服者は之を圍繞せる山間地方に夏

一三二一年

季の本營を定めたり。皇子察合台并に窩闊台も花刺子模より同地に來會せり。その兄朮赤は烏兒韃赤占領ののち之と手を別ちて獨りシル河の北方に向へり。秋季の近くに及び成吉思汗はその作戰を繼續せり。支丹只拉兒哀丁が大兵を擁して哥疾寧地方にありとのことを偵知せしを以て乃ち同地に向て進軍せんとせり。途上 Kertouan の城塞はその抵抗によりて一ヶ月間之を抑留せしが、城塞内のものを擧げて悉く滅却されたり。成吉思汗は次で Hindou-Kesch 山脈の高峰を超え進んで Bannian 城塞に逼りて之に圍を置けり。前記山脈は東方に連亘して印度の北方境界を組成せるものなり。Bannian 城下に於て察合台の一子莫圖根 ^{Moa-tougan} と云ふもの流矢に中りて殺さるるや、深く之を鍾愛せる祖父は復讐の情熱燃ゆるが如く、その軍隊は之が激怒によりて鼓舞され強襲を以て城塞を陥れ且一人の生命をも助けず又一物をも鹵獲する勿れとの命令に接せり。即ち全然之を絶滅せしめざる可からず。成吉思汗の希望はこの郡を化して永く砂漠たらしめんとするにありしが、百年の

後なほ同地は無人の郷たりき。
 察合台はその子の戦死せるとき事を以て他にあり *Bamian* 城滅の事業
 進行せるとき歸り來れり。察合台の父は之に少公子の陣歿を秘せんと
 欲しその不在に就きて不實の理由を告げたり。數日の後成吉思汗三皇
 子と共に食卓を共にせるとき伴て怒色を示しその命令に對して從順
 ならざるを譴責し視線を殊に察合台の面に注ぎたり。察合台は即ち恐
 懼してその膝を屈して明言すらく父帝の命令を拒まんよりは寧ろ死
 せんのみと成吉思汗は反復同一の譴責を加へ終りに臨んで言葉を添
 へて曰く『されど卿の言真ならば卿よくその言を保つを得可きか』と。察
 合台叫んで曰く『若し小子の言過たば小子は敢て死せんとす』と。成吉思汗
 は聲に應じて曰く『可なり矣。卿の子莫圖根は戦死せり。朕は卿の之を愁
 訴するを禁ず』と。電撃を受けたる如くなりしが察合台は而も能く己を
 制して涙を滌かざりき。されど食後野外に出でてその壓逼されたる悲
 哀の情を洩らせり。邊智に據る。

支丹只拉兒哀
 丁哥疾寧に退
 く

(六二七年一
 二月一五日)
 一二三二年二
 月一〇日

成吉思汗は時に支丹只拉兒哀丁が *Nadistan* 境上に駐屯して蒙古皇帝
 并に皇子拖雷の作戦掩護の任務を帯びたる一枝隊と戦ひて勝利を博
 したりとの報に接せり。只拉兒哀丁は花刺子模の砂漠を横断し *Nisabour* 附
 近に於て蒙古軍の一部隊を撃退せる後舊領哥疾寧地方に赴かんとし
 て途を *Nisabour* に取れり。されど同市に滞在せるは僅に三日間に過ぎ
 ず、その發程ののち一時間にして蒙古兵來着し直ちに之が追撃に向へ
 り。支丹は部下將軍の一人に命じて道路の分岐點に於て暫らく敵兵を
 抑留し而して後途を異にして退却せしめんとしこの命令は實行せら
 れたり。蒙古兵はこの將軍を追跡せしを以て支丹の踪跡を失ひ、かくて
 支丹はその日のうちに四十リグの遠きに走れり。されどその *Zouzen*
 に至るや同市に入りて暫らく安全の位置にありてその軍馬を休養せ
 んと欲せしも市民は之を肯せず却て蒙古兵來て城壁の下に於て之
 を攻撃せば墨壁の頂より石を投じて共に之を攻めんとて脅逼するに
 至れり。茲に於て支丹は深更に及びて再び發程せしに翌日蒙古兵 *Zou-*

zenに着しヘラット街道を取りて暫らく支丹を追撃せり。而も支丹は三日の後に至り幸にして哥疾寧に達しその政權は一般に承認され各種族より成れる幾多の軍隊は來りてその旗下に聚れり。哥疾寧は過ぐる一年間前後數回革命の舞臺となれり。初め Gour の人 Mohammed Ali Kharpoust と云ふもの支丹謀弼默徳の爲に同省を管轄せり。然るに支丹の遠くシル河を離れて出奔するやその小舅 Emin Melik と云ふもの當時ヘラット省を食邑として治めしが之を棄てて遠く戦地を避けんと欲し土耳其種康里人二萬を引率して哥疾寧地方に移れり。この首府を距る兩三日程の地に到りしとき官吏の一人を Kharpoust の許に遣して時局の利運多少回復するの日に至るまで部下軍隊駐屯の地を貸與せんことを求めたり。總督とその部將とは之に答へて曰く「我等は Gour 人にして卿等は土耳其人なり、焉んぞ相共に雜居するを得んや。支丹の命によりてその各種軍隊の定住地域は既に劃然として動かす可からず、各々その領邑に定住せん」と。Emin Melik はその要求を反覆せ

しもその効なかりき。只拉兒哀丁の宰相なる Serakhs の Schems-ud-din 時に哥疾寧にあり内城の司令官と相議して Kharpoust は君王の親戚を拒みて省内に入れずこれ叛徒の所爲なりとて之を仆さんとし、城市附近の園圃に宴會を催せる際之を招待し宴の酣なるに及びて司令官手から之を刺殺せり。陰謀を企てたる兩人は直ちに哥疾寧に歸りて府城を距る半リーグの地に舍營せる Gour 兵が未だなほその主將變死のことを聞知せざるに先ちて之が實權を掌裡に收めたり。Gour 兵は主將の最後を聞くや解散し Emin Melik は招かれて府内に入り總督のこゝを行へり。間もなく蒙古兵 Bost 街道に依りて進軍し來るとの報あり。Emin Melik は之と會戦せんとして進軍せしがこの枝隊は微弱にして抵抗を試むるの力なくヘラットに背進せり。この遠征に際し Emin Melik は同行せる宰相 Schems-ud-din を拘留して Kelhouman 城塞に之を幽囚せり。されどその不在に乗じ哥疾寧に叛亂の勃興せるあり、内城の司令官は犠牲として

Kherpoust の靈前に供へられ、有力なる市民は Tened の Razi-ul-mulk を推して之に政權を與へたり、多數の Khouloudjes 無に曰くこの民族は元來亞利比亞恒河の川にありて遊牧的生活を營めりと。 とトルコマン人とはトランスオクシアナ并にホラサンより來りて哥疾寧地方に避難し Self-ud-din Agnac の軍旗の下に Ferischnour Mersid ul-ikhla 一に Perschnour 又俗に Perssour とすの Talaur の平原に集と哥疾寧との間に位せる城市なりと即ち今の Pischaver なり。 まれり、新總督は之を攻撃して印度のこの地方を占領せんと、の計畫を立てしが戦利あらずして部下軍隊の大多數と共に殺戮されたり、生前その政治を輔佐せる弟 Qumdet-ul-mulk その死後哥疾寧の實權を握有せり、されど間もなくカプールの總督は來りて之を内城に圍めり、防戦四十日間、その宛かも陥落せると、宰相 Schems-ul-mulk は同府に來着せり、これ支丹只拉兒哀丁がその鐵鎖を破毀して之を哥疾寧に派遣し以て歡迎の準備を行はしめんとせるなり、七日の後支丹は府城の城壁内に入り、茲に於て軍隊は諸方面より争てその大難の下に雲集せり、Enha Melik は部下の土耳其種康里人と共に再び哥疾寧に來りしかば支丹は

その女を娶れり、Agnac Melik は部下の Khouloudjes 并にトルコマン人を從へて Ferschnour より來會せり、カプールの總督と Azam Melik とは部下の Qour 兵を率ゐて來りて麾下に加はれり、以上の軍隊を糾合する時は只拉兒哀丁は優に六萬乃至七萬の騎兵に將たるを得たり、支丹は一二二一年の春この軍を擁して哥疾寧を發程し Bamian 郡に隣接せる Perouan の平野に向て進軍し、更に前進して當時 Valian の城塞を圍める蒙古兵に攻撃を加へんとし、不意にその前衛を襲ひて千人の敵兵を仆せり、攻撃軍は是非なく退却してその分遣せる監視軍に投じ、只拉兒哀丁は輜重を止めたる Perouan に歸れり、その歸れるより一週間のうちに至り失吉忽秃忽 Selhici Cotoncou の指揮せる蒙古軍は同地に來れり、この將軍は三萬の兵を以てカプール并に Zabistan の山脈起伏せる境上に駐營し、只拉兒哀丁の運動を監視し成吉思汗の作戰を掩護するの任務に當れり、その部下の一隊が Valian 城下に於て敗北せりとの報を

支丹 Perouan
に於て蒙古軍
を破る

得るや乃ち只拉兒哀丁に對して進軍せしに、支丹はその近くを見て敢て進んで之と會戦せんとせり。兩軍は *Perouan* の平野に於て互ひに相望見するに至れり。支丹は *Emin Melik* を右翼 *Agac* を左翼となし、命を下して騎兵をして悉く馬を下らしめ各自乘馬の絡頭をその腰に附着せしめたり。右翼は初め一萬の蒙古兵に壓逼せられて苦戦の位地に立ちしも中央軍并に左翼の援を得て陣地を克復し敵兵を撃退するを得たり。反覆突貫を行ひ爲に何れも多大の損害を蒙りしも以て勝敗を決するに至らず。日没に及びて兩軍各々その野營に退却せり。蒙古の將軍は援兵を得たるが如く裝ひて以て花刺子模兵を欺かんとし騎兵をして各々手から毛氈製の人形を馬上に乗せ背後より之を支へしめたり。翌朝支丹部下の將軍は敵兵が二列になりて陣を布けるを見るやこれ援兵の來れるなりと信じ退却の議を唱へしを以てこの詭計は將に成功を告げんとせしが、支丹は斷乎として動かす前日の如く徒歩戦を行ふ可しと令せり。蒙古兵は前日 *Agac* の部隊の勇敢なるを認めしを以て

部下將軍の不
和軍隊多數の
離叛

之に對してその全力を傾注し騎兵の精銳を擧げて左翼に向て突撃せしめしも流矢雨下思はず背進せり。されど再び突撃を試みその新衝突の結果花刺子模兵五百人は戰場に仆れたり。茲に於て支丹は喇叭を吹奏せしめしかば全軍再び馬に跨り呐喊の聲勇ましく蒙古兵に向て突進し且戦列を展開して之を包圍せんとせり。忽禿忽は部下に注意して *Tong* 即ち軍旗の所在を見失はざらしめんとせしが、部下の士卒はその殆んど包圍されんとするを見るや先を争て潰走せり。而してこの平原には凹字形の道路交錯せるを以て乘馬躓きて之に仆れ、かくて駿馬に跨れる支丹部下騎兵の刺殺する所となりしかば忽禿忽の軍隊は爲にその大部分を失へり。

さりながら戦勝も却て只拉兒哀丁に災禍を降すの基となれり。敵兵より獲たる美なる戦利品分配の問題となりしとき *Emin* と *Agac* との間は一頭の駿逸なる亞刺比亞馬を得んとして激烈なる論争を起しその極 *Emin* 鞭を揚げて競争者の頭を毆打するに至れり。されど支丹は之

支丹印度河を
指して退却す

成吉思汗只拉
兒哀丁に向て
進む

に向てこの暴行に對するの賠償を要求せざりき、これ康里人の之を肯んせざる可きを熟知せるを以てなり。Agne 憤懣遣る能はず夜に乘じて部下の Khouloudjes 并にトルコマン人を引率し營を抜きて Ferschnour を指して退却し且 Gour 兵の首領なる Azzan Melik をも説きて離叛せしめたり。支丹は之に向て懇請して歸營せんことを求めしもその効なかりき。かくて麾下の兵の減じて土耳其人と花刺子模人とを剩せるのみとなりしより支丹は再び哥疾寧を指して退却し、更に成吉思汗が部下將軍の戰敗に報いるが爲進軍し來れりとの報を得て印度河 Indus を指して避難せり。仁只拉兒哀丁は戰勝の後書を成吉思汗に寄せて卿夫れ戰場を指定せん、朕之に赴かんと用語せりとあり。

成吉思汗は部下の軍隊敗軍せりとの報に接するや怒色を面に顯はさずして唯忽秃忽は從來勝利にのみ慣れたれば今回の經驗によりて初めて有益なる教訓を得しならんと云へるのみ。蓋その極めて幼年のときより之を養育せるよりこの將軍に對して宛かも實父の如き思ひを爲せるなり。忽秃忽は元來塔塔兒部の出身にして成吉思汗が同部を劫

掠して之を獲しときは未だなほ搖籃のうちにありき、蒙古の君侯はその妻 Bolun が未だ母とならずして數ば小兒を得たしとの希望を示せるより乃ちこの幼兒を之に興へたり。忽秃忽が成吉思汗の寵を得たることを塔兒人の條に參看せよ。忽秃忽はその敗軍の事情を報告するが爲に君侯の許に赴けり。成吉思汗は既に軍隊に命令を下して進軍の準備を整へしめしが、疾驅して哥疾寧に向て前進し二日の間又食物を調理するの餘裕をも有せざりき。往きて Perouan の戰場を過ぎしとき忽秃忽と他の一將軍をして兩軍の陣地を指示せしめたり。乃ちその戰略を非難し戰場選擇の法則を解せざるを譴責しその戰敗に就きて責任を負ふ可きものなるを判定せり。かくて支丹の出奔後十五日にして哥疾寧に到り、同市又一の抵抗を試みざりしを以て Yaludje と呼べる總督を止めて之を治めしめ、急遽只拉兒哀丁を追撃し印度河の河畔に至りて之に追及するを得たり。只拉兒哀丁は麾下より脱走せる諸部族の首領に書を與へて切に求會せんことを求めしも、その之に同意せるときは既に時日を剩さざり

印度河時の戦

き。成吉思汗は敵兵將に翌日を以て大江を越えんとすとのことを偵知し疾驅その夜を以て到着し、Orkhanの指揮せる花刺子模兵の後衛を襲撃して之を破り、戦略その機を失はず江流に接觸し半圓形を劃して布陣せる縦隊の一大團を以て只拉兒哀丁の寡軍を圍むを得たり。天明に及て攻撃の合圖は與へられ、蒙古兵は支丹の軍隊に向て突撃を試みEmin Melikの指揮せる右翼を破りてその殆んど全部を塵殺せしかばEmin MelikはFenschinourを指して敗走し途上に駐屯せる敵軍の爲に殺されたり。左翼の戦運も亦之に異ならざりき。只拉兒哀丁は七百人に將として中堅を守り一條の血路を開かんとして半圓形を劃せる敵兵に向て突撃を試むること前後數回、獅子奮迅の勢を以て戦ひしが、敵兵は蒙古汗の命に従ひて之に向て矢を放つことを爲さず徐々に肉薄し來れり。奮戦正午を過ぎしも未だ敵の戦列を破る能はず、乃ち躍て健馬に跨り最後の突撃を試みしに蒙古兵思はず背進せしかば、忽ち馬首を廻らして胴甲を脱し江流に向て馳せて、乘馬（和名に曰く只拉兒哀丁は一二二六年にこの馬を

支丹印度に退

難さざりしが而も印度河游泳の功と共に二十呎の高崖より跳て之に投じ背を思ひ従之に乗りしことなすと。に楯を負ひ手に旗を握り泳ぎて之を横断せり。これを目撃するや成吉思汗は走て印度河の岸に至り、將士の支丹を追躡して之に投せんとせるものを抑止し、諸皇子を靡きて支丹の武者振を示し須らく之を以て模範となす可しと告げたり。蒙古兵は矢を放ちて支丹に倣ふて、江流に投せる多數の花刺子模兵を殺し、（述には目撃者の談に多數の花刺子模兵江流にその軍隊の殘兵を虐殺せり、支丹の家族も亦捕虜となり、戦勝者はその男子を殺戮せり。保には只拉兒哀丁印度河時に至りしとき母后王妃以下後宮の婦之を溺死せしめたりとあり、されど他にはこの事實を叙するものなく、遂は明に王妃等の捕虜となれるを記せり、又この戦役の月日に就きては邊には七月八月なりとあれど、保には一〇月二二日水曜日一二月九日とありて兩史家の所言一致せず、又戦地の何處なるやに就きては何等の微す可きものあるなし。） 只拉兒哀丁はその所有に屬せる金銀類は悉く之を印度河に投せしかば、蒙古汗は潜水業者をして之を撈らしめその一部分を收むるを得たり。只拉兒哀丁は馬上印度河の江流を横断して戦場の對岸より稍隔りたる東岸に於て上陸せり、當初は單身にして一人の従ふものなかりしが

次第に支丹の如く江流を渡り得たる部下の將士來りて屬せり。この孤弱なる敗殘の兵は勿論何物をも具へざりき。されど花刺子模兵は懸て附近の地方を横行して兵器乘馬被服を獲たり。Djoudj 侯一千の騎兵と五千の歩兵とを率ゐて來りて攻撃を加へしが支丹は騎兵四千人を以て印度兵を潰走せしめ射てその首領を殺し夥しき戦利品を收めたり。宛かもこの際蒙古兵の一隊近けりとの報あり乃ちデーリ Delli に向て退却せり。保邊智に據る印度北部の諸省は初め Ghor 帝國の一部を組成せしがその滅亡の時に際し之を管轄せる土耳其種族の裔奴隸は何れも割據して王侯となれり。這般王侯のうち最も有力なるは Lahaur Mouletan 并に Sind の一部に君臨せる Nassir-ud-din Caradja とチーリ公 Schems-ud-din Ielmisch となり。Mirkhond 第四冊 並に無智參照。

成吉思汗は實に支丹を追躡せしむるが爲に巴刺 Béla 土爾台 Tountai の兩諾延を派遣せり。この兩將は印度河を渡りしも只拉兒哀丁の踪跡を發見する能はずして先づ Bah の城塞を陥れ更に往きて Mouletan を圍

巴刺土爾台の兩將印度河を越えて遠征す

哥疾寧の劫掠

めり。同市の郭外に於て弩砲に用ゐるの石を求め難きを知り江流に委棄されたる船橋を以て之に充てたり。かくて Mouletan の城壁を破るの準備成り將に之を占領せんとせしに偶ま暑氣甚だしく加はり蒙古兵は又之に堪ふる能はざりき。乃ち同市の圍を解き且只拉兒哀丁を追撃して深く印度の内地に進入するを欲せず。Mouletan Lahaur Ferchakour Melik-Poh 諸省の地を劫掠して再び印度河を渡り途を哥疾寧に取りて往きて將にタルタリーに歸らんとせる大軍に加はれり。

巴刺と土爾台とを派遣せる後成吉思汗は印度河の右岸を溯り以て一二二二年の春季に及べり。窩闊台は又父帝の命により往きて哥疾寧を滅却せり。これその後に至りて物資を支丹に供給し得可きを以てなり。この親王は住民の人口を調査すと稱して之を城外に出でしめ。唯技藝に熟達せるものを助命してタルタリーに送れるのみ。その他は悉く之を屠れり。次で蒙古兵はこの二世紀以上有力なる帝國の首府たりし哥疾寧(Ghazna 一に Ghazni)を劫掠して之を化して廢址となせり。據る。

ヘラット、メル
ツ兩市の滅却

之と同時に將軍伊兒知吉歹(按只吉歹) Tchikadar の指揮を奉せる一軍は往きてヘラットの市城を滅却す可しとの命令を受けたり、曩にヘラットの
みは特リホラサン省内にありて兵火の災を免ぬかれしが只拉兒哀丁
が忽禿忽に對して戦勝を博したりとの報に接するや同市は兵を擧げ
て叛せり、初め同市の征服されしときその住民は機會の乘ず可きもの
あらば以て蒙古の桎梏を脱せんと欲して兵器糧食を積聚し、兩總督に
對してはかくの如く戦備に汲々たるは蒙古兵と共に進軍す可しとの
請求來るの日に備ふるが爲なりと託言せり、ヘラットを距る遠からざる
地に Caloun の城塞あり、Badghis 郡に於ける懸崖の頂に位し、後年に至
りて Nerenou の名をもて知らるるものこれなり、その城壁の麓に至ら
んとせば是非共半リーグに亘れる徑路を攀ぢざる可からず、而も狹隘
にして兩人相並んで同時に進む能はず、Rouzat-djennat かくの如く弓矢の
力も將た弩砲の發射する石も亦及ぶ能はざるが故に蒙古兵は二度之
を攻撃せしも遂に之を陥るる能はざりき、Nerenou の城兵は野蠻人の

更に來りて攻撃を試み且ヘラットの義勇兵をして之に向はしめんこと
を恐れ、乃ち同市に對して苦肉の策を施し之をして蒙古兵の殘忍なる
復讐を恐るるの餘り兵を執りて自から保護し以て Nerenou と存亡を
共にするに至らしめんとせり、この謀計に従ひ書を兩總督 Aboubakir
Mingtai の許に寄せて、降服の意を通じ而も蒙古兵の苛刻なるを恐るる
こと深きを以て何は兎もあれ文書もて蒙古の汗より助命す可しとの
約束を獲んことを乞へり、Aboubakir と Mingtai とは遲滞なくその要求に
應ず可しとの旨を保證し不取敢兩地の間に交通を開かんことを提言
せり、これ即ち Nerenou 住民が豫て希望せる所にしてその謀計はかく
て實行せられたり、即ち勇敢の徒七十人をして變装して商人と爲り、そ
の携帶せる行李のうちに兵器を隠匿して出發せしめ、かくて各々別れ
て市城に入り首尾克く兩總督を殺害せしめたり、ヘラットの住民は直ち
に兵を擧げ Aboubakir 并に Mingtai 部下の士卒を悉く虐殺し文武の長官
各々一人を推選せり。

(六一九年五月二日)
一二三二年六月二四日

ヘラット市懲罰の任務を帯びたる將軍伊兒知吉歹は包圍攻撃を開始するに先ち占領地に於て徵發せる民兵約五萬人の來着を俟てり、城市は必死となりて抵抗するの準備を整へ之が領袖輩は相誓て同心協力飽くまで奮闘するの決心を定めたり、蒙古兵の攻撃は烈しく擊退され、血戰幾回となく相次で試みられたり、然るに結局被包圍軍のうちに不和起りその一部は降服を思ふに至れり、伊兒知吉歹乃ちこの軋轢に乗じ包圍を繼續すること六ヶ月十七日にして遂に城市を奪へり、市民は悉く屠殺せられ全一週の間蒙古兵は殺戮劫掠燒却壊滅の作業に忙殺されたり、傳へ云ふヘラットに於て虐殺されしもの百六十萬人を數ふと、伊兒知吉歹は君侯の許に送るにこの不幸なる都市に於て獲たる戰利品のうち最も貴重なるものと數千の年少捕虜とを以てし、その遠征の目的達せるを以て往きて再び大軍に加はれり、間もなく二千人の一隊はヘラットに赴きて住民の虐殺を脱ぬがれて廢址の間に徘徊せるものあらば之を殺戮す可しとの命令に接し約二千人を屠り三日間市街を

搜索せり、十六人の避難者ありヘラット郡内に於ける嶮山の頂に匿れ暫らく同地にありて動かす、蒙古兵の止まるものなきを見るに及びてヘラットに歸りしに街衢にはなほ死屍の狼籍たるものありき、他の避難者も亦來りて之に加はりて四十人の一團體を爲し回教寺院に寄寓せり、

Raouzat-ul-djemmat
参照

メルヅ市は曩にその住民の虐殺されし後再び住民を得しが蒙古兵は再び之を荒廢に歸せり、その市民の移住せるものは故郷を愛するの情に動かされて之に歸り近傍地方の住民の同じく慘死を免ぬかれしものは同市附近の肥沃なるより多く來りて之に定住せり、既にして支丹部下の一將校は多少の兵を引率して同市の城下に來り之を占領して拖雷の同市に置ける波斯人の知事を死に處せり、この事件はメルヅの爲に新に災禍を招くの基と爲り、蒙古兵の一隊五千人は *Nakhsatabad* より來りて悉くその住民を虐殺し市内各區を軍隊に配賦して之が滅却のことに當らしめ、その退却するに當り *Ac-melik* と稱する回教徒に少數

只拉兒哀丁に
叛ける軍隊の
最後

の士卒を添へてメルヅに留め之に命じて再び同市に現はるる者あれば悉く之を殺戮せしめたり。Ac-melik はこの不幸の徒を發見するが爲にあらゆる搜索の方法に訴へ、遂に最後の手段を取りて回教寺院の高塔に於て祈禱施行の旨を廣く傳へしめたり。回教徒はこの役僧 Muezzin の聲を聞くやその避難の場所を出でて信心を盡さんとせしに悉く捕獲せられてその命を失へり。この知事の搜索は四十一日間繼續しその間之が配下のものは捕獲したる不幸の徒に對し前古未曾有の殘忍を加へ、メルヅ市は僅々數人の住民を止むるのみとなれり。メルヅは Famerlan 等の治世までは砂漠たりしが同支丹第十五世紀の初に於て都市を再築して住民を招けり。Djinn, Numa 參看

印度河畔に於て只拉兒哀丁に對して依然として忠誠を失はざるの軍隊を擊攘せる後成吉思汗は之に離叛せるの軍隊を攻撃せり。その有力なる領袖輩は既に悲惨なる最後を遂げたり。Agrac は花刺子模帝王の陣を去りてより Azam と共に先づ之が采邑 Bekerkar に赴むを暫らく同地に淹留せる後 Feschabour を指して出發せり。出發の後直ちに部下

將校の一人を Azam の許に遣し豫てより甚く Agrac と相敵視せる Khouloudjes 五六千戸の長 Noh-Djandar をその領内に滞在せしめざらんことを請求せり。Azam は刻下の境遇にありては回教徒の互ひに反目すること最も然る可からずと答へ、五十人の護衛を從へて Agrac の許に至りその怒を宥むる所あらんとせしが堅くその主張を執て可かざりき。かくて宴を開きて互ひに酒杯を舉げしに Agrac は酔ふて益精神の平衡を失ひ馬に跨り騎兵百人を率ゐて親から Khouloudjes の營に赴けり。Noh は之を以て和解の爲に來れるものなりと信じその子と共に出でて之を迎へたり。Agrac はその仇敵を見るや怒氣益激して劍を抜きて之を斬らんとせしに忽ちにして Noh の麾下の士の寸斷する所となれり。Agrac の軍隊は主將變死の報に接するやこれ全く Noh と Azam とが企てたる陰謀の犠牲となりしものなる可しと信じ先づ Azam を殺戮し次で Noh の兵營に突撃を試みその子を併せて之を虐殺せり。Gour 兵の多數は更に他の戰團に於て仆れ、最後にこの Khoul-

一二三三六年
月

按郎長年四遊
記云。千午八
月二十七日從
車駕北回。九

oudjes トルコマン人并に Gou 人より成れる軍隊の殘兵は蒙古騎兵と
波斯歩兵とを以て組織せる軍隊の追撃を受け僅々たる時日の間に支
離滅裂の状態に陥れり。據るに
哥疾寧掠奪のち窩瀾台は急使を父の許に馳せて Ustun 市攻撃の命
を下さんことを乞へり。成吉思汗は炎熱酷烈なりしを以て之に歸營す
可きを令し、夏季の合營を蒙古人の Berouan と呼べる平原に定め、傍近の
地方を悉く劫掠せり。據るに成吉思汗が始めてその占領せる都城に文官
たる知事即ち達魯花赤 Darougas を配置せるは當時のことなり。據るに成
吉思汗は巴剌土爾台兩諾延の來り會するを待ち、その來着するに及び
て進軍を開始し Gounaouh-Coungan 城の附近に於て窩瀾台の來會するに
遭へり。冬季の合營は之を印度河の河源に近き山間の Bouya-Keven 郡に
定めしが同地にあるや惡症の傳染病大にその軍隊を惱ましたり。
一二三三年春この疫病の病勢衰ふるや成吉思汗は途を印度西藏 Indes
に取りて蒙古に歸らんと決心せり。通鑑綱目に據るに成吉思汗印度にありし
とき鐵門關の附近に於てその侍衛處に似

月朔渡河橋而
北。九月抄已
至邪米思干。
壬午爲太祖十
七年(一二二
二年)。是此年
即凱旋矣。
……而二十
年(一二二五
年)正月遣宮
則拉施特與他
書所紀年分相
同。
以四遊記與拉
施特所言爲本。
庶爲得實。(元
史譯文證補)

バルクの滅却

癩等の主動物の尾は馬の如く毛色緑に頭に一角を具へ人言を能くするものに會ひ、その
時現出するもの動物は角端(Gou)と稱し萬國の語に通じり、狼りに流血の慘狀を呈する
せるなり、乞ふ天意に従ひてこの王國の民を助けよ、之を寛假せば無限の幸福を享受す
るならんと奉答せり。成吉思汗乃ち師を班すとあり、波呂委香、曾には西夏叛けるより之
を伐たんが爲に東歸すとあり、その蒙古に歸る後約一年にして西夏を伐、出發に先
ち帳幕毎に十人乃至二十人を數へたる夥しき捕虜に命じて兵士の食
糧に供するが爲に多量の糶を玄米と爲さしめたり。一週間にしてこの
作業終るや一夜にして悉く捕虜を屠れり。軍隊は途を西藏に取りしが
數日の後に至り元への命令に接せり。峻嶺屹立し密林繁茂せる廣漠た
る地方を横斷するの困難多大なる可きことは明瞭となれり。成吉思汗
は波斯街道に由らんとしして踵を Peshavou に返せり。
成吉思汗は Balka の山脈を超えたる後夏季の合營を Pagan 郡に定め
たり、これその大行李を留めたるの地なり。秋季の近くに及びて進軍を
繼續しバルク附近を通過するや再び歸りてこの市城に住へるものを
悉く殺したり。この省内に於て虐殺を免ぬかれたる人々は一年間犬猫

の肉を以てその糧食に供するの窮境に陥れり。蓋、蒙古兵は家畜の肉と乳とを以て常食と爲すが故に、仁に體輕兵の獸肉をのみ食用に供せることを能せり。單に之が牧場を必要となすのみ、敵地に於ける穀類は悉く之を廢物たらしむるが故に幸にしてその殺戮を免ぬかれたるものは野蠻人の退却後飢餓の極死に濱するを以てその常となせり。成吉思汗は再びアム河を渡れり。遊參その蒲花羅にあるや Sadr-Djihan に命じて回教の教理を熟知せる者を進見せしめたり。乃ち Eschmet と稱する法官と一人の説教師とをして之に應せしめしに、成吉思汗はこの兩博士をして回教の主要なる教義教條を説明せしめて、メッカに參詣するの一條を除く外すべて之を賞讃し、全世界は即ち上帝の家なり、何れの處に於て祈禱するも等しく上帝に達せずんばあらずと云へり。撒馬爾罕に着するや市内の名望家は出でて之を迎へたり。成吉思汗は上帝朕をして謨罕默德に對して戰勝を博せしめられたれば、朕の爲に公けの祈禱を執行せよとの命を下せり。法官と式僧とは請願して從來納付し來れる課税を免除さるることとなれり。

其に據る。蒙古汗は同市より急使を朮赤の許に派しその諸子と共に來會せしめんとせり。花刺子模占領後この親王は察合台との確執に就きて憤懣に堪へずシル河河北の地方に赴きて狩獵に耽りてその日を過せり。父帝は之に會合の地點を告げて言はしむらくこの廣漠たる平原の禽獸を驅りて來會せよと。成吉思汗は一二三三冬季の間全く撒馬爾罕地方に淹留し、一陽來復して再び進軍を繼續するや、軍隊の進行中支丹謨罕默德の母后寡婦親族をして道の傍に佇立し高聲を放ち且悲鳴を揚げて以て花刺子模帝國に對し訣別せしむ可しとの命令を下せり。シル河河畔に至るや曩に蒲花羅の附近に留りて狩獵に従事し冬季中毎週五十荷の獲物を父帝の許に致せる皇子察合台窩淵台來會せり。成吉思汗は一二二四年の夏季を通じて Colan-Taschi 郡に滯留せり。朮赤は父帝の許に來らざりしが、その命によりて夥多しき野獸殊に野馬の群は驅り立てられて成吉思汗の狩獵の快樂に耽れる。Calan-Taschi の近郊に集まれり。成吉思汗を始として將士皆爭て喜んでこの動物を射し

成吉思汗蒙古に降る

が野獸は何れも長途の逃走に疲れしを以て手から之を捕獲するを得たり。將士皆これに飽きしとき野馬の残れるものを助けしが、之を捕獲せるものは各々その毛に特種の記號を施して之を野に縱てり。成吉思汗は一二二四年の夏季と冬季とを途上に經過せり。後年有名な治世を遺したる忽必烈 *Cubilai* 旭烈兀 *Hulagu* の兩皇孫は來りて乃蠻部と畏兀兒部との舊境に近く葉密爾河 *Yemi* の邊に於て之を迎へたり。忽必烈は時に十一歳にして途上一兎を殺し、旭烈兀は時に九歳にして一鹿を獲たり。而して少年の始めて狩獵に赴くや肉と脂とを以てその手の中指を摩すること蒙古人の間に於ける慣習なりしかば成吉思汗は親から兩皇孫の爲にこのことに當れり。その後布喀蘇起庫 *Bouca Soukhou* と稱する地に於て軍隊の爲に饗宴を催し一二二五年の二月その幹魯朶に達せり。達智に據る。成吉思汗は次で唐古特征伐の準備を爲せり。されどこの最後の經路に就きて成吉思汗の事蹟を述ぶるに先ち、彼の歐羅巴の領土内に在て蒙

蒙古の兩將哲別、速不台遠征の續

Trac-Adjem 省
Azerbaïdjan
會地に *Arran*
省の蹂躪

古兵の威名を輝かせる後途上に來會せる哲別速不台兩將の劫掠的進軍に就て叙する所あらん。

第八章

支丹謨罕默徳の殞落後之が追撃の任務を帯びたる哲別速不台の兩將は *Trac-Adjem* 省蹂躪の業を完うせり。既に *Razi* 市は野蠻人によりて劫掠され *Coun* 市も亦同一の運命に遭遇せり。其には將軍哲別 *Coun* に返りしと既きて同市の住民は *ralesis* 即ちアリ派なればとて悉く之を屠らしめたりとあり。そのハマダンに近くや同市の市長は夥しき進物を携へて出でて之を迎へ降服を約せしを以て、乃ち之に守將を置けり。 *Zendjan* を滅却せる後強襲を以て *Cazvin* を陥れしに住民は手に短劍を握りて街衢に於て防禦を試み多數の蒙古兵を殺害せしも、而もその頑固なる抵抗も以て大虐殺を脱ぬかる能はず四萬人以上の住民は之に死せり。

兩將は沿道到る處人を殺し家を焼きて Azerbaijan 省の首府 Tebriz に向て前進せり。同省と Kour 河を隔てて之に界せる Arvan 省とは當時 Euzbeg と呼べる土耳其種一君侯の有に歸せり、その父は Djihan Pehlavan と稱しその祖父 Hdeguz は初め欽察地方より奴隸として波斯に輸送され Ino-Adjem のセルヂック朝支丹に轉賣されたり、釋放されたる後次第に昇進して大官となりかくて Hdeguz は一一四六年に食邑として Azerba-idjan Arvan 兩省の地を得たり。四十八年の後に至り Tac のセルヂック王朝滅亡するや Hdeguz 家はこの兩省の領有權を保ち一一九七年以來 Euzbeg は之に君臨せり、但し稱號は父祖兩代の如く Atuley 即ち父 Bey と云ひてセルヂック朝支丹が當初總督の資格を以て皇子の許に配置せるの官吏に與へたる舊稱を以て満足せり。

蒙古兵の Tebriz に近きしとき Euzbeg は高齢なるが上飲酒に耽りしを以て又領土防禦の爲に兵器を執つて立つを思はず、財寶の一部分を犠牲に供して危険の切逼し來れる暴風雨を避けんとし、金錢服地馬匹家

畜等を夥しく貢賦として納め以て平和を購へり。

蒙古兵の兩部隊は茲に於て Azerbaijan より撤退して裏海の海岸に赴むき氣候の緩和にして牧草の繁茂せる Mogan の平野に冬營を定めたり、何となれば冬季の寒威凜烈にして積雪深く時に道路の梗塞すること珍らしからざればなり、時に蒙古兵は突然グルジアに侵略を試みグルジア兵一萬人の軍隊を破りてその大半を殲滅せり。

氣候の險惡なるの間蒙古兵 Mogan 地方に滞在す可しとは世人の豫期する所なりき、グルジアの大使は出でて Azerbaijan 侯并にメソポタミア王を説き同盟を組織して以て春季を俟ちて蒙古兵を攻撃せんとせしが、この野蠻人は玄冬に際して再びその作戰に着手してグルジアに入り、その軍隊は多數のトルコマン人并にクルド人の應援を得たるが、この地方に住居せる這般の民族は數、基督教徒より多大の逼害を受くるを以て蒙古將軍の之と戦はんとするや争てその旗下に集まれり、況んやその富裕なる地方を劫掠して多大の戦利品を獲るの望あるに於

グルジア人に對する勝利

(六十七年一二月)
一二三二年二月

てをや。この援兵は *Acousch* と呼べる *Euzbeg* の武將 (*inamelouck*) 之を指揮し、*グルジア* 侵略に際し蒙古軍の前衛となれり。*グルジア* 軍は *チフリ* ス、*巨港* にありて敵兵の来るを待ちしが蒙古兵は之を距ること遠からざるの地に至るまで悉く放火虐殺を行ひたり。 *Acousch* の部隊先づ戦闘を開始せしが頑強なる抵抗に遭遇しこの援兵は多数の生命を失へり、蒙古兵は *グルジア* 兵のこの最初の攻撃を受けて兵力減少し且疲勞せるを見るや之に對して突撃を試みて之を潰敗せしめその軍隊の大半を虐殺せり。 仁は韃靼兵の行軍神速なる支那の附近を出發してより一年ならずしては之を信する能はざらん譯言者の生誕以來未だ今日の如く回教徒に取りて不幸の甚しきはあらず一方に於ては韃靼兵は *Armenia*、*Horasan*、*Iraq*、*Asser*、*Paigyan* を蹂躪し他の一方に於ては *Frank* 人羅馬帝國の彼方に當り西北に位せる地方より來りて埃及に入り *Damiscus* を占領す云々とあり。

春に至りて蒙古兵は *グルジア* より撤退して *Tebiz* にその鋒を轉じ之をして再び莫大の貢賦を納れて掠奪を脱ぬがれしめ往きて *Menga* に通りて之を圍めり。同市の領主は一女侯にして當時 *Roulier* 城に在住せり蒙古兵は例の如く回教徒の捕虜となれるものに逼て強襲以て之が

(二月四日)
三月三〇日

攻撃に當らしめ、その背進せるものは之を虐殺せり。多參かくて數日の後 *Menga* を占領してその住民を屠り携帶し難きものは悉く之を燒却せり。虐殺を脱ぬかれたるものをしてその避難地より出で來らしめんとし捕虜に命じて大叫して韃靼兵退却すとの旨を觸れしめ、かくて極めて多数の民を殺戮するを得たり。 仁に一人の韃靼婦人ありさる家屋に入りなししに縛てその甲冑を脱するを見て婦人なるを知り回教徒の捕虜となれるもの之を殺したりと云ひ又一人の韃靼兵さる街衢に於て百人以上の住民に會ひその抵抗せざるを見て悉く之を屠れりと云ふとあり。

野蠻人等は *Menga* より *Tebiz* に向て進みしがこの山間地方に進入せんとせば隘路を通過せざる可からず而もこの隘路は二騎の相並んで行進するを許さず爲にその方向を變じて *Isa Arab* に向てその馬首を轉せり。 *ハリフ*、*那昔爾* はその領土の危険に逼るを見るや直ちに *Tebiz* 侯 *Nozafar-ud-din*、*Moussoul* 侯 *Bedr-ud-din*、*メンボタミア* 侯 *Melik Eschnef* に對して出兵を促せり。 *Tebiz*、*Moussoul* の兩侯はこれに従ひ *Daconca* に向けて各々領内の民兵を進發せしめしに多数の義勇兵は來りて之に加はれり。

然るに Tschet は十字軍 Danielle を略取せるよりダマスク侯なる同胞 Monzain 來りて強て之に對して同胞なる Kamin を援助せんことを請求せりと唱へて前記兩侯の如くする能はざるを謝しかくて直ちに埃及防禦の途に上れり。

同侯は自から軍に將として出陣し Daouca に於てハリフの派遣せる八百人の來會するに遭ひ且間もなく更に大軍を供給す可しとの約束と往きて韃靼兵を攻撃せよとの命令に接せり。侯は乃ち人をハリフの許に派して曰はしむらくかかる少數の士卒にては進んで敵兵に向ふ能はず、而も法皇若し臣をして一萬の騎兵に將たらしめば、波斯の地又一人の野蠻人をも止めざらしむ可きを信すと。この證言をなししに係はらず、毫も援兵の増派を得ず、而も亦攻撃をも受けざりき。蒙古兵はその Daouca に於て軍隊を集注せんとするを知りて敢てこの方面に向て進軍せず、而して同地に駐屯せる回教徒の軍隊は更に援兵の來らんとするの模様なくその兵力孤弱にして進んで敵兵に當るに足らざるを

以て解隊するに決せり。

この小軍は解散し而して蒙古兵はハマダンに前進し牙營を城市の視界に建て、命を同市に駐在せしめたる司令官に下して金銀布匹の貢賦を徴收せしめたり。ハマダンは既に前年を以て劫掠を脱ぬがるが爲に賦課されたる重税を納付せるを以て、住民中の有力者は蒙古兵と協商を結ぶの際談判の時に當りたる市長の許に至り、この新なる徴收に對して抗議を試みて、彼の外道等には既に財産を擧げて悉く之を交付し且又司令官の爲に屈辱を受け之を忍ばざる可からざるが故に最早這般野蠻人に與ふ可きものは一物もあるなしと云へり。市長は之に答へて曰く「我等は殊に無力なるものを抑も如何せんとする、今日の策は唯我等の財産を犠牲に供するあるのみ」と。市民の有力者は乃ち市長の異端の徒に對するよりも却て市民に對して苛酷なるを非難しその他種々の惡口雜言を列ねたり。市長は有力者等のかくの如く激昂せるを見て遂にその希望を擧げて敢て悉く之を實行せんとの旨を語れり。か

くて蒙古人の司令官を市外に驅逐し防備の處置に出づ可しとのことを決定せり。市民はこの決議の成るを知るや司令官を襲ひて之を殺戮せり。

この輕率なる行動は單にハマダンの不幸を激成せるのみ蒙古兵は之に包圍攻撃を加へたり。市民は首領として *Fakhri* 即ち明法之頭を戴き開戦の初二日間開城突撃を試みて奮闘し蒙古兵は爲に著るしき損害を蒙りしが、第三日に至りこの高僧親から馬に跨ること能はざりしを以て市民は往きて *Resay* 即ち市長を求め衆に將として敵兵に向て進軍せんことを乞はんとせしに、市長は地下の隧道によりてその家族と共に避けて出奔せり。市民は市長の脱走を知りて大に狼狽し死を決して防禦するの初一念は變せざりしも開城突撃の策は之を放棄せり。蒙古兵は多數の人命を損せしを以て將に退却せんとせしが、偶ま開城突撃の中止せるより、これ被包圍軍の意氣沮喪せる爲なりと認め、強襲を試みて城内に闖入せり。住民は短劍を手に握りて巷戦を試みしも遂に敵

(六)一八年九
月
一三二年一
〇月

する能はずして虐殺されたり。殺戮は數日間繼續し生命を全うせるものは地下に隠匿し得たるものあるのみ。市街は戦勝者によりて焼夷されたり。

蒙古兵は北方に歸りて往きて *Erdebi* を攻撃して之を占領して劫掠せり。次で蒙古兵は三度 *Tebriz* 城に逼れり。その進軍の報に接するや *Fuzdes* は *Nakhchouvan* に避難せしも *Tebriz* 守備のことを委任されたる將校は巧みに市民の勇氣を鼓舞し且防禦の手段至らざる處なかりしかば、その事情を偵知したる蒙古兵は新に金銀布匹の貢賦を要求せるに過ぎざりき。而して之を受くるや轉じて *Serdub* 市の攻撃に向ひて悉くこの住民を殺し、次で *Artaan* 省内に位せる *Bailecan* をも亦その狂暴の犠牲に供せり。初め同市民の要求ありて蒙古人の一將校は之と協商を締結するが爲に同市に派遣されしに、市民之を殺害せしを以て蒙古兵乃ち城市を攻撃せり。近郊の地に石なきを以て大楓樹を伐採して挽きて小片となし弩砲を以て之を投射せり。かくて城市を襲攻し殘

グレンジヤに

Schivanの劫

掠

忍極めざるなく悉く之が住民を屠れり。婦人は之を強姦せる後虐殺し
 妊娠せるものの腹部を割きその胎児の生命を奪へり。Balcanの傍近
 を蹂躪せる後この野蠻人は Arnan 省の首府 Gandia に近づきしもその
 市民が絶えずグルジア人と干戈を交へ随て極めて勇敢なるを知りし
 を以て敢てこの城市を攻撃せんとせず、金銀布匹の納付を逼りて之を
 獲るや進軍を繼續して再びグルジアに入れり。
 グルジアの軍隊は王國の防禦に付きて準備する所あり、哲別は五千人
 を率ゐて埋伏しかくして速不台敵兵に向て進みその最初の突撃に遭ひ
 て背進し之をして勢に乗じて追撃して以て伏に陥らしめたり、爲に三
 萬人強のこのグルジア軍は大半覆没せり、曩にグルジア王 George Iascha
 の歿せしより以來その同胞にして有名なる女王 Ehamar の女なる女王
 Rhouzoultan 王位にあり、元帥 Ivane 王國陸兵の指揮に當れり、倉皇新に
 軍隊を召集して蒙古兵の王國の中心に向て進軍するを阻止せんと試
 みしが、この軍隊は野蠻人の勇猛なるを聞きて恐怖措く能はず敢てそ

の來るを待たずしてチフリリスに歸りグルジアの南部をその劫掠に委
 棄せり。Ibn-ul-Ebirは當時 Mousoul にありしが、使節としてグルジアより Mousoul 侯の許
 を思はずこの野蠻人は決して敗走せず降参せず一日一人の驍騎人を捕へしに馬上より
 リ巨岩に向て身を跳らしてその頭を碎きて死せり。Ravindas の Annales Ecclesiastiques
 二二四年の條に法皇 Honoré に寄せたる女王 Rhouzoultan の書と元帥 Ivane
 即ちヨハンンの書とあり、これに據るに驍騎人は十字架を先頭に立ててグルジアに來り
 しを以て人民はこれを基督教徒なりとし敢て抵抗を試みたりしよりこの策略に欺か
 れて約六千人のグルジア人を殺戮するを致せり、茲に於てグルジア人は兵を起して
 の野蠻人二萬五千人を殺しその多數を捕虜とし殘兵
 を國外に驅逐せりとあり、この文書は信じ難きが如し。
 さりながら蒙古兵はこの險多き地方に於て交戦することを恐れ、鹵
 獲品を携へて之を棄てて Schivan の劫掠に向ひ同地方の首府なる Schia-
 hakti を攻撃して之を襲取し之を奪掠せり、次に Derbend 城市をも亦等
 しく陥れしが而も Schivan 王 Raschid の避難せる内堡は之を下すこと
 能はざりき、蒙古兵はカウカソス山脈を横斷して北方に赴かんと欲せ
 しを以てこの峻嶺を超ゆるに際し恃むに足る可きの嚮導を獲るに苦
 心せり、傳へ云ふ、蒙古兵は之を獲んとして先づ Raschid 王に向て協商を
 締結するの權限を有せる使節を派遣し來らんことを促し、王の許より

同國內に於ける一流の人物十人の來着せるに及びその一人を殺し他の九人に對して若しカウカンス山を超えて無事に軍隊を嚮導するの任務を盡さずんば同じく殺戮す可しとて之を脅逼せりと。

この山脈通過に際し蒙古兵は *Alans* 一に *Asea* *Lezgius* *Circusses* 并に欽察人 *Khitans* の相連衡して之と戦はんとするに遭遇せり。兩軍接戦せしも勝敗決せずして交綏せり。茲に於て蒙古兵は勝利を博するの手段として例の如く作謀奸計を用ゐたり。乃ち欽察人に向て言はしむらく「我等は卿等と等しく土耳其種に屬す、卿等は異種族と手を携へて同胞に對して戦はんとするか、乞ふ和を媾せん、我等は卿等が欲するが儘に多額の黄金と美服とを贈らん」と。この辯説とその眼を炫耀せしめたる音物とに誘惑せられて欽察人はその同盟諸民族を棄てしかば諸民族は攻撃を受けて潰走せり。その住居せる地方と *Khazars* 市とは野蠻人の狂暴なる劫掠に遭遇せり。この間欽察人の軍隊は解散して三々伍々その郷里に歸れり。蒙古兵は之を追踪してこの個々分離せる部隊を襲ひて欽

Alans並にLezgiusの敗北

欽察人の領土を侵略す

察人の多數を殺戮し且その離叛の報酬として曩に贈與せる財貨を克復せり。仁に據る。

欽察人は土耳其種の遊牧民族にして約三世紀以來先に *Khazars* に屬したる地方を占有せり。その領土は廣漠たる平原より組成され黒海カウカンス山脈裏海の北方に連亘し多瑙江口より *Tanais* 河口に及べり。之に接壤せる國家と民族とを西より東に向て數ふればビザンチオン帝國、*Hungaria* 人、*Slavians* 人、*Polians* 并に康里人等なり。露西亞人はこれを *Polians* と稱せり。これ平原の民てふ義なり。*Hungaria* 人并に羅馬人はこれを *Comans* と稱せり。此の名稱の今日 *Comans* と呼べる河流に基きしは *Comanus* 疑ふ可からず。土耳其語の方言には *m* と *b* とを混同せしむるべし。 *Comans* は今日なほ黒海の北アンソフ海 *Pulus-Neoides* の東に位せる欽察人故國の一部なる *Coman* 地方にありて住す。 欽察部族十一氏の稱呼は彼の埃及支丹 *Nasir* の治世に際し回教紀元七二五年即ち基督紀元一三二五年を以て死せる埃及人にして *Devadar* 即ち大法官たりし *Emir* *Belinus* *Tekin* *id-din* の撰述に保る。亞刺比亞文回教王朝史の著者 *Zohar* *al-Hikem*、*Tarikh* *al-Hind* のうちあり。之と同時な同うせる史家 *Norani* の書には之を抄出せり。當時埃及マムルック兵の多數は奴隸として同地方に赴ける欽察人を以て組織されたり。十一氏の名稱は *Toksalu*、*Yekia*、*Bonari*、*Ogli*、*Bilberit*、*Comgour*、*Ogli*、*Antilogli*、*Donroui*、*Felma*、*Ogli*、*Hicennu*、*Carahemerkli*、*Keuen*、*ノレナリ*、*土耳其*

其語にて *Orin* は千孫の義
Orin-Jenkis は黒朝の義なり。

蒙古兵の意外にも入寇せりとの報に接するや欽察人は各方面よりその領土の極處を指して退却し肥沃なる牧地を擧げて敵軍に委棄せしかば蒙古兵は乃ち同地方の中心に於て冬季の牙營を建てたり。欽察人一萬戸は多瑙河を渡りて羅馬帝國の領土に入りしを以つて皇帝 *Jean Ducas* は之をその麾下に屬せり。この亡命者の一部はトラキア并にマケドニアに合營して大に同地方を殘害せり。他の一部は小亞細亞に移されたり。 *Scriber* の *Memorie Pontorum*, *olim a Danubium*, *Pontum*, *Fuxim*, etc., *incolentium*, *Acropolis* 参看。 *Georg*。 欽察人の多數は又露國の領土に避難しその常に劫掠を行ひて之に禍患を蒙らしめたるの國民に向て援助を請求せり。露國の疆域は當時東方にありてはヴォルガ江の支流オカ河岸に達せるに過ぎざりき。國內幾多の小邦に分割され之れが君侯は何れも *Varege* 即ち *Rosse* なるルーリク *Rurik* の後裔にしてルーリクは第九世紀に於てドニエプル河の東方并に北方に定住し後に混じて露人と云へる總稱の下

に包括さるるスラヴ種の各民族をその配下に統一したり。ルーリクの後嗣は何れもこの王國をその諸子に分配せしが、應てこの小侯國の内より大侯の爵號を稱する一君長を出せり。數世紀間 *キエフ* はこの君長の首府たりしも一一六九年以來大侯はウラヂミールに住せり。但しその配下の諸侯は之が政權に服従せんとせず、絶えず干戈に訴へて互ひに他の領土を蠶食するに汲々たりき。故にこの内訌に乗じて *ホンガリア* 人波蘭人 *リトワニア* 人 *リヂニア* 人芬蘭人は西方并に北方に於て露國の國境を攻撃し、而して最も怖る可き敵人たる欽察人は數、南部露西亞に入寇を試みて蹂躪劫掠至らざるなく數千の捕虜をその曠野に移せり。家族と家畜とを擧げて *キエフ* の侯國に避難せる欽察人亡命者のうちに *Contan* と呼べるその汗の一人あり。汗の女は *Galich* 侯 *Mestlav* の許に嫁せり。 *Contan* はその女婿に贈るに多數の駱駝馬、水牛并に奴隸の良好なるものを以てして援助を求め、來りて欽察人の領土を侵略せる體

鞏人は露人に對するの攻撃を躊躇するものにあらざるとの旨を辯明せり。Mesistaw は南部露西亞の諸侯をキエフに召集し、この會議に於て欽察人と進退を共にし相提携して以て鞏人に當る可しと決議し、使節を *Bozdat* に派して大侯 *George* の助力を乞ひ、かくて諸侯は至急に軍隊を徵集するが爲離散せり。

露西亞人に對する戰勝

キエフの *Mesistaw*、*スモレンスク* の *Vladimir* の兩公 *Kniesz* 并に多數の小諸侯は敵兵と會戦せんが爲前進せり。ドニエプル河畔に至りしとき蒙古軍の兩將が欽察人との同盟を絶たしめんとして派遣せる使者の來るに遭へり、來意に曰く蒙古人は毫も露人に對して惡意を有せず、唯その隣人たらんことを欲するのみ、露人たるもの須らくこの好機に乗じて彼の強賊と擇ぶなき民族の劫掠に對して復讐せざる可からず、その方法は單に蒙古人と同盟して之に當るにあるのみ、かくてその掠奪に歸したるものは之を蒙古人と分配するを得ん、特に宗教の上より見るに露人たるものは偶像信者たる欽察人との同盟を棄てて一神を崇

一二三三年五月三十一日

敬する蒙古人との同盟を執らざる可からずと、露國の諸侯はこの奸猾なる提議を容れざるのみか却て之を齎らせる十名の使節を殺戮してドニエプル河を渡れり、敵の前進哨の司令官は對岸に於て捕虜となり欽察人に交付されて之が爲に殺害されたり、露西亞軍はドン河の附近を流るるカルカ *Kalka* 河に向て進軍し、蒙古兵が之を誘ひてその本國を遠からしめんとし徐ろに退却せるよりその足跡を追ふて軍を行り、抵抗を受けずしてカルカ河を渡れり、然るにその全くカルカ河を渡るや蒙古兵は之と會戦するの準備を整へたり、*Galisch* 侯は親から必勝を確信じキエフ、*Tchernigow* 兩侯と共にこの戰勝の名譽を分つを欲せず、豫め之に告げずして戰端を啓けり、然るにその軍隊と之に援助を與へたる欽察兵とは痛く敗北して潰走せり、*Galisch* 侯は辛うじて身を以て免れ且我が安固を圖るが爲に士卒の生命を犠牲に供しカルカ河畔の船舶を燒却せしめしを以て、露軍のうち退却し得たるものは十分の一に達せず、之を指揮せる六人の諸侯は戰死せり、加之、欽察人の殘忍なる

敗走兵の乗馬を奪はんが爲に之を殺戮せるを以て露軍の不幸は益、その大を加へたり。

キエフ侯は河畔に近き丘上にその本營を据ゑ、營中に潜みてこの敗軍を目撃し、復郭修築の工程を開始せしが、蒙古軍はこの防禦の準備を完了するの光陰を之に與へず、その軍隊の一部は露軍の殘兵を追撃せしが之と同時に他の一部は來りて之を攻撃せり。勇敢に防戦すること三晝夜の後蒙古軍の新部隊の來るを見るや又降服の外何事をも思はず、乃ち單に兩君侯并にその女婿を始として將士の生命を助け賠償を得て之に自由を與ふる事を約束せんことをのみ要求せり。蒙古の將軍は誓約を以てこれらの條件を承認せしも露人の降服するや悉く之を屠れり。三人の貴族は極めて残忍なる方法を以て殺されたり、即ち之を横臥せしめたる上に板を列ね而して蒙古兵は之に坐して宴を開き以てその戰勝を祝せり。

かくてこの野蠻人は露西亞に入りしが毫も抵抗に遭遇せざりし、Gal-

南部露西亞の経緯

Cheroneas
Taurique 即ち
クリムに入寇す
アルガル人に
對する戰勝

侯はその侯國に歸り、ツラヂミイルの大侯 George が南部露西亞諸侯の請求に應じて之に派遣せる軍隊は途にしてその敗報に接して踵を返せり。蒙古兵の近くを見るや Sviatopol の Novogorod の住民は防禦を試むることなく手に十字架を携へて出でて之を迎へ以てその哀憐を乞ひしも悉く虐殺されたり、その數一萬人に上れり。蒙古兵は南部露西亞を火炎と鮮血との修羅場と化せり。ドニエプル河畔より更に進んでアゾフ海沿岸の地方を蹂躪しクリムに寇し繁榮なる Soudae 市を略取せり。同市はジエノフ人の有に屬せしが貢賦を欽察人に納付し、當時黒海の北岸南岸に位せる諸國の間に於ける通商市場の中心たりし Michel Batoff, Isioria Rossisaya (露國史) 一七七年出版並に Kanunin, Isioria Gossouhstrva Rossicogo (露帝國史) 一八一六年出版を參照せよ。

この西方諸國を去るに當り蒙古兵は一二二三年(六二〇年)の終に於てブルガル人の領土に入寇を試みたり。この農業民族は思ふにその起源に於てはスラヴ種に屬するものなる可く、或は回教を信するあり或は基督教を奉するあり。當時上ヴォルガ江并にカマ河の灌漑せる地方に住

この蒙古軍は
カウカソス山に降
る

しその水路によりて之に隣せる露西亞人并に裏海沿岸諸國と通商を
營むの便宜を得たり。カラムツン露又欽察人の領土を経て波斯并に花刺
子模に北方の産物就中毛皮、蠶蠟、蜂蜜を輸入せり。Im-HaoueiのMeslik al-Me-
roujuz-Zahab入寇の威嚇を受くるやブルガル人は争て武器を握り進ん
で敵兵と會戦せしも伏に陥りしが爲蒙古兵は之を包圍してその大多
數を殺戮せり。成吉思汗の兩將はこの戰勝を以てその長途の遠征の大
切となして途を Sacassin 地方 地理學者曰 Haouei 俄 Tokhis-ul-Assar ve Aqjart al-Melik-
Caucasin は Kluzares 領土の大都にして、同地は寒氣凛烈なり、住民は多く回教信者なり、屋
背は覆ふに樅材を以てす、此地方にはチケリス河より大なる巨流あり各種の魚族繁
殖す、その一種は脂肪に富み之を以て燈火の用に供す肉は廉價なり、この河は冬季氷結
してその上を歩行す可し、その幅千四十歩あり、Haoueiは當今は水中に没したり、その遺
址に近く同地方の帝王の首府たる Baranの Qeriz 立つ云と見ゆ、Sacassinの名稱は人をして
ルト河の南方に住ひ、數々南方諸國に入寇し、Al-Melikは是より十三世紀以前裏海の東方ヤクサ
とを奪ひつゝアルメニアに Kacassine と云へる名稱を與へたり。(Strahan 參看)

に取りて往きて宛かも波斯よりタルタリーに歸國中の君王の軍に加
はれり。仁に據る。編末の註第七を參看せよ。述には哲別速不台の遠征を叙せるの章に
於てカウカソス山以北のことを説つす而してなほその精銳無双なるを許せり。
以下暫らく蹂躪されたる波斯の記事に叙及せざるを以て茲に Imc-Ad

Imc-Adjem
に於ける蒙古
兵の新劫掠

jen の荒廢に歸することとなりたる次第に就きて一言せざるを得ず。
Cazvin 城内に本營を建てし支丹謨罕默德父子が蒙古兵 Rayi を劫掠せ
りとの報に接して突然出奔せしとき Imc を食封とせる皇子屋背哀丁
は Kerman に走れり。その軍旗の下に馳せ來りし同省の總督 Nouzen の軍
隊を得て兵勢大に振ひ、Kerman の首府に入り總督の寶庫を奪ひて之を
士卒に分配せり。Kerman に滞在すること七ヶ月にして Imc に歸り同地
方を横領せんとせる蒙族 Djimal-ud-din Mohammed を攻撃せんとせしに偶
まその本營を置ける Rayi 附近にありて Taimass 并に Tantal 兩將指揮の下
に蒙古軍の一枝隊近けりとの報を得たり。屋背哀丁は馳せて Sontoun-
Avend の城塞に籠れり。城は Rayi を距ること遠からざる斷崖絶壁の上
に位し難攻不抜の評あり。蒙古兵はこの城塞を圍み六ヶ月の末に至り
て雲梯を攀ちて之を陥れたり。屋背哀丁は膝を屈して以て蒙古の汗に
忠誠を表するを拒み家族と共に悉く殺戮されたり。屋背哀丁の死去は二
二二二年六月十九年の
ことなる可きし正確にその年月を記ししものなし。Cazvin の Zaccaria は地理書 Assar-
il-Bilad の Dunavend の條に於てこれ一二二一年(六一八年)に Kohn-ud-din Goursaidi の籠居を

る城塞なりと云へり。智にはこの城塞は Firouzgouh なりとあり。

Djémal-ud-din は花刺子模親王の最後を聞き蒙古軍に投誠して以てハマダン地方の統治権を保たんことを望めり。成吉思汗の將軍は冊封の證として之に禮服を贈り且服従の誠實なるを示すが爲來り訪はんことを之に促せり。Djémal-ud-din 乃ちその兵營に赴きしに一行と共に悉く殺害されたり。保つてに據る

一二二四年(六一二年)の初に當り成吉思汗が撒馬爾罕地方にありて冬季を過せしとき、蒙古兵約三千人の一隊はホラサンより來りて突然その城下に現はれ、同市の附近に舍營せる花刺子模兵六千人の一隊を襲ひて之を潰走せしめ虐殺を免ぬがれたる住民の再び來りて定住せる Ray に入りて悉くこの薄倖の民を屠り、城内を劫掠して之が滅却の業を完うせり。次に Save も又 Coma 并に Caschan も亦同一の運命に遭へり、最後の二市は蒙古兵の初めて入寇せしときその行軍の途上に當らざりしを以て當時劫掠を受けざりしなり。ハマダンは初次の虐殺を避け

得たるもの之に住ひしが二度猛火と刀劍とに委棄せられたり。この蒙古兵の一隊は同地より更に Azerbidjan に向へり、Ray 附近に敗れたる花刺子模兵の同省に退却せるものは再び攻撃されて著るしき損害を受けたり。その殘兵中 Fedin に避難せるものありしを以て、蒙古兵はこの首府の附近に屯營し君侯 Euzbeg に命じて曰く若し臣隸たらば須らく花刺子模兵を交付せざる可からず、交付する能はずんば敵國として待遇せんと。Euzbeg は敢てこの要求を拒むの勢なくこれら勇士の多數を殺害してその首を蒙古兵の許に送り爾餘の兵士は之れを生きながら交付せり。野蠻人はこの服従の處置に満足し且之と共に齎らせる夥しき貢賦を得て Fedin を距りてホラサン省を指して東歸せり。仁に曰く人は三千を超えず、而して花刺子模兵は之が倍數を有し Euzbeg の兵は兩者を合算せるものより大なりき而も多くの如し云々と。この第二回の入寇は Lac-Adjem の荒廢を完成せり。ホラサンは蹂躪されたり。但しトランスオクシアナは蒙古兵の殘暴に苦みしことこの兩省の如く甚しからざりき。述に曰く成吉思汗の蹂躪せる地方は人口減じて千分の一となれり先に十萬の人口を有せしもの今や僅に百人に満たずと又曰く今日人口の繁殖を妨ぐ

るの事情存せざるにも拘はらずホラサン、イラク、アゲエ
ム両省の人口は蒙古兵征服以前の十分の一に達せずと。

されど波斯の不幸は未だ終局の點に達せるにあらず、更に新に劫掠に
遭ひかくて長日月間野蠻的壓抑の下に呻吟し爲にその荒廢の狀態よ
り回復する能はざりき。

蒙古兵西亞蹂躪の舉は遠くビザンチオン帝國にも亦恐慌を起さしめ
たり皇帝 Jean Ducas は各地の城市に糧食兵器を備辦せしめたり。その臣
民は道路の流言によりて疑懼兵の殘暴を極むるを聞き大に之を恐れ
て思へらくこの征服者は犬の頭を具へ人肉を食ふと。Pachymeres 第一冊並
に Writers' Memorial
Populorum, etc.
第三冊參看。

第九章

親王朮赤の逝
去

成吉思汗は斡魯朶 Orkous に還御ののち間もなく長子朮赤の訃音に接
せり。この親王は裏海并に黒海の北方に横はれる地方 智に據るに Tur-Sibir,
Boulgarie, Kipchakie,

Baschquidie, Russie, Circassie 征服の命令に接せしも之に着手せんともせざりき。成吉
思汗はその命令を遵奉せざるを怒り波斯よりタルタリーを指して進
軍中幾度か之に書を興へて來會せんことを命せしが朮赤は健康の不
良なるを唱へて之を辭せり。而して事實病に惱めるなり。然るに成吉思
汗が斡魯朶に歸れるとき朮赤の地方より來りし一蒙古人に同親王の
近狀を諮ひしに、その健全なるを明言し且その出獵せるを目撃せりと
言へり。成吉思汗は茲に於て又皇子が故意に服従を拒めることを疑は
ず、之を叛徒若くは狂人と見做し怒て往きて之を伐ちて再び義務を守
らしめんと決心せり。窩闊台と察合台とは既に前衛と共に發程し、その
父も亦次で進發せんとせしとき朮赤の訃音を得たり。成吉思汗は爲に
深く慟哭せり、その新に齎らせる情報に據るに曩に蒙古人の報告せし
所は正確を缺きその出獵せるを見たりと云ふは即ち朮赤部下の將校
に過ぎざりしことを示せり、乃ち之を求めて罰せんとせしも遂に之を
獲る能はざりき。

朮赤は齡三十有餘歳にして長逝し、その妻妾との間に約四十人洪鈞曰く、拉施特に四十四人とありの子女を擧げたり。初め母孛兒帖 Borte 朮赤を孕みし時、偶ま鐵木真不在のことありて一隊の蔑兒乞人來りてその居に就きて之を掠めしことあり。汪罕蔑兒乞部の王に向て之を求め、その夫の許に還るを得しめたり。歸途一男子を生みしを以て之に命名して朮赤 Djochi と云へり。蒙古語にて賓客の義なり。鐵木真の命を受けて母后を迎へし使節は殺粉を捏ねて以て嬰兒を包み、母后著衣の裾に收めて騎上之を伴へり。智にかくの如くにして生誕せる親王こそは數世紀間裏海并に黒海北方の大帝國に君臨し露國をもその外藩に數へたる帝王の遠祖なりしなれ。

成吉思汗が波斯を蹂躪せる當時將軍木訶里は支那北部征服のことに當れり。蓋その城市の多くは成吉思汗の退却後金人再び之を占領して防禦工事を施し、蒙古人は僅に中都と直隸山西の北方邊疆を留保せるに過ぎざりき。皇帝吾喀補はこの安寧を得たる短日月の間に於て輕率

北部支那に於ける將軍木訶里の作戦

金帝と宋帝との交戦

にも新に敵國を加へたり。河南の淮水ハライ以南に於ける南部支那の地は浙江の首府杭州に君臨せる支那の舊王朝宋帝の制令を奉せり。皇帝寧宗は蒙古兵と金兵との交戦を辭に傍觀せしが、金の之が爲に孤弱の位地に陥れるに乗じてその之に納付す可き歳貢を廢せり。而して金に於ては新に敵國を加へんことを懼るるの餘りこの條約違反の舉に對して眼を閉ぢたり。加之吾喀補は書を宋帝に與へて蒙古兵に對する同盟締結を提議せんと欲せしが、かくの如きの交渉は自國の無力を暴露するもの支那は我が爲に一臂の勞を貸さずして却て我を攻撃するに至らんとて之を諫止するものありき。然るに成吉思汗の支那より退去するや金の右丞相赫チウフ高カク琪キは吾喀補に説きて歳貢の納付を怠りしことを以て開戦の理由となし、以て宋を攻撃して北方に於て受けたる損害を一七年に一軍を淮水の南方に派遣しこの軍隊は數城を下し宋帝國の領土各地を蹂躪せり。而も間もなく蒙古兵の再び來るや吾喀補は南隣

唐古特侵略

二月

の帝國と絶交せるを悔み、而して戰敗を受けたる宋人は喜んで媾和に應ずるならんと信じ、大使を寧宗の許に派して之を提議せり。加之蒙古人に對して之と攻守同盟を約し得可しと豫期せしも、希望に反して寧宗は敵國狼狽の事情を熟知し、協商締結に同意することを欲せざりき。木訶里は蒙古人契丹人女真人を以て組織せる一軍團に將として一七七年に支那に入れり。之と同時に蒙古兵の一隊は唐古特に侵入し、父李安全の位を襲へる李遵頊の首府に逼りて之を圍めり。この新王は西涼州府に避難せり。木訶里は先づ直隸保定府下の遂城并に蠡州蠡縣を襲取し、次に大名府を下せり。第一回の戰役はこれに了れり。一八一八年の年末に當り大名府を發して山西經略の途に上り、同省の首府太原府を陥れしかば、金の元帥塔爾錦は勇敢に防禦を試みし、後絶望して自ら縊れて死せり。平陽の守將參政李革も亦自殺し、汾州の守將節度使完顔訛出虎并に潞州の守將元帥右監軍納哈塔富拉塔は共に力戰して死せり。木訶里は同年を以て山西の大城八個を陥れ、翌年遂にこの大省の

征服を完うせしが、この間成吉思汗に降れる金將張柔は直隸を徇へたり。

金帝は是より先原文に首府中都を去るに苗道潤を以て中都經略使となし賈瑀を以て副使と爲せり。この兩將は互ひに相軋し賈瑀遂に一二年に至りその同僚を暗殺せしめたり。苗道潤の友なる元帥右監軍張柔之が麾下に屬したる將校を煽動して復讐の師を起さしめ推されてその首領となれり。張柔中山定州に向て進み北京の西南約二十五リトグに位せる紫荆關の要塞より出で來れる蒙古兵の攻撃に遭へり。交戰中乗馬跌きて執へられ主帥明安の許に致されたり。何人たりとも一度蒙古兵の手に陥りたるものは成吉思汗に屈服せざる可からず。然らずんば甘んじて死刑を受けざる可からず。然るに張柔は蒙古の主將の前に於て膝を屈するを欲せず、我も亦これ將軍なり、生命を完うするが爲に屈辱を受くる能はずと云へり。明安はその決心を賞して之を釋放せしも既にしてその往きて集合せる軍隊の將たらんとするを慮りて之

を防ぐが爲その兩親を奪ひて中都に質とせり張柔は久しく孝と忠とに就きて取捨に苦みしが遂に成吉思汗に忠誠を盡すの決心を定め河北都元帥の職を授けられたり河北とは通例黄河以北の地方を指せどもここには單に直隸の南部を包括せるのみ。

張柔は直隸省内の未だ歸服せざる城市を征討す可しとの命令に接し一二一九年五月南方に向て進み幾多の都府を下し苗道潤の爲に復讐せんと欲し往きて賈瑀の籠れる城塞孔山臺を圍めり汲道を断たれて賈瑀の降るやその心臓を剖きて以て道潤の靈に供せり間もなく保定府に近き滿城に於て直隸金軍の司令長官たる眞定經略使武仙に圍まれしが首尾克くその兵を潰走せしめて之に多大の損害を與ふるを得たりこの戦勝に乗じて更に數城を奪ひ次で武仙の派遣し來れる兩枝隊を逐次に撃破せりかくて直隸の各城は風を望んで城門を開き張柔の威名は河北に擴れり。

高麗の歸服

この頃高麗王國も亦成吉思汗に服従せり初め契丹人にして金山元帥

たる六哥 Loukou と云ふもの蒙古の支配を脱のがれんと欲して一二一八年に高麗に入り江東城を奪へり蒙古の將軍哈只吉剌刺 Khadjit-Taha 之を追ふて高麗に至り高麗王の派遣せる軍隊の援を假りてこの城邑を克復せりこの蒙古兵入寇の結果として高麗は歸服しその君主王暉は翌年成吉思汗の臣隸と爲り歲貢として土宜を納付す可きを約せり。

木訶里は一二二〇年に山西より直隸の北部に轉じ保定府附近の滿城に至りて部下の將蒙古不花 Moungou-houca を分遣して武仙部下の一隊と戦はしめて之を破れりこの敗軍の結果として武仙投降し眞定府を始としてその管轄に歸せる爾他の城市をも木訶里に交付せり元帥木訶里は河北西路兵馬のことを權に漢人將軍史天倪に委ね武仙を之が副と爲せり。史天倪は成吉思汗が初めて支那に入寇せるとき夙に仕へて之が臣となれり初め史天倪の父史秉直郷里永清にあり蒙古兵がその抵抗せる

廿二史攷異に
當時史天倪は
萬戸の職を授
けられたるに
あらずして石
抹季迭兒傳に
見ゆるが如く
千戸に擢でら
れたるか或は
報匡行撰木華
黎行録に云へ
るが如く萬戸
を統べたるに
止まらんと考
証しあり。

州縣を猛火鮮血の衢と化し降服せる州縣に殘害を興へざるを見且政
府に州縣を保護するの實力なきを知り傍近の民數千を糾合して之を
引牽し一二一三年に北京の西南數リーグの地に位せる涿州チオウシュに近き木
訶里の牙營に至りて降を乞へり。木訶里は之に萬戸長の職を與へんと
欲せしがその之を拒絶するや乃ちその子史天倪を以てこの職に就か
しめかくて史天倪は後に至りて蒙古人の爲に大功を建てたり。一二二
〇年木訶里山西に轉戰の際史天倪は一日元帥に向て敢て直言してそ
の部下兵士の既に征服せる地方を待つの方法野蠻なるを難じ平定
の業をして成功せしめんと欲せば之に反して服従せる人民を劫掠す
ることなく以て未だ投降せざるの民心をして自から歸嚮せしめざる
可からずと説けり。木訶里はこの諫言の正當なるを認めざる能はず直
ちに令を發して擄掠を禁じ俘虜を放還せしめたり。軍中肅然として規
律行はれ人民の抵抗亦少きを致せり。
この年即ち一二二〇年の初金帝は南方に於ても亦北方に於けるが如

譯者曰く時青
は豫陽公に封
ぜられ本處兵
馬統領元帥兼
宣撫使となる
本文は原文の
儘なり。

く敗軍の不幸に會へるを怒り、この失體を以て珠赫呼高琪建言の罪に
歸せり。この右丞相の殘忍なる所行に出づるや皇帝は遂に之れを失は
んとの決意を爲せり。即ち右丞相は奴隸をして妻を暗殺せしめ而して
この奴隸を殺して以て口を滅せんとせしに事露はれ死刑の宣告を受
けて以てその罪を贖へり。次で宰相の首席に擧げられし將軍時青・シチ
チンは銳意して今なほ金人の所有に屬する州縣防禦の策を講せり。
この間木訶里は山東にその兵を進めしがその東平ツワンピンに至るや彰德府チヤンデフを
始として他に直隸南部、河南の黄河以北、并に山東に於ける七州縣の知
事將軍嚴實・ヤンソクの歸降せるあり。乃ち之をして同地方に於て尙書省
のことは行はしめたり。木訶里は進んで次に山東の首府濟南府チンナンフを奪は
んとせり。多數の軍隊は時に時青の注意によりて黄河の北岸曹州府チョウシュフに
集まれり。濟南附近にありて木訶里を惱まさんとし一萬二千人の一隊
は分遣せられたり。元帥は進んで會戰して之を破り次で敵軍の大部隊
に前進せしに恰かもその黄河の北岸に戰列を布けるに會せり。木訶里

は騎兵隊の矢戦を事として時機を失するを欲せず之に命じて徒歩戦を試み手に劍を握て敵軍を攻撃せしめたり。金兵は第一撃を支ふる能はずして多くは溺死せり。この戦勝の後木訶里は東平に進みこの山東の城市を圍みしが、一ヶ月の末に至り嚴實を止めて長圍の策を執らしめ、親から直隸の洺州(廣平府)に向ひ且その軍を小部隊に分ちて黄河北部各地に横行せしめたり。東平は糧食盡きて行省事の任にありし蒙古綱 Mongou-gan の之を撤退せる後一二二一年の六月に至りて漸く降り。

木訶里は西北の方向を取りて支那北部を横断せる後一二二一年一月東勝州即ち今の托克托城 Fokhs-hoa に於て黄河を渡り突然唐古特に入れり。これ金人の制令を奉ずる陝西の一部を奪ひ途を同省に取りて河南に入り以て南京を攻撃せんと欲せしが爲なり。唐古特王はこの軍隊の來れるを見て狼狽し將軍塔海監府^{トウハイ}を今の鄂爾多斯地方に遣して禮を木訶里に致さしめたり。木訶里は士卒を要求せり。國王乃ち

二月

將軍塔哥甘普 Dake Gampou に命じて五萬人を率ゐて之に加はらしめたり。木訶里は葭州の城市に向て進みしに金將は之を棄てて夙に通れしを以て勝に乗じて綏德州内の兩寨を拔けり。唐古特の將軍迷僕 Mipou は王命を受けて更に兵を率ゐて來會せり。然るにその會見に先ち如何なる儀式を守る可きやを問ふや、木訶里は唐古特王の成吉思汗に對すると同一の禮を施す可しと要求せるを以て迷僕は君王の命令なくんばこの要求に應ずる能はずと答へ兵を率ゐて去りしも木訶里が延安を攻撃せるに際して歸りその要むるが儘に敬禮を盡して之に見へ且その馬の韉を執れり。

二月

金の元帥哈達 Hada 延安を守備せしが、蒙古兵の既に城下に逼るや大兵に將として城門を開き出でて之を襲へり。然るに戦利あらず七千人を失ひて再び城に入れり。木訶里は乃ち之を攻撃せしも城壁堅く塹濠深くして容易に之を下す能はず、故に軍の一部を留めて之が包圍のこ

り。木訶里は一二二二年を以て陝西爾餘州縣の大半を陥れ將軍兀胡乃太不花 *Khounakai-Bouca* に託するにこの大省の首府たる長安(西安府)の警備を命じ將軍按赤(按陳) *Ansai* をして潼關要塞監視の任務に當らしめたり。

南京の朝廷は一二二〇年八月を以て成吉思汗の大本營に向けて烏庫哩仲端 *Ouscouna-Tehoung-kouan* と云へる大使を遣はしその齎らせる文書に於て金の皇帝は蒙古の汗に向て媾和を求め帝號は之を去らざる可きも蒙古の汗を長兄と認めんと提議せり。而もこの提議拒絶せられしかば南京の朝廷は一二二二年の秋再びこの大使を當時なほ西域にありし成吉思汗の許に派して和を請へり。成吉思汗大使に向て曰く曩日朕は金帝に向て黃河以北の地方を割讓し河南を留保して王號を稱せんことを提議せしに帝は之に同意せざりき。今や木訶里既に前記の地方を征服し了るに金帝は前年と同一の條件を以て媾和を求むるか。と大使の之を宥めんと努むるや成吉思汗は之に應じて曰く「可なり、卿

木訶里の死

の遠來を念ふて茲に朕の同意し得可き條件を説かん、河北の地方は既に我有に歸せるも陝西西部の數城は未だ下らず、卿の主君之を朕に割讓し河南を留保して王號を稱す可し」と。仲端はこの條件を得て歸りしが金の皇帝は之を容れざりき。

木訶里は山西に於て更に數城を下せる後一二二三年二月陝西の鳳翔府に逼りて之を圍み四十日間盛んに之を攻撃せり。然るに金の元帥都監侯孝順 *Siao-schou* が黃河東岸に近き要地河中府(蒲州府)を襲ふて之を取り河東關陝行臺のことに任せし石天應 *Se-tien-ying* 戰死せりとの報に接するや、木訶里は直ちに鳳翔の圍を解きて河中に向て進みしかば金軍は倉皇火を之に放て撤退せり。乃ち石幹可 *Sche-tan-ko* に命じて代て父石天應の衆を領せしめて同市を去りしが、往くこと幾許ならずして重患に罹れり。その臨終の近けるを感じ弟帶孫 *Taisoun* に語て曰く「余が君侯の大計畫を輔けて戰役に從事すること四十年而して曾て撃退されたることあるなし。この際余の唯一の遺憾は南京を陥ること能

その子李魯
令長官と爲る

金主珣殂の時日に付き元史(一〇月)金史(二月)の間に相違あり。

四月

はざるにあり、努力して之を下せ」と木訶里は一二二三年四月齡五十四歳にして解州チネーウツヒの聞喜縣に於て逝けり。その子李魯 *Liou* 國王の爵を襲ひて支那占領地方の司令長官となれり。皇帝吾睹補は齡六十一歳治世十一年にして一二二三年十一月を以て殂し養子寧甲速 *Ninkiasou* 帝位を嗣げり。その支那名は守緒 *Sehou-siou* 云ふ。新帝は宋帝に向て平和を提議して干戈を戢めたり。寧宗も亦この年を以て殂し養子理宗帝位に陞れり。宋の將軍彭義斌山東の大部分を征服せるより將軍武仙は之と同盟を結びその聲援を待みて一二二五年三月同僚都元帥史天倪を殺し次で真定府を奪へり。史天倪の弟史天澤 *Shi-tan-tse* は直ちに國王李魯より河北西路都元帥に任せられ武仙を攻撃し之を破りて真定府を克復せしかば武仙は西山に退却せり。蒙古人の爲に直隸の中山(定州)を守備せる支那人李全 *Li-tsun* も亦降服して彭義斌の軍に投せり。彭義斌は李全の降兵を納れて兵勢大に振

四月
八月

廿二史考異に
一二二五年に
中山を以て元
に叛ける李全
と一二二〇年
に叛きて後に
青州に據れる
李全とは同名
異人なりとあ
り。

ひしかば進んで東平を圍めり。嚴實なほ之に將たりしが四ヶ月の終に至り糧食缺乏して又之を支ふる能はず。蒙古に叛きて翻て彭義斌の軍に合せり。かくてこの諸軍は相合して真定府に向て進軍し西山附近に於て蒙古將李里海の軍に遭遇せり。嚴實は彭義斌の己を信せざるを見て平ならず私に之を去るの機會を待てり。故にこの際翻て蒙古軍に投じ之と共に彭義斌を攻撃せしに宛かも史天澤も亦背後より之を襲ひ遂にその軍を破りて之を虜となせり。而もその蒙古汗に忠誠を誓ふ可しとて勸誘さるるや彭義斌は厲聲答へて曰く我は大宋帝國の臣なり豈に他の臣屬とならんやと。遂に慘刑を受けて之に死せり。かくて嚴實は容易に彭義斌の經路せる山東の清河以東をして蒙古の制令を奉せしめたり。李全は山東北部に據り蒙古兵と數ば戦ひしが常に利あらず遂に益都(青州府)に籠りて郡王帶孫に圍まれたり。包圍を受くること一年糧食全く盡きて人肉を食するの極に至るまで能く支へしも遂に一二二七年

成吉思汗の唐古特入寇

六月を以て降り、帶孫は李全をして山東と江蘇の淮南とに於て省事を行はしめ、以て歲貢納付の任に當らしめたり。

北部支那は五年間の戦役によりて荒廢に歸せり。金軍は全然之れを撤兵して、その兵力を黄河の南岸に集注し、且つ陝西より河南に至るの軍道に當れる潼關の城塞隘路を防禦せり。この防禦線全部は約二十萬の士卒を以て之を守り、四行省を立てて之を統帥せしめたり。金帝は又一二二七年に當時唐古特の經路に従事せる成吉思汗の許に大使を派遣せり。以下この戰勝帝王の最後の殘忍なる事蹟に就きて叙する所あらん。

成吉思汗は一二二五年の年末にその幹魯朶を出發して唐古特攻撃の途に上れり。當時の唐古特王は二年前父李遵頊の位を嗣げる李德旺なりしが、成吉思汗の之に對する開戦の理由は仇敵の一人なる亦臘喇翹昆赤膺喝翔昆(Schilgak-san-hona)を納れて臣とせることと王子を質とするを拒めることとこれなり。成吉思汗は皇子察合台をして監視軍に將

として留守に任せしめ、一二二六年二月この王國に入寇せり。窩闊台拖雷は軍に従へり。成吉思汗は翌月 Yeh-tsin 黑水城 Ho-schou-tchin を始として幾多の城邑を占領し、渾垂 Khon-tchou 山脈に於て大暑の時季を過せる後、甘州并に肅州を奪へり。秋に至りて涼州府内の擲羅 Felolo 并に河羅 Khola を取り、沙陀 Schatou を蹙えて黄河の九渡 Kiyou-kou に達し、應里 Yai-その他の第二流の城邑を下せり。據るに這般の地方は悉く猛火鮮血の巷と化せり。綱目の記者は曰く『その民土石を穿鑿して以て鋒鏑を避けし、も免れしものは百に一二すらなく、白骨野を蔽へり』と。成吉思汗はこの遠征を企てしとき、支那占領地の市場に於て一石の米をも將た一匹の布をも發見せざりしより、大に之に驚けり。部下の將校は成吉思汗に説きて曰く、支那の臣民は無用の長物なり、悉くその住民を屠殺し盡して、土地を牧場と爲し、以て之を利用するの優れるに若かずと。耶律楚材はこの野蠻なる建議に反對して、絶叫し、肥沃なる邦土と勤勉なる人民とより受け得可き利益を擧げ、若し土地に程よき租税を課し、商品の關税

を收め酒酢鹽鐵その他山川の土宜より貢賦を出さしめば毎年凡そ銀五十萬オンス、絹布八萬匹、穀物四十萬苞を徵收し得可しと論じ、この人民を以て無用の長物となすを怪めり。成吉思汗は乃ち之に公平なる課税法の制定を囑託せしが耶律楚材の財政計畫は次の治世に至りて始めて實施されたり。

支那の歴史に據れば蒙古の諸將が虐殺されたる唐古特人の幼兒財産を掠むることに狂奔せる際、耶律楚材は支那の遺書數部と大黃の藥材兩駝とを取りて敢てその餘を貪らさず、既にして疾病蒙古軍を襲ふやこの大黃を以て數千の人命を救へりと云ふ。據る。

成吉思汗は唐古特の首府寧夏府の南方少距離にして黄河の東岸に位せる靈州を圍めり、國王李德旺は此年八月を以て歿し、李睨王位を襲へり。唐古特の一軍は嵬名令公 *Yemeng* の指揮を受けて靈州の援兵として派遣されたり。成吉思汗は再び黄河を渡りて之を潰走せしめ、靈州を陥れて之を劫掠し、次で鹽州川の河畔に至りて陣せり。波に據る。呂には唐古特兵三萬を殺さる。

丙戌(一二二六)冬十一月、耶律文正王、從太祖下、靈武諸將爭掠子女玉帛、王獨取香積、數部大黃兩駝而歸。而平中河、疫、惟得大黃、可食所活萬萬人(續新錄第三卷)

一二二月、同王國の征服並に

あり。智には蒙古兵は幾多の城市を下しし後、進んで柔兒蔑該 *Dersakai* (靈州を劫掠せん) とせしに唐古特王國人之多を失都兒忽 *Schilourou* と稱し支那人之を李王 *Liwan* と呼ぶ。その首府 *Irak* 即ち蒙古人の額里合牙 *Irays* を出で五十營 *oumans* 即ち五十萬の兵に至りてして進軍せり。成吉思汗は直に之に向て進み *Can-nouran* 即ち黄河河畔の平原に至りて激戦を試みたり。この平原には河水の氾濫に成り當時既に氷結せる幾多の湖水ありて、激戦を成り唐古特兵の戦場に仆るもの三十萬人、その首を失はざるは僅かに三人に過ぎざり。蓋し蒙古人は十營の戦死者に就きて一人の完全なる屍體を遺せしなり。國 *Vincent* の *Mitoh* *historique* にこの波斯の史家の記事を證す可き節あり曰く、鞑靼兵は敵國の民を屠れる後屍體を計算するが爲千人毎に一個の屍體を高地に倒置し、その首を下にし、その足を上にし、目標となすの習慣を有せしが、一二二一年ナフリスの劫掠に際しては右の目標となせる屍體七個ありしを以て即ち七千人を屠殺せることを示せり。

成吉思汗は唐古特首都の城外に一部隊を駐め一二二七年二月を以て黄河を渡り積石州を下し臨洮府を劫掠し同地より西北に向て轉じ洮河州 *Tchao-ho-tcheou* 并に西寧を滅却せり。之と同時に成吉思汗の弟幹赤斤諾延は信都府 *Sin-tou-fou* に向て分遣され強襲によりて同市を陥れた。據る。

成吉思汗は平涼府の西に位せる龍德に近くその大本營を定めその軍隊は德順州以下の數城を拔けり。次で大使として唐慶 *Thang-tsin* を南京の朝廷に派遣し成吉思汗は大暑の時季を過すが爲に六盤山附近にそ

三月 四月 五月 六月

の兵を進めたり。波に據る處には六盤山は固原州の西二十里、二リ一七九頁には固原州の西南七十里、平涼府内にありと見ゆ。智に曰く六盤山は女前年親王窩闊台は將軍察罕 Tala 眞 Nanghas (宋唐古特三國交界の地にありと。前年親王窩闊台は將軍察罕 Tala) の部隊と共に南京を圍み將軍唐慶 Tang Gung をこの帝都に派して歳幣を金帝に要求せり。一二二七年察罕は西安府内の數城を占領し深く鳳翔府并に漢中府に入れり。金帝の派遣せる兩大使完顏合周 Ouanye n-Khatcho と奧屯阿虎 Okung Ague とは媾和の提議を六盤山に齎らせり。波に據る。金帝の贈れる香物のうちに珠玉を盛れる盤ありしかば成吉思汗は耳璫を帯びたる麾下の將校に之を分配し、或は之を飾るが爲に新に耳朶を穿たしめ、その珠玉のなほ餘れるものは地上に擲ちて人の争て取るに任せたり。邊に據る。

成吉思汗はこの舍營地に於て遼東新王の朝貢を受けたり。曩に成吉思汗の臣隸となりし耶律留哥は一二二〇年を以て死し、その寡婦姚里氏 Yao-lise は爾來成吉思汗の不在中假に東部タルタリーの主權を委託されたるその弟帖木哥幹赤斤の允准を経て攝政のこゝを行ひしが、蒙古

皇帝の波斯より歸るや三子を携へて之が幹魯朶に入觀せり。姚里氏は成吉思汗に謁見するや儀式に従ひてその膝を屈せり。成吉思汗は之に杯を下賜し且之を優遇せり。女主は遼東の地主なく而して長子薛闊曰 Vese が數年以來蒙古汗旗の下を去らずして西域にあるを述べ、之を歸國せしめて父の王位を襲はしめ第二子善哥 Chamcon を質とせんことを請へり。成吉思汗は大に薛闊の功績を讃へそのトランスオクシアナに於て現はせる武功を説き更に語を添へてかゝる良將校を失ふを欲せざれば須らく善哥をして父の位を襲はしめざる可からすと云へり。女主答へて曰く「薛闊は臣の生めるにあらざるも長子なり善哥は臣の實子なり若し夫れ君命に従ひて之をして王位を相續せしめば、或は恐る長子のその權利の臣が母たるの慈愛によりて毀損されたりとの慮を起さんことを」と。成吉思汗はその旨意の公平なるに感じ姚里氏の深慮あるを賞し耶律薛闊を遼東王に任命せり。女主の訣別して去るや成吉思汗は之に支那人の捕虜九人、駿馬九頭、銀塊九個、絹布九匹并に寶玉九

額を贈れり。蓋し九の數は蒙古人の神聖なりとして貴べる所なり。
 薛閣シヤカクは成吉思汗の唐古特出陣中その許に來れり。蒙古皇帝は之にその
 父を保護して金軍に抵抗せる往事を説き、更に語を添へて曰く「卿の父
 は忠誠を表するの質として卿を朕に送れり。朕は卿の父に對すること
 常に弟に對するが如くし、且朕は實子の如く卿を愛す。朕が兄別勒格台
 と共に朕の軍隊を指揮し、共に親密に協同して事に當れ」と。薛閣シヤカクが別を
 告げて我が王國に歸らんとするや、成吉思汗は之を止めて唐古特首府
 占領の役に與るの快樂を之に與へたり。占領の地
 寧夏シヤキヤは全く窮境に陥りしを以て國王李睨リニは七月中使節を成吉思汗の
 許に遣して降を請ひ、單に首府交付に先ちて一ヶ月の猶豫を乞へり。蒙
 古の皇帝は之を承諾し、且將來我が子の如く之を待遇せんことを約束
 せり。次で帝はその大本營を秦州シヤンチウの東方約十二リーグなる西江江畔の
 清水縣シヤンチンに移し、漢に據る。元史には成吉思汗は Sai Koi の地にありて重患に罹
 れり。前年三月益昏塔朗呼圖克 Ongon-talan-coudouk 蒙古語にて Ongon 曠野の渚

唐古特の北境に近く連亘せる 陰山 Ongon 附近の地なり。と稱する地に駐營せるとき、夢にその臨終の
 近けるを感得せるより、各その軍隊を率ゐて五六リーグを距りて滯陣
 せる皇子窩闊台拖雷を招けり。朝餐ののちその帳幕に群れる將校に向
 て暫らく席を去る可きを命じ、殊に兩皇子を傍に召して之に幾多の訓
 諭を與へしが終りに臨んで曰く「兒等よ、朕が事業は終局に近けり。朕が
 神助を得て征服せるの帝國は廣大にしてその中心よりその極端に至
 るの行程正に一年を要す可し。卿等之を保たんことを思はば互に相争
 ふなかれ。敵國に對しては協力して之に當れ。友國の爲に盡すに際して
 は相和合せよ。卿等のうち一人須らく帝位に即かざる可からず。窩闊台
 それ朕が繼嗣たれ。朕が死後この選擇を尊重し、且今この席にあらざる
 察合台をして紛擾を生せしむる勿れ」と。智達に據る。成吉思汗の病に罹れる
 とき皇子のうちその傍にありしは、惟り拖雷のみなりき。その臨終の病
 床に於て重なる將校に對し、深く南京に向て進むに當り取る可きの方
 略を述べて曰く「金の精兵は潼關チュンカンにありて、南は連山に據り、北は大河を

滅亡

成吉思汗殂す

限るを以て遽に破り難し。若し道を宋に假らば宋は金の世讐なるより必ず能く我に許さん。則ち兵を河南の南部なる唐州并に鄧州に下し直ちに大梁を擣かば金急に必ず兵を潼關に徵さん。然れども數萬の衆を以て千里赴援せば人馬疲弊し至ると雖も戦ふ能はず之を破らんこと必せり矣」と。據る。成吉思汗は之と同時に若し眼目せば深く警戒して喪を秘す可きことと唐古特王若し約束の期限に至りて首府より出で來らば之を殺害し次で寧夏の住民を悉く虐殺す可きことを諸將に遺命せり。この遺命は忠實に實行されしが成吉思汗は實に病床にあること一週日ののち。一一二七年八月一日を以て殂せり。時に年六十六、その治世の第二十二年に當れり。波に據る。元史には唐古特王の最後には就捕虜として蒙古に送られたりとあり。著者又曰く太古より以來蒙古人の如く勇猛なるものあるなしその帝國を併す木を抜くが如しと。

成吉思汗の遺骸は秘密に之を蒙古に移せり。その訃報の傳播を妨ぐが爲に、柩を奉じて北歸せる軍隊は長途到る處に於て遭遇せるの民を悉く殺害せり。この一行の克魯倫河源に近き成吉思汗の故土なる大斡魯

タルタリに於けるその葬儀

朶に達するに及びて始めて喪を公にせり。蒙古大帝の遺骸は順次に之れを重なる后妃の斡魯朶に安置せり。親王公主并に諸將は拖雷の邀請によりてこの大帝國の各地より争て之に赴む。柩の前に伏して慟哭し以てその最後の尊敬を表せり。その最も遠隔せる地方より來れるものは三ヶ月の末に至りて漸く來着せりと云ふ。この葬儀了りて後遺骸は斡難克魯倫、土拉三河の發源せる不兒罕哈勒敦山脈中の一峯に埋められたり。曾て一日同地方に狩獵を試みしとき成吉思汗は孤立せる大樹の樹蔭に休息し暫し心地よく空想を逞うせし。後起ちて左右に向てここに埋葬されんことを欲すと語れり。皇子同族諸王等この逸事を聞知せしを以て乃ちその地に葬る可しと命せり。その後間もなく附近の地樹木叢生して密林と化し又成吉思汗の何れの樹下に眠れるやを辨識するものなきに至れり。子孫も亦この森林に埋葬されしもの多く爲に久しく千人の烏梁海人 Ouirangites をして之が警備に當らしめこの勢に報いるが爲その兵役を免せり。この地に建てられたる諸帝王の墓

前には香火絶えず薫りたりされど何人も之に近くを得ず成吉思汗殂してより百年の後までなほ能く保存されたるその四大幹魯朵と等しく神聖視されたり。智に據る Marco Polo には Chincha 以下の諸汗は Altai 山に葬せしものを悉く殺害せしがこれ他界にありて之を主君に仕へしむるを得可しと信ぜしに際してはかくの如くにして二萬人以上を殺せり。一二五九年に死せる大汗 Kougou の送葬に際しては北方に向て Altai 山を越ゆる時は Bargon の野に至るその距離四十日程なりとあり。Bargoues の地方即ち Bargouchin はバイカル湖東にあるを以て Altai 山は Orkhon 河に近き和林的の東北に當る Gambu はその當時のことを叙して成吉思汗家の蒙古王は Han 山をその埋骨の地となす北緯四十七度五十四分北京西經九度三分に位すあり。今 D'Anville の地圖に就きてその地を檢するに幹魯河の水源なる Konyulian 山あり之を綜合するに成吉思汗以下の旅行紀三十九卷に大汗葬儀に近く埋められしこと信す可きに似たり。Jean de Mandeville の旅行紀三十九卷に大汗葬儀に近く埋められしこと信す可きに似たり。置して生けるが如く之に供養することその永眠を撰さざらんが爲之に就きて口を開かざること等を叙す。Hyehalle の蒙古誌には契丹の太祖阿保機の死せしときその墓を他界に伴はしめんとせしことを記す。

第十章

成吉思汗は諸皇子に廣漠たる大帝國を傳へしがその大部分は不毛未

墾の地にして遊牧民族之に住し爾餘の部分は其の兵禍を受けて住民を失へり。その將士は亞細亞の鹵獲品に飽き成吉思汗あるが爲に親から他の民族を凌駕し且その地上の帝王を蔑視して顧みざるを見て之を見ること恰かも神に於けるが如くなりき。成吉思汗以前にありては韃靼種族中蒙古人の如く悲惨なるはなかりき。即ち蒙古人はその家畜と共にタルタリーの最高地にありて最も不良なる天候の下に漂泊せり。その窮乏の一證として傳へ云ふ鐵鎧を有するものは僅に王侯ありしのみと。この野蠻に近き遊牧民族中に於ける一二小部族の部長たりし成吉思汗は多年逆境に立ちて奮闘せし後遂に成功を以てその大望を貫徹するを得たり。先づその會て臣禮を執りたるの王侯に對して戦勝を收め次で戦敗者の部下を旗下に糾合して以て次第に爾餘の韃靼民族を統一し更に之を支那に波斯に引率して道般の繁榮せる帝國をその劫掠に任せたり。成吉思汗の征服せる處は渺茫として涯際なく之を君侯として戴けるの民族は一百に及べり。その得意の際に於け